就て第一に起る所の疑問にして、下新川郡鐘釣附近の片麻岩中の石灰岩中に、接觸鑛物の柘榴石を散點するが如き、又上新川郡蘆　寺の石灰岩中に、石墨を散點するが如きは、片麻岩の迸發性なるを想はしむるに足るも、越前國勝山町より大日峠に至る街道に沿へる龍谷の東方に露はるゝ角閃片麻岩が、硅岩と石墨の片々とを散點する石灰岩を介在するが如き、又其の多少の厚さを有する石灰岩層を殆ど常に伴ふの事實の如きは、片麻岩は純粹の水成岩の變質したるものなることを思はしむるに足るものあり。

越中國東礪波郡高沼の花崗片麻岩中には、扁豆狀を爲せる鱗狀石墨脈を夾入す。其の厚さは最も厚き所に於て三四寸に達す。

片麻岩系の層位構造

片麻岩の層位構造の判然せるものに就て之れを云へば、手取川上流の地なる深瀨附近に於ては、牛首川の兩岸に於て角閃片麻岩と黑雲母片麻岩の互層より成る斷崖を形成し、其の間に敷帶の石灰岩を介み、南北の兩方に急斜し、時に玢岩の小岩脈及び花崗岩脈によりて貫かる。深瀨の北五味島を經て女原にいたれば、南方に急斜せる角閃花崗岩の牛首河畔に露出するあり。更に北進して牛首尾添の二川相會する木滑新に至れば、介殼化石を埋藏せる泥板岩の下に、南西に傾斜せる石灰岩を介在し、南東一ノ瀨の地に至れば、角閃片麻岩と雲母片麻岩との互層となり、又所々に石灰岩を介み、南東若くは東北に急斜し、玢岩閃綠岩及び花崗岩の諸岩脈は、屢〻之れを貫通す。

江沼郡九谷の澗谷に於ては、角閃片麻岩及び雲母片麻岩の累層中には、南西と北東とに傾斜し向斜層を形れる石灰岩を其の間に介在す。勝山街道に沿へる九頭龍川の森川の渡船場に近き所に於ては、片麻岩は石灰岩を伴ひ、花崗岩脈之れを貫通し、七十度の角度を以て北東に傾斜し、其の構成分子の一なる石英は、破碎せられて粒狀を成し、副成分としてヂルコン・燐灰石・綠簾石等を含み、層理極めて分明なり。又勝山町より大日峠に至る街道の龍谷附近の片麻岩は、角閃片麻岩に屬し、硅岩と石墨片を抱ける石灰岩とを其の間に介在し、北方に傾斜す。

庄川溪谷祖山溫泉場附近に露出する片麻岩系は、角閃及び黑雲母片麻岩の兩種より成り、上梨に於ては一尺乃至二尺の石灰岩の二三層を挿みて南東に

傾き、下梨に於ては石灰岩は北東に急斜す。

晶質剝岩系

晶質剝岩系　北陸地方に於ける晶質剝岩系は、其の面積甚だ狹少にして、越中國上新川郡片貝川の北俣谷に、扁豆狀の小區域を爲し、片麻岩に抱擁せられて露出するに過ぎず。主として絹雲母剝岩及び長英千枚岩（長石と石英とを含む）の互層より成り、層向は山軸と平行し南北にして、西に急斜す。絹雲母剝岩は主として絹雲母・黑雲母・石英及び少量の長石と綠簾石とより成り、屢〻毛狀の金紅石を含む。長英千枚岩は綠泥石・黑雲母・石英及び少量の綠簾石及び絹雲母より成る。

古生大統

三　古生大統

所謂越後山脈を構成する古生層の中、村上の東部、村松の東部、北魚沼郡小出島の東邊に散在し、花崗岩の噴出により數多の區域に分かるゝものは、層位頗る錯雜し、一定の層向を有せざるが如きも、北西の層向を有するもの多きに居るが如し。岩石は秩父系の上中部に屬し、主として砂岩及び粘板岩の累層より成り、中に石灰岩・輝綠凝灰岩・硅岩・角岩・アヂノール板岩等を夾めり。

黑部山脈の古生層

**飛驒山脈の外邊に沿ひ露出するものは、其の東北部のもの廣袤最も廣く、層向は西部に在ては外邊と平行するも、北部に在ては稍〻北西に屈曲し、遂に親不知の斷崖を爲して海に入る。其の下部はラヂオラリア硅岩及び粘板岩より成り、上層に至るに從ひ粘板岩を主とし、其の間に砂岩・輝綠凝灰岩の薄層及び石灰岩を夾む。石灰岩は厚さ十米に過ぎざるものにして、西頸城郡板立鑛山及び下新川郡音澤四近に露出す。此の累層を被覆するは硅岩及び輝綠凝灰岩にして、西頸城郡根小屋の硅岩中にはラヂオラリアの遺骸を埋藏す。更に此の上を被覆するは紡綞蟲石灰岩の厚層にして、此の石灰岩は西頸城郡明星山より黑姫山を經て日本海岸に達する禿山を形成す。尙ほ日本海岸の青海には腕足類に富める石灰岩ありて、次の化石を含有す（矢部理學士鑑定）。

古生層石灰岩中の化石

Gastrioceras sp.　　Pleurotomaria sp.
Productus cfr. spiralis Wangen.　　Productus cfr. undatus Defrance.

Spirifer cfr. Oldhaminanus Waagen.　　Acanthocladia.
Polypora, Phyllopora.

此の石灰岩は果して前記紡綞蟲石灰岩の一部に過ぎざるや、或は特別の一帶を爲すものなるや、今日に於ては未定の問題なれども、兩者共に二疊系の下部か、石炭系の上部に屬するものなることを推測するに足るべし。

飛騨山脈西邊の古生層

所謂飛騨山脈の西邊を構成する越前大野地方の古生層の層順は、松島理學士に從へば次の如し。

下部　一、輝岩・斑糲綠
　　二、硅岩
中部　三、下部輝綠凝灰岩・石灰岩・アヂノール板岩・硅岩
　　四、硬砂岩・粘板岩
　　五、赤色石灰質砂岩・礫岩
上部　六、上部輝綠凝灰岩（下部礫質）
　　七、紡綞蟲石灰岩

越前及若狹の古生層

越前の西部及び若狹の大部を構成する古生層は、前卷畿內地方に屬する山城・丹波及び近江に跨がり廣く發育する地層の邊端に位するか故に、之れを組成する岩石の種類及び其の成層の順序の如きも、前編述ぶる所のものと大差なし。今巨智部博士に從ひ、若狹國大飯郡東勢・本郷間に露出するものゝ層順を下層東勢より列記すれば次の如し。

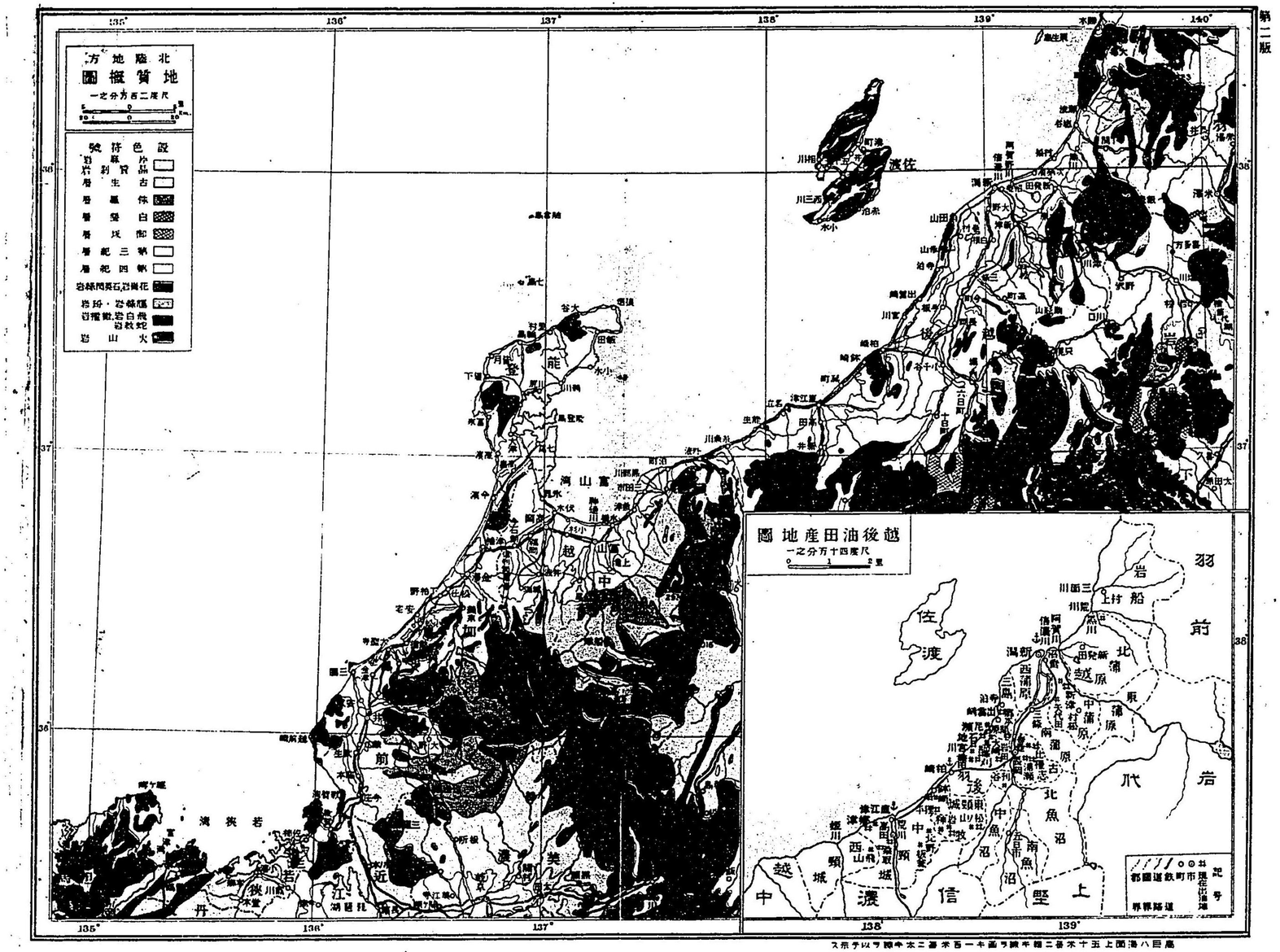
一　粘板岩　　六　粘板岩（極めて片狀のもの）
二　硅岩　　七　硅岩　角岩
三　赤色ラヂオラリア板岩　　八　粘板岩
四　炭質硅板岩　　九　砂岩
五　輝綠凝灰岩（石灰岩此處に出ることあり）

以上は若狹海岸に露出せる古生層の順序中最も正確のものにして、之れを標準として本地方古生層の順序を比較すべきものなり。試みに次の二つを比較對照せんか。

鳥濱より成出に至る斜角南方　　阿野尻より志積に至る斜角北方

古凝灰岩
三　赤色ラヂオラリア板岩
四　硅岩及粘板岩
　　粘板岩
五　輝綠凝灰岩
　　石灰岩
　　輝綠凝灰岩
　　赤色ラヂオラリア板岩
六　粘板岩
七　角岩
七　硅岩及粘板岩
八　粘板岩
九　砂岩
十　粘板岩
十一　角岩

輝綠凝灰岩の最も正式なるものは、遠敷郡大谷に於て石灰岩と伴隨して出づるものにして、暗褐色の地に、石灰岩の微細なる白點を星散す。ラヂオラリア板岩の赭色のものは大飯郡和田山の東北小濱灣内に突出する赤礁崎を構成し、又遠敷郡矢代に露出するものは鐵質硅岩に屬し、三方郡太田より同郡



田代に至る山路に露出するものと同一種なり。尚ほ此の種の岩石にして硯石材として古來有名なるは遠敷郡新保村字撥谷に產する宮川石一名鳳足石にして、硅岩・粘板岩・黑色の角岩・石灰岩諸層の下部に位し、綠色種と赤色種の二つあり、東西の層向を有し、殆ど水平の位置を占む。

角岩は堅實にして水蝕風化の作用に抵抗する力强きを以て、時に急峻奇拔なる峯巒を構成し、時に神工鬼削の怪石となり、大に風景の佳趣を添ふるものあり。彼の三方郡三方湖邊に於ける風景絕佳の成出の地は、後に突兀たる角岩の山地を負ひ、前に一碧萬頃の鏡湖を控へ、山水の風致大に人目を娛ましむるを以て著名なる所なり。

石灰岩は諸所に其の露出を見る。殊に遠敷郡西小川・志積・大谷・新保・海士阪等に露出するものは其の著しきものにして、就中志積及大谷のものは、フズリナ其の他多數の化石を包含し、大谷に於て褐色凝灰岩に接する部分は、紫褐色の斑紋を有し、文房具其の他の裝飾石材と爲すに足る。

遠敷郡若狹に露出する粘板岩は、普通のものと大に其の趣きを異にし、黑

色にして礫岩の組織を有し、稜角ある硅岩の塊片を層間に挿み、地層は多大の壓力を受けたる狀を呈せり。層向東西にして、二十五度乃至三十度の角度を以て正北に傾斜す。

佐渡の古生層

佐渡に於ては同島最古の岩層として、大佐渡の最北部及び小佐渡の前濱及び東濱に各、狹隘なる區域をなして秩父古生層の露出するを見る。岩石は緻密乃至細粒にして、白色乃至黝色を帶ぶる硅岩、綠色乃至暗赤色にして、時に角礫質に移化する輝綠凝灰岩、緻密乃至細粒の砂岩、黝色乃至黑色の粘板岩、緻密にして、暗黝色を帶ぶる角岩等にして、他の地方に於て普通に之れを見る石灰岩、ラヂオラリア板岩の如きは佐渡に於ては全く其の露出を見ず。中島博士に據れば蓋し秩父系の中部に屬するものならんと云ふ。

大佐渡の古生層

大佐渡北部に露出する古生層は、概ね北三四十度東の層向を有し、西北に緩斜して、屢〻花崗岩閃綠岩等の貫入岩を以て貫通せられ、硅岩の上を被覆する輝綠凝灰岩の特に厚く發育せるを見る。鷲崎以南內海府沿道には屢〻硅岩凝灰岩及び砂岩粘板岩の累層を見、層位東西に偏して中部に一の背斜層を形成せり。此の沿岸に於て凝灰岩及び砂岩の往々にして角礫質に移過するを見る。

小佐渡の古生層

小佐渡の東岸に露出する古生層に就て之れを云へば東鵜島より岩首に至る街道の硅岩は三四十度の角度を以て西に斜下し、岩首以南に於ては同樣の岩石は南に傾斜するを見、多田以南に於ては凝灰岩を載ける粘板岩及び砂岩の累層が、北三四十度東の層向を有し、東南に緩斜若くは急斜するを見、多田以西小倉峠に至る沿道には、砂岩及び粘板岩の互層が五六十度の角度を以て南に傾斜するを見るが如き、構造甚だ區々にして複雜を極めり。

四　中生大統附御坂層

北陸地方の中生大統

本地方に於ける中生大統の發育は、其の廣袤必ずしも他地方に比して狹少なりと云ふべからざるも、孰れも上中部の侏羅系に屬し、下部の三疊系及上部の白堊系に屬する地層は未だ全く之れを發見せず。而して本地方の侏羅系は、北上地方及び長門に現はるゝものとは全然其の性質を異にし、半鹹半淡水中に沈澱堆積したるものなることは、其の內より出だす多數の動植物の化

手取川渓谷の侏羅層

石によりて之れを知るを得べし。横山博士の謂はゆる手取統と稱せるもの即ち是れなり。

加賀手取川渓谷の侏羅紀植物化石は日本の植物化石研究の歴史上輕々に看過すべからざるものにして、實に日本の植物化石を科學的に研究したるは、西歴紀元一千八百七十七年ガイレル氏Dr. H. Th. Geyler が、ライン氏Dr. J. Rein の採集に係る此の地産の侏羅紀植物化石の十二種を記載せしを以て嚆矢とす。其の後手取川渓谷の名は大に我が國の地質學者間に有名となり、小藤・巨智部・横山等の諸博士を始めとし、其の他の地質學者の鐵槌を手取川渓谷に揮ふもの甚だ少からざるに至れり。殊に其の化石の保存極めて良好にして、且つ其種類と個數とに富むを以て、單に化石採集の目的を有するものにても、慥に之を踏査するの價値あるものなり。此の地方の侏羅層は、加賀・飛驒・越前の三國に跨り、北緯三十六度二十分と同三十五度五十分の間に亘り、略菱形を形成す。岩石は砂岩・泥板岩及び礫岩より成り、東北の層向を有し、十度乃至十五度の角度を以て西北に傾斜す。此の地層より出だす化石は夥多にして、孰れもオストラコーダ・軟體類若くは植物に屬し、其の多くは淡水成若くは半鹹半淡水成なることを示す。而して介殼層は常に植物層の下部に位す。

侏羅紀化石の産地

植物化石は介殼化石より其の數多く、次の諸處より産す。

加賀國島村

一、加賀國島村。手取川(白山川)の上流約十五里の所にありて海拔四百十三米に位す。化石は黄黝色の砂岩中に産し、保存良好なり、砂岩は又泥質なるときは暗黝色を呈し、雲母質なるときは紅色を帶ぶ。

同柳谷

二、同柳谷。柳谷は島村を距る數里の上流にあり。植物及介殼化石は河谷の礫中に出づ。

同尾添

三、同尾添(オソイ)。島村の東北三里許、手取川の一支流尾添川に沿ふて侏羅層の基盤を形成する片麻岩の上に横はり、砂岩及び礫岩を被覆する厚さ一乃至二米の黑色砂質泥板岩中より植物化石を出だす。拾五度乃至二十度の角度を以て北方に傾斜す。

越前箱ヶ瀬

四、越前國箱ヶ瀬。九頭龍川の上流、美濃の國境に甚だ近き所にありて、大野の東南殆ど十里の處に位す。層向は概ね西北にして、一の向斜層を成す。

同谷村

植物化石は暗黝色の砂質泥板岩中より出で、保存極めて良好なり。

五、同谷村。越前勝山より、手取川畔牛首に至る道路に沿ふて存在し、島村の南六里海拔二百九十三米の所にあり。植物化石は白色にして植物の印象を存する砂岩及び礫岩の上を被ふ暗色にして雲母を多く含む泥質砂岩中より出で、又オストラコーダを含む。

以上諸地方より出でたる植物化石は、凡て横山博士の鑑定に係り、之を表示すれば次の如し。

植物化石の名

CRYPTOGAMAE 隱花植物

FILICACAE 羊齒科

植物化石學名	越前		加賀		
	箱瀬	谷村	島村	柳谷	尾添
1. Thyrsopteris prisca Eichw.	−	−	+	−	−
2. Thyrsopteris kagensis Yok.	−	+	+	−	−
3. Dicksonia gracilis Hr.	−	−	+	−	−
4. Dicksonia acutiloba Hr. var.	−	−	+	−	−
5. Dicksonia cfr. Glehniana Hr.	+	−	−	−	−
6. Dicksonia nephrocarpa Bunb.	−	−	+	−	−
7. Onychiopsis elongata Geyl.	+	+	+	+	+
8. Adiantites Heerianus Yok.	−	−	+	−	−
9. Adiantites Kochibeanus Yok.	−	−	+	−	−
10. Adiantites lanceus Yok.	+	−	−	−	−
11. Asplenium Whitbiense Brgt.	−	−	+	−	+
12. Asplenium argutulum Hr.	+	−	+	−	+
13. Asplenium distans Hr.	+	−	+	−	+
14. Sphenopteris sp.	+	−	−	−	−
15. Pecopteris exilis Phill.	−	−	+	−	−
16. Pecopteris Saportana Hr.	−	−	+	−	−
17. Taeniopteris (?)	−	−	−	−	+
18. Macrotaeniopteris cfr. Richthofeni Schenck.	−	−	+	−	−
RHIZOCARPEAE 殖類					
19. Sagenopteris sp.	−	−	−	−	+

PHANEROGAMAE 顯花植物

CYCADEACEAE 蘇鐵科

20. Anomozamites sp.	−	−	+	−	−
21. Nilssonia orientalis Hr.	+	−	−	−	−
22. Nilssonia ozeana Yok.	−	−	−	−	+
23. Nilssonia nipponensis Yok.	−	−	+	−	−

24. Nilssonia (?)	+	+	+	+	+	+
25. Dioonites Kotoei Yok.	+	+	+	+	+	+
26. Zamites parvifolius Geyl.	+	+	+	+	+	+
27 Podozamites lanceolatus Lind.	+	+	+	+	+	+
var. b. intermedia Hr.	+	+	+	+	+	+
var. c. Eichwaldi Hr.	+	+	+	+	+	+
var. d. minor Hr.	+	+	+	+	+	+
var. e. latifolia Hr.	+	+	+	+	+	+
var. f.	+	+	+	+	+	+
28 Podozamites tenuistriatus Geyl.	+	+	+	+	+	+
29. Podozamites Reinii Geyl.	+	+	+	+	+	+
30. Podozamites sp.	+	+	+	+	+	+
31. Dictyozamites indicus Fatm. var. distans.	+	+	+	+	+	+
32. Dictyozamites grossinervis Yok.	+	+	+	+	+	+
33. Cycadeospermum japonicum Geyl.	+	+	+	+	+	+
CONIFERAE 松柏科						
34. Ginkgodium Nathorsti Yok.	+	+	+	+	+	+
35. Ginkgo cfr. lepida Hr.	+	+	+	+	+	+
36. Ginkgo sibirica Hr.	+	+	+	+	+	+
37. Czekanowskia rigida Hr. (?)	+	+	+	+	+	+
38. Taxites sp.	+	+	+	+	+	+
39. Taxites sp.	+	+	+	+	+	+

40. Pinus cfr. prodromus Hr.	+	+	+	+	+	+
41. Pinus Nordenskjoldi Hr.	+	+	+	+	+	+
42. Palissya sp.	+	+	+	+	+	+
INCERTAE SEDIS 所屬不明植物						
43. Vallisneritites jurassicus Hr.(?)	+	+	+	+	+	+
44. Carpolithes ginkgoides Yok.	+	+	+	+	+	+

侏羅紀の時代

横山博士に從へば、以上の化石中十九種は、シベリア・スピッベルゲン・ヨークシャイアより出だす所の化石に符號し、其の中部侏羅層乃ち褐侏羅層の上部に相當するものなりと云ふ。

以上侏羅層が越中上新川郡山中有峯及び越前・美濃國界附近に於けるが如く、時として薄き石炭層を含むことあるは、亦た以て其の半鹹半淡の水中に成生せしものなることを知るに足るべし。

越中・越後國界の侏羅紀層

越中・越後兩國界附近に發達する侏羅紀層は、下部は礫岩より成り、中部は砂岩及び泥板岩の互層より成り、上部は泥板岩の累層より成り、越後國西頸城郡橋立に露出する下部の砂岩中よりはサイヶナの介化石を出だし、其の上に重疊する砂岩・泥板岩の累層中には、無焰質石炭の薄層を挿間し、同郡上路

及び越中國下新川郡太平附近に露出する泥板岩及び砂岩よりは、次の如き介化石及び植物化石を出だす。

砂岩及び泥板岩中の介化石は次の如し。

Cyrena sp.　Corbicula sp.
Melania sp.

泥板岩中の植物化石は次の如し。

Podozamites lanceolatus Z. et H. var. genuina Hr.(?)
Podozamites lanceolatus Z. et H. var. intermedia Hr.
Asplenium argutulum Hr.
Asplenium Whitbiense Brgt. sp.
Nilssonia sp.　Dionites sp.
Microtaeniopteris sp.

尙ほ橋立の東南及び上路に在ては、數條の玢岩脈によりて貫通せられ、太平及び寺山に於ては玢岩の岩床を挿み、太平に在ては又石炭の薄層を夾む。

下新川郡小川附近に露出する侏羅層は、流紋岩の爲に貫通せられ、接觸變質を生じ、砂岩及び礫岩は暗黝色を帶び、接觸鑛物として黑雲母を生ぜり。

同上愛本橋に露出する者は、下部に泥板岩あり、玢岩質凝灰岩其の上を被

越前大野郡の侏羅紀アンモナイト

覆し、其の中に玢岩の岩床を挿み、別に化石を發見せざるも、岩石の性質上より侏羅層とせられたるものなり。

有峯山附近の水須よりは、數種の植物化石を產するも、多くは保存不良にして漸く次の二種を識別し得るに過ぎず。

Aspidium sp.　Thyrsopteris sp.

越前大野郡貝皿に於て松島理學士は曾て侏羅紀アンモナイトの數種を得られたるが、此處に於ては礫岩層の上に泥板岩・砂岩の累層あり、其の下部にアンモナイト層、中部に植物化石層、上部にサイレナ層あり。横山博士の研究に據れば、此のアンモナイトは

Perisphinctes Matsushimai Yok.
Perisphinctes Hikii Yok.
Perisphinctes kaizaranus Yok.
Perisphinctes Kochibei Yok.
Perisphinctes sp.
Oppelia echinozonica Yok.

にして、此の地層の上部侏羅紀に屬するを示すと云ふ。

御坂層

御坂層　富士火山附近に於て從來御坂層の名を以て呼ばれたるものは、川口湖畔に於けるオルビトイデス石灰岩を含む第三紀層と層位上區別する能はざるを以て、是れ亦た共に第三紀層に屬する者の如しと雖も、他の地方に發達せる謂はゆる御坂層と稱するものも亦富士四近の者と同じく第三紀層に屬すべきや否やは未だ全く證明せられざるの事實なるを以て、今御坂層なる舊名を保存し、中生層を終るに當り其の梗概を左に記述す。

本區域に於ける御坂層は、主として越後南魚沼郡中魚沼郡等の地に發達し、綠黝黑白等の雜色を呈する凝灰岩黑色堅硬の泥板岩凝灰質角礫岩礫岩砂岩等より成り、就中凝灰岩の變質したるものは、肉眼上時としては顯微鏡上石英斑岩石英玢岩等の火成岩と區別すること頗る難きものあり。即ち三國街道三俣以北に露出する者の如き是れなり。又關より田尻に至る沿道に露出する泥板岩中には黑色緻密にして角岩の如き外觀を呈するものあり。土橋川の東に露出する凝灰岩中には玢岩若くは輝綠岩の岩床を挿入す。

新生大統
第三系

五　新生大統

第三系　中生層に次て生成したる第三紀層は、北陸地方に於て最も廣く發達する岩層にして、且つ本邦の鑛業上極めて重要なる含油層を介在し、燐酸肥料の原料となるべき燐鑛を產出し、一國の重もなる富源の一なる鑛脈を胚胎し、時々褐炭の薄層を其の間に挿み、應用地質上極めて重要なる位置を占む。固より其の褐炭の如きは概ね薄層にして、巾二尺を超過するもの少く、殆ど實用に適するものなきも、石油の如きは其の產額の大なる本邦他に其の比を見ざるものにして、是れに由りて以て大に外國の輸入を防ぐに足るものあり。

此くの如き第三紀層を構成する岩石は、主として泥板岩砂岩礫岩角礫岩及び凝灰岩にして、其の泥板岩砂岩の如きも概ね多少凝灰質を帶び、純粹の水成岩たるものは殆ど稀なり。蓋し其の成生の際火山の活動極めて活潑にして、灰砂泥土等を盛に噴出し、以て之れを當時の海底に沈澱堆積したるを知るに

北陸第三系の時代

足るべし。從つて純粹の者に加ふるに更に凝灰質泥板岩・凝灰質砂岩・凝灰質礫岩・凝灰質角礫岩等の多く發育するを見る。礫岩は火山岩礫を多く包含し、膠結物粗鬆柔軟なるものと、片麻岩・硅岩等の如き古代の岩石礫を多く含み、堅緻なるものとの二種あり。砂岩は主として長石・石英・雲母を含む所の花崗岩質のものあり。石英長石を多く含み、石灰質を帶び堅硬なるものあり、長石・輝石の粒子を多く含み柔軟なるものあり。色は褐・黝・白・綠等種々ありて一定せず。泥板岩は多くは軟弱にして黝色を常とし、時として白色緻密なるあり、黝色堅硬にして石灰質なるあり、或は泥灰質を帶び團塊（ノヂュール）を爲して出づるものあり。其の他白色又は黝色の地に、綠色若くは白黝色の凝灰岩片を點々混ずる凝灰質角礫岩あり、凝灰質物中に浮石の碎片を雜ゆる浮石質角礫岩あり。尙ほ凝灰岩には其の由りて來る所の火山岩の性質如何に從ひ、流紋岩質凝灰岩富士岩質凝灰岩・玄武岩質凝灰岩等の區別あり。

以上第三紀層よりは、化石の產出必ずしも稀なりと云ふべからざるも、普通の種類に屬する者の外、著名なる標準化石を產すること無きを以て、精密

北陸第三紀の構造

なる地質年代の分類は、之れを企つる能はずして、恐くは總て第三紀新層に屬すべきものなるべきも、單に之れを岩石學上より云へば、北陸地方の第三紀層は之れを分ちて上下の二部と爲すとを得べし。此の上部及び下部第三紀層は等しく礫岩・砂岩・泥板岩・凝灰岩等より成るも、前者は組織概ね粗鬆にして、凝結十分ならず、其の最上部は時に第四紀古層と區別すべからざることあるに反し、後者は組織稍〻强固にして、古代岩石の碎片を多く雜へ、合油層を介在し、鑛脈を胚胎し、上部に稀なる石英を凝灰質岩中に含むもの多きの差あるのみ。然れども此の兩者は其の間に不整合線を認むる能はずして常に漸次に上部より下部に移化す。

飜つて其の層位構造を見るに、地盤時に陷落し、地層時に連絡を斷ちて謂はゆる斷層を生じ、種々の地變を受けたるを以て、層向の如き殆ど隨處其の趣きを異にし一定せずと雖も、大體に於て北々東の層向を有し、幾多の脊斜及び向斜を構成し、傾斜の角度の如きも、極めて緩慢なるものより、殆ど直立するに至るものあり。而して下部は上部に比して傾斜概ね急峻にして、且

つ褶曲斷層に富むを常とす。

越後國東頸城郡大荒戸に於ては、石油坑を開掘したる際、泥板岩中より多くの巨大なる Conchocele disjuncta Gabb. の介殼化石を出だせり。尙ほ同種の化石は刈羽郡平井の稍〻堅硬なる砂岩層中より出だし、又西頸城郡東飛山にも之れを產せり。

同郡田代の砂岩層中より次の介殼化石を出だせり。

Ostrea sp.　Pectunculus sp.

同郡小池の凝灰岩中よりは多くの Ostrea sp. 及び炭化せる木片を出だし、刈羽郡相澤の泥板岩中よりは Cyrena sp. を出だし、古志郡小貫の礫岩層中よりは次の數種を產せり。

Pectunculus alboliineatus L.　Natica sp.
Pecten sp.

尙ほ岩崎理學士の米山火山地質調査報文に據れば、刈羽郡黑姬山の東なる大瀧の入りに於ては、礫岩中より Nucula sp. を出だし、同郡尾神嶽と兜巾山の

（以上化石の產地及び名稱は米山圖幅地質說明書に據る）

米山附近第三紀層の化石

溪間に於ては、砂岩中に Conchocele disjuncta Gabb. の巨大なるものを含み、同郡阿相島村の砂岩及び凝灰岩の互層中よりは次の介殼化石を出だせり。

Gastropoda 腹足類
Natica sp.　Turbo sp.
Mangelia sp.　Turritella sp.
Cypraea sp.　Nassa japonica Lisch.
Lamellibranchiata 葉鰓類
Pecten sp.　Pectunculus alboliineatus L.

同郡安田村よりは、次の三種を出だせり。

Pectunculus alboliineatus L.　Pecten sp.
Thracia sp.

岩崎理學士は米山地方に發達せる第三紀層をば、其の層向の點よりして之れを內地地方と海岸地方との二つに分ち、又之れを組成する岩石よりして上部澤根第三紀層と、下部澤根第三紀層の二部に分てり。內地地方第三紀層の層向は概ね北十度東にして、海岸地方にては之れと直角即ち北八十度西なり。

上部澤根第三紀層を構成する岩石は、脆弱にして多くは指頭にて之れを破碎すべく、大部は石灰質の凝灰岩にして概ね斜長石及び輝石の破片より成り、時に多少の砂岩を雜へ、兜巾山の東、黑姫山の西なる阿相島附近の地に最も能く發達す。概して大なる斷層と屈曲とに乏しきも、時には其の一部分甚だしく混亂することあり。

下部澤根第三紀層は前者の下に位し、岩石は前者と同じく凝灰質のものに富むも、前者に比すれば甚だ堅く、容易に指頭を以て碎くべからず。且つ往々にして石英斑岩閃綠岩・ラヂオラリア板岩・角岩・凝灰岩等の古期の礫を含み、凝灰岩中には屢〻石英の破片を含むことあり。鉢崎驛の東米山峠第一の坂路壁が鼻に其の好露出あり。

妙高火山附近の第三紀層化石

岩崎學士は又上部に特有なる化石を Pecten albolineatus L. とし、下部に特有なる化石を Conchocele disjuncta Gabb. とせり。

妙高火山の基礎を形成せる第三紀層の化石及び產地は次の如し。

中頸城郡五智

Juglans sp.
Fagus cfr. japonica Max.
Fagus sylvatica L.
Cyperus sp.

同郡鄕津

Arca sp.
Pecten yessoensis Jay.
Natica janthostoma Desh?
Trophon Gunneri Loven.
Pectunculus albolineatus L.
Turritella erosa Couthouy.
Pleurotoma sp.
Trophon sp.

同郡南葉山

Juglans cfr. acuminata Al. Br.

西頸城郡崩村

Venus sp.

佐渡の第三紀層

其の他又五智に於ては山毛欅(Fagus)屬に於て二種の果實、一種の種子、山椒(Zanthoxylum)屬に於て一種の果實を出だせり。

佐渡の第三紀層も亦越後に於けると同じく、新舊の二層ありて、新層は眞野灣頭澤根附近に能く發育するを以て中島博士が澤根第三紀層と命名したる

ものにして、舊層は古來有名なる鑛脈を包藏する相川鑛山四近の地に能く發達するを以て、相川第三紀層と命名したるものなり。

相川第三紀層

相川第三紀層は大佐渡に在りては山軸の走向と平行なる層向を有し、西北に斜下し、小佐渡にありては東南乃至南に斜下するを普通とするが如きも、屢褶曲して背斜及向斜を形成し、傾斜の如きも東北或は東南の事あり。角度は概ね緩慢にして五十度に達すること稀なり。且つ斷層及び裂罅は縱横に地層中に起り、此の斷層及び裂罅に沿うて應用上殊に須要なる幾多の鑛脈を胚胎すること、相川・五十里・澤根を始めとし、小川・達者・北狄・戸中等に於けるが如きものあり。此の斷層の方向の如きも、相川四近に於ては多少一定するが如きも、他の地方に在ては、必ずしも然らざるは、其の到る所同時に發生したるものに非るに由るならん。

相川第三紀層の化石

相川第三紀層中よりは、化石を發見すること稀ならず。其の重もなるものは次の如し。

大佐渡外海府戸地・戸中間の沿道方言「ドヤ」と稱する洞窟を西北に距ること約一千米の平根崎を構成する凝灰質砂岩中には、多くの介殼化石を埋藏するも、其の識別に足るもの次の如し(横山博士鑑定)。

Brachiopoda 腕足類

Terebratella coreanica Ad. et Rve.　Terebratulla sp.

Lamellibranchiata 葉頭類

Pecten sp. (P. prica L.?)

外海府春日岬・大浦・稻鯨等より、建築石材として採掘する凝灰岩層の下部に位する、砂岩及び礫岩の累層中に巨多の介殼化石を埋藏するも、多くは其模型にして、Arca sp. 及び Cardita sp. を除く外、之れを識別する能はず。

小佐渡の化石

小佐渡龜脇附近に露出する泥灰質白雲岩中よりは、數種の魚骨、數種の木葉及び蟹に類する化石を出だす。其の詳細は未だ專門學士の考定を經ざるを以て茲に斷言する能はざるも、木葉化石中には Sequoia sp. 及び Taxodium sp. の如きあり、又濶葉樹ありて、之を他地方産出の者と比較對照せば、其の岩層の地質年代を確定するに足るものあるべし。

泥灰質白雲岩

以上の化石を埋藏する泥灰質白雲岩は、佐渡の第三紀層に特有なる岩石に

して、相川鑛山にてマールと稱し、熔融劑として使用するもの是れなり、多く西濱龜脇附近の海岸に露出し、其の他澤根第三紀層の泥板岩中に團塊を爲して產す。地質調査所分析課にて分析せる結果次の如し。

不溶殘滓	Insol. Residue	9.90
礬土	Al_2O_3	0.70
第二酸化鐵	Fe_2O_3	
炭酸カルシュム	$CaCO_3$	51.02
炭酸マグネシュム	$MgCO_3$	38.24
合計		99.86

龜甲石

此の泥灰質白雲岩は、多くの乾裂（サンスクラック）を有し、其の裂隙に脈狀の方解石・白雲石及び稀に石英を充塡し所謂龜甲石（ヒシガタリン）を爲すもの多し。而して其の側壁に近き所は常に白雲石にして、脈の中央部は或は白雲石たり、或は苦土方解石たり、或は純粹の方解石たり、而して又中央線に對し對稱的に排列せらる。殊に澤根より相川に通ずる舊道の山中にある龜石或は白龜石と稱するものゝ如きは、長徑約一間半の楕圓形扁平の白雲岩の龜甲石にして、表部に六角の模樣判然

として印せられ、恰も大龜の平臥したらんが如き狀を呈す。

以上泥灰質白雲岩は、多く相川第三紀層に屬するものゝ如きも、澤根第三紀層中に團塊を爲して存すること亦少からず。

澤根第三紀層

澤根第三紀層は、相川第三紀層より一層新紀の成生に係り、主として凝灰質泥板岩より成り、往々にして泥灰質白雲岩を夾雜す。多くは極めて狹隘なる區域に離隔散點し、たゞ小佐渡羽茂川流域及び西浦半島の內部を占領するもの較〻廣濶なるに過ぎず。

大佐渡外海府の關〻矢柄間に火山岩を以て圍繞せられ、小區域を爲して露出せるものは、北に於ては東北に傾斜し、南に於ては西南に傾斜し、即ち中央に於て一背斜を形り、其の淡色の凝灰岩中に巨多の木葉化石を含むと雖も、保存概ね良好ならず。其の內識別に足るもの次の如し。

Pinus sp.
Betula sp.
Alnus sp. (cfr. incana Willd.)
Tilia sp.

大佐渡中に最も廣濶なる區域を占領する相川より澤根に至る中山沿道一帶

の地域を占むる澤根第三紀層は、概ね東南に緩斜し、其の中山峠以南の凝灰岩中に夾雜せる泥灰質白雲岩中には、魚類介殼等の化石を埋藏す。

澤根より溪流を登る大約千五百米の介ヶ澤に露出するものは、約三十度の角度を以て東南に傾斜し、其の砂質泥板岩中より次の化石を出だす。

澤根介ヶ澤の化石

Pecten yessoiensis Jay.
Astarte sp.
Terebratula sp.
Pecten Swiftii Bern.
Pectunculus sp.
Scutella sp.

澤根の西端眞野灣に臨みて絶壁を成し中山新道に露出せるものゝ最上部を占め、石礫の薄層を挿める藍色の凝灰質泥板岩層は層位殆ど平坦にして、下部に巨多の介殼・多孔蟲類及び木葉化石を出だす。木葉化石は識別するに足らざるも、介殼及び有孔蟲類の識別を經たるものは次の如し。

中山峠の化石

Biloculina sp.
Fusus inconstans Lischke.
Columbella scripta Linne.
Natica sp.
Odostomia sp.
Globulus superbus Gld.
Triloculina sp.
Nassa sp.
Natica sp.
Monoptygma sp.
Chemnitzia sp.
Pleurotoma sp.

小佐渡の澤根第三紀層

Bulla cylindrica Pennant.
Patella sp.
Astarte sp.
Lucina borealis Linné.
Leda sp.
Dentalium entali L.
Cyclina sinensis Gmelin.
Laevicardium bullatum H. & A. Adams.
Pectunculus glycimeris Linné.
Pecten sp.

小佐渡に最も廣く發達する澤根第三紀層は、靜平・下川茂間なる峠の東、海拔三百米以上の高地に起り、吹上坂を經て概ね羽茂川の流路に沿ひ、前濱及び小木町間の街道に彌蔓し、飯岡及び本郷の泥板岩には魚類の化石を出だし、俗に之を鮎石と稱す。西岸堂ノ釜以南の海岸には、迸發せる輝石富士岩の爲に接觸變質を受け、泥板岩は燧石或は試金石の如き堅硬緻密なるものとなり居れり。

越中中新波郡の第三紀層

越中蠣波郡に於て片麻岩系と侏羅紀層とを被覆し、富士岩若くは流紋岩に由りて破らるゝ第三紀層は、概ね凝灰質又は火山質角礫岩より成り、下梨附近厚朴谷に於ては、火山質角礫岩下に位する、堅實にして黝色を呈する凝灰質泥板岩中に、木葉化石を出だすも、保存不良にして其の屬種を識別すべからず。

加賀石川郡第三紀層

加賀石川郡に發達する第三紀層は、主として白色にして綠色の斑紋を有する凝灰質角礫岩より成り、其の間に往々にして凝灰質砂岩又は火山質礫岩を雜へ、西市瀨に於て、淺野川に沿へる凝灰質砂岩中より、オペルクリナ Operculina に屬する多孔蟲と、次の如き介殼化石とを出だす。

Fusus sp.
Ringicula arctata Gould.
Globulus superbus Gould.
Yoldia sp.
Tellina sp.
Venus sp.
Cardium multiorum Reeve.
Nassa sp.
Odostomia planata Gould.
Dentalium entale Linné.
Solen sp.
Tapes sp.
Cytherea meretrix Linné.

越前牛ヶ谷の第三紀層

又能美郡尾小屋と丸山との間に位するコヒヤク峠に於ては、凝灰質泥板岩中に菱の實 Trapa boreoalis Hr. var. major. の化石を出だし、江沼郡犬上の凝灰岩中には、Carpinus sp; 等の木葉化石を產す。

越前大野郡勝山町の北一里半牛ヶ谷地內なる小字アシダニに於て、砂岩と互層せる白黝色の凝灰質泥板岩中には、次の如き完全なる木葉化石を出だす。

Fagus japonica Max. fossilis. 多し
Polygonum cuspidatum Sieb. fossile.
Phyllites sp.

福井市附近の凝灰岩中よりは俗に石の節と稱し、鮫の齒の化石を出だす。又能登半島の凝灰岩中よりも、多數の鮫の齒の化石を出だす。

第四紀古層

第四系

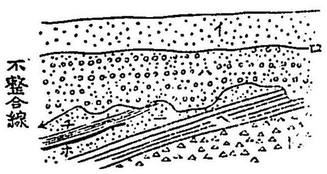
北陸地方に於ける第四紀古層は、近畿地方其の他に於けるものと大同小異にして、主として壇堆・砂・礫・粘土の水平層より成り、或は越城端の南なる塔尾附近に於けるが如く、原野を造りて現出し、或は足羽川・手取川・九頭龍川等の河畔に斷崖を爲して出で、或は又第三紀層其他舊層より成る丘陵を被覆し、其の脚麓に高臺を形成するものあり。又は佐渡外海府小田・石花間或は眞野灣に瀕する二見港近傍に於けるが如く海岸段階を爲して露出す。又其の彌彥山の東麓より、國上山の東緣に亘り敷衍するものゝ如き火山岩礫或は火山砂等より成り、所謂火山岩層に酷似するものあり。

越前千崎ノ浜の不整合

越前千崎の海濱及び三國附近の水垂坂に於ては、第三紀層の上を壇堆・粘土及び砂礫層より成る第四紀古層が、不整合的に被覆せる自然の斷面ありて、

第三紀層が削磨せられたる上に、第四紀古層の座せる有樣判然として現はれ居れり。又坂井郡金津・陣ヶ岡等に在ては墟堀の下方に位する黝色の粘土を、

十崎ノ海濱



瓦磚の原料に供し、北潟湖畔の第四紀古層の一局部は、二重の不整合層を呈し、其の生成時期中に、甚だしき地盤の動搖ありたるを示せり。

佐渡に於ける第四紀古層は、其の厚さ時として二三十米に達することあり。中山新道大小等に於ては、其の砂礫中に往々にして砂金を含有することあり。潟上・川原田其の他二三の地に於ては、本層の粘土を採掘して瓦磚若くは煉瓦の原料に供す。小佐渡三貫目澤及び西三川の上流に於て富士岩を被覆せる本層は、十八枚附近に於て往昔盛に砂金坑業に從事したる結果として、主として火山岩礫より成り、砂及び墟堀の湖層を其の間に雜ゆる厚層が、自然に地形を一變して表面に著

るしく凸凹參差を來たし、遂に彼の虎丸山等の丘陵を形成するに至れり。

第四紀新層は今尚ほ成生しつゝある最後の地層にして、或は海濱に連り、卑き砂地若くは海拔十數米の砂丘を成す海成層あり、或は河畔に接し、河流が山を削り谷を刻み轉々流送し來れる砂礫泥土の堆積より成る河成層あり。前者は越後角田山以北の海岸に沿うて蜿蜒起伏し、古松其の上に生ずるもの及び越前美川より三國の南三里ヶ濱に至る沿岸に斷崖と交り相連續する砂地及び越前美川より三國の南三里ヶ濱に至る沿岸に斷崖と交り相連續する砂地及び砂丘之れに屬し、後者は地味肥沃なる中越後の平野、下越後の長岡及び柏崎四近の平野、福井・小松・鶴來以西の廣濶なる平野之れに屬し、其の大部は耕地となるものなり。

六　火成岩

（イ）深成岩

火成岩
深成岩
花崗岩

花崗岩　本岩は飛驒山脈、越後の大湯及び上田銀山近傍、能登賓達山、新發田の東方に在る飯豐山、若狹の三方郡、越前の敦賀郡等に露出し、鑛物成

花崗岩の種類

分上より云へば、角閃花崗岩・閃雲花崗岩・黒雲母花崗岩及白雲母花崗岩の四となすことを得べく、組織上より云へば中粒狀・粗粒狀・斑岩狀の三となすことを得べし。黒雲母花崗岩は最も普通の種にして、白雲母花崗岩は專ら三方郡に露出す。飛驒山脈の東部に於ては秩父古生層に接觸變質を與へ、下新川郡小川溫泉附近に於ては中生層と接したる部に接觸變質を與へ居らざれば、黒部山脈の花崗岩の迸發は古生代に於てありしを推測するに足るべきも、三方郡鳥濱及同郡新庄・田代附近に於ける白雲母花崗岩は、白堊系に接觸變質を與へ、菫青石を生じ居るの事實よりして考ふれば、花崗岩は中生紀の終り迄迸發したるものなることを知るに足るべし。

中粒の組織を有する者は、建築石材として普通應用せらるゝ黒雲母花崗岩及び閃雲花崗岩に多く、粗粒狀のものは三方郡の白雲母花崗岩に於て之を見る。又斑岩理の者は、岩脈を爲せるものに多く之を見、所謂花崗斑岩と稱すべき者にして、三方郡の湖畔萬丈山近傍に岩脈を爲せる者の如き其一例なり。

花崗岩には常に多少の斜長石を含むが、其の量增加すれば即ち石英閃綠岩に移化す。下新川郡太平附近に露出するものゝ如きは、花崗岩一局部の成相たるに過ぎざるべし。

佐渡の花崗岩

角閃富士岩より成る越前大日山の南西に方り、九頭龍川の北岸に石灰岩を挿みて露出する花崗岩は、綠色緻密の粒狀富士岩を以て貫通せられ、細粒或は中粒にして胡麻鹽色を帶び、黒雲母花崗岩に屬す。長石は正長石の外に微斜長石を含み、又綠簾石を混ず。其他森川の渡場に近き小湊に斷崖を爲し露出するもの及び大日峠の南北に於て、角閃富士岩間に現はるゝものは、孰れも黒雲母花崗岩に屬す。

佐渡に於ては花崗岩は、僅に數ヶ所に彈丸黒子の露出を爲すに過ぎざるも、其の相川第三紀層の凝灰質礫岩中の石礫を爲すこと往々あるに由りて考ふれば、實際は佐渡島の骨格の一部を構成するも、現今は新生の岩類を以て被覆せらるゝが故に、多く其の露出を見る能はざるものか。外海府南片邊及び其の南に火山岩及相川第三紀層に被はれて僅に露頭を出だすものは、常に多少分解して、黒雲母は多く綠泥質物及び綠簾石に變化するも、主として正長石・

斜長石・石英及び黑雲母より成る黑雲母花崗岩に屬し、外海府鵜島に岩脈を爲して古生層を貫通するもの亦同岩種に屬す。

越後大湯附近の花崗岩

越後の大湯及び上田銀山近傍に露出するものは、亦黑雲母花崗岩に屬し、其の桑り峠附近に產するものゝ如きは、黑雲母・石英・長石の成分鑛物巨大となり、花崗斑岩に近つくの傾向あり。池平・三又新田・大湯に產するものは、石英・長石及び雲母の外に、多量の角閃石を混じ、閃雲花崗岩に屬し、副成分として斜長石・輝石・燐灰石・磁鐵鑛・硫化鐵或は銅鑛を含むものあり。又大桃・甲子及び大湯近傍に產する閃雲花崗岩は、淡紅色を呈する正長石の巨晶を含み、角閃石は綠色を呈し、小粒の輝石は淡褐色を爲し、其の量少し。

閃綠岩

閃綠岩　閃綠岩には石英を多く含むものと否らざるものとの二種あり。石英を多く含むものは、之れを石英閃綠岩と稱し、本地方に產するものは、概ね之れに屬し、越後南魚沼郡甲山・割引山・大劍多山・筍山等の連山を構成するもの是れなり。一般に胡麻鹽色の花崗岩狀のものより、極めて黑色なるものに移化し、概ね細粒なり。清水越新道に露出するものの多くは角閃石は寧ろ稀なるに反して、黑雲母及び輝石は多く之れを含み、謂はゆる英雲閃綠岩に屬し、往々にして石英閃綠岩・英輝閃綠岩を交雜す。尙ほ此の三國峠以北の三國山脈中には、普通石英閃綠岩の外玢岩・石英玢岩・輝綠岩・石英輝綠岩等の數種を交雜す。又其の石英閃綠岩と雖も、時に石英・雲母を缺きて閃綠岩に移化し、石英・正長石・斜長石・黑雲母を多く含み、綠泥質物を雜へて花崗岩となり、又長石及び鐵苦土鑛物の霎爛して綠簏化せるものより成れる石基を有する斑岩となることあり。

石英閃綠岩

石英を含まざる普通の閃綠岩は、其の區域極めて狹少にして、單に脈狀をなして片麻岩若くは古生層又は花崗岩を貫通するに過ぎず。其の片麻岩を貫くものは、加賀石川郡中宮溫泉場に近き溪流の畔に、斷崖を爲して露出するものにして、粗粒黑色白紋を呈し、角閃石・斜長石・輝石に加ふるに多少の磁鐵鑛を混じ、一般の性質斑礪岩に類似し、又岩盤の一部蛇紋岩に化する所あり。其の古生層を貫くものは、越前大野郡細野口鑛山の背後に突起するものにして、主として粗粒の角閃石と斜長石とより成り、副成分として磁鐵鑛を有す。

其の花崗岩内に脈狀を爲すものは濃綠粗粒狀の岩盤にして、大日山麓なる大野郡横谷に露出し、半ばウラル石に變化する角閃石と、多少ソウスア石に分解せる斜長石とより成り、磁鐵鑛及び黄鐵鑛の小粒を混ず。

佐渡の閃綠岩

佐渡にも亦閃綠岩の脈狀を爲して出づるものあり。大佐渡に於て古生層を貫通するが如きもの是れなり。即ち外海府眞更川・北鵜島の間に露出するものは暗綠若くは深綠色を帶び、主として斜長石及び角閃石より成るを常とするも、時には多少の輝石を雜ゆるものあり。茂蒲の西にあるものゝ一部は、微晶質の石基に角閃石を斑點する閃綠玢岩に移化し、鷲崎の南に露出するものは石英の少量を含む。

蛇紋岩

蛇紋岩　蛇紋岩は若狹和田山の大部を構造するもの、及び飛驒山脈に於て岩脈を爲して出づるものを重もなるものとす。越後西頸城郡山の坊・小瀧及び上路に露出するものは斑糲岩より變成し來り、飛驒山脈の柳俣及び大黑嶽の東に岩脈を爲すものは橄欖岩より變成し來れるの證あり。また若狹和田山附近のものは、數閃綠岩と隨伴するの事實よりして考ふれば、或は閃綠岩より變成し來れるならんか。飛驒山脈に於ては、古生代の粘板岩を貫通するものあれば、其の迸發は古生代の末期に及びしことを知るに足るべし。

火山岩

石英斑岩

玢岩

(ロ)　火山岩

石英斑岩　北陸地方に於ける石英斑岩の重もなる露出は、從來知る所に由れば、庄川溪谷に細長き岩塊を爲し、飛驒よりして越中に連るものあるに過ぎず。越中菅沼に露出するものは、濃綠色の地に點々肉紅色を雜ゆる完晶質の石基中に、石英及び正斜の兩長石幷に分解せる黑雲母と綠簾石とを抱ける花崗斑岩に類似するものにして、角礫岩質の流紋岩内に圍まる。越中新屋より、飛驒椿原に連なるものは、流紋岩と花崗岩との間に横はり、數玢岩脈にて貫通せられ、北方新屋附近にては菅沼附近のものの如く花崗斑岩に類似するも、南に至るに從ひ岩石は次第に流紋岩に近づき、流理を呈する潛晶質の石基中に、石英及び長石の斑晶を散點す。

玢岩　本岩の本區域に露出するものは、多くは岩脈を爲せるものにして、

流紋岩

從つて其の區域狹少なるを常とす。越中・越後・信濃三國の境に屹立する白馬嶽及び鑓嶽を構成するものは、長石及び石英より成る微晶質の石基に、斜長石・石英及び少量の黑雲母を基布し、又電氣石の集合より成る黑色の斑點ある電氣石英雲母岩に屬し、白色にして遠く之れを望めば千古の雪を戴くの觀あり。越中礪波郡五箇山の稱ある祖山・大枚等の地に於て、角閃片麻岩を貫通して庄川の溪畔に岩脈を爲して現はるゝ者は、斜長石・綠泥石・磁鐵鑛等より成れる粗晶質の石基中に、分解せる角閃石、少量の斜長石幷に後成の方解石を交雜する黝色白斑の堅岩にして岩質閃綠玢岩に屬す。彼の祖山・大枚等の溫泉は恰も此玢岩脈の片麻岩を貫通する所に湧出す。越前大野郡細野口鑛山の鑛區なる水無谷に於て、古生層を貫く者は微晶質の石基中に少量の輝石及び柝木狀の斜長石を散點する黝綠色堅緻の岩石にして輝綠玢岩に屬す。白山の南東位なる地獄谷の源頭及び別山の山頂にあるものは、斜長石・角閃石等の針晶より成れる微晶質黝綠色の石基中に、斜長石の白色斑晶を散點し、閃綠玢岩に屬す。

流紋岩（石英粗面岩）　流紋岩は割合に廣濶の面積を占め、從つて其の構造石

彌彥附近の流紋岩

理の如きも、地方により種々の差違あるを免れず。越後彌彥山附近に露出する流紋岩は、之れを現出の狀態より云へば、十寶山サメハゲ澤及び觀音寺溫泉附近に於けるが如く岩脈を爲すものあり。雨乞山及び野積村弘智法印附近に於けるが如く併磐を爲すものあり。國上山及び十寶山に發達せるものゝ如き岩瘤を爲すものあり。間瀨の白岩及び樋曾の赤坂峠附近に在るものゝ如く熔岩床を爲すものあり。之れを石基の性質如何によりて區別すれば、玻璃質又は潛晶質フェルシチックの石基を有するもの、微小なるフェルシチックの石基を有するもの、及びフェルシチックの石基を有するものゝ三式となすことを得べく、第一式は熔岩を爲すものに多く之れを見、第二式は併磐を爲すものに多く之れを見、第三式は岩瘤若くは岩脈を爲すものに多く之れを見る。尙此等の流紋岩には、石英の斑晶を有するものと、有せざるものとの二種ありて、後者を普通とす。

飛驒山脈の流紋岩

飛驒山脈に於ける流紋岩は、小川谷より柳俣を經て東鐘釣に至る間、小川溫泉場の北部一面、大黑嶽・嘉例澤附近に露出す。概ね粗粒にして潛晶質又は

微晶質、稀に玻璃質の石基に、石英・長石・輝石及び角閃石の斑晶を散點する、赤褐・淡綠或は黝褐色の岩石にして、東鐘釣に露出するものは流理構造を現はし、美麗なり。

加賀能美郡中峠の隧道際に露はるゝものは、黑・紫・藍の雜色を帶び、墨流の如き文理を呈し、美觀なり。越前丹生郡瀧波に綠色の凝灰岩を通じて產するものは、縞目を呈し、紫黝色を帶び、孔竅を抱き、加賀石川郡吉野より直海に至る間に發達するものは、黝白又は紫綠の數色を帶び、薄板に裂け易く、能美郡花坂附近に露はれ、九谷磁器の原料たる者、及び江沼・坂井兩郡界に崩起せる高洞山產のものは、共に縞目を呈し、以上は孰れも流理構造著るしく、長石・石英等の微晶一方向を撰び排列せる潛晶質の石基中に、石英・長石等の斑晶を基布し、流紋岩の特性を發揮せり。

加賀中峠の流紋岩

江沼郡菩提・石川郡二又・中島・越前大野郡大池附近に露はるゝものは、複射狀の組織を爲し、球顆を潛晶質若くは微晶質の石基中に混じて、石英・長石等の斑晶を其の內に基散し、所謂球顆狀流紋岩に屬す。就中菩提產の者は、岩體

加賀菩提の流紋岩

に不規則の空隙ありて、其の內に瑠璃色若くは白色半透明の蛋白石を充し、中には光彩陸離貴蛋白石と稱すべき者あり。能美郡赤瀨に露出するもの丶一部は、黑・赤褐・黃褐等の色を帶び、脂肪光澤を放ち、葱皮狀を呈する玻璃質石基中に、石英・玻璃長石等を基布する眞珠岩に屬す。其の他越前大野郡保田に侏羅層を貫くものは、潛晶質石基中に破碎せる石英と、分解せる長石とを散點し、比島に凝灰泥板岩を伴ひ現はるゝものは、黝色にして微晶質の石基中に、玻璃質包裹物を含む石英を散布し、小原峠に露出するものは、黝綠色潛晶質の石基中に石英・長石及び綠泥質物を基布し、谷村に岩脈を爲して侏羅紀の泥板岩を貫き、之れを變質せしむる者は、脫玻璃質の石基に、碎けたる石英及び長石の斑晶を基布し、石川郡中宮溫泉場より、美濃原山に連なり擴布するものは、脫玻璃質の石基に、石英・長石及び綠泥質物を散布し、又綠色を帶び碎片を抱き、江沼郡九谷に角閃片麻岩を貫通する者は、潛晶質白色の石基に玻璃長石と石英とを散布し、越中東礪波郡菅谷に出づるものは、綠色を帶び、潛晶質の石基に半ば綠簾石に化せる長石を散點し、角礫岩狀を爲せり。

越前丹生郡の流紋岩

佐渡の流紋岩

球斑狀の組織

越前丹生郡の海岸附近に出づるものは、紫褐色若くは淡綠色にして凝灰岩的組織を有し、若狹大飯郡青葉山麓字山中に露出するものは、紫褐色緻密の石基中に、油黃色の石英斑晶を多く含み、字宮尾・日引に露出するものは、黃白色の礪石組織を呈するものなり。

佐渡に於ける流紋岩の分布は、敢て廣大なりと稱すべからざるも、他地方に於て決して見るべからざる一種特有の石理を現はすものあるを著名なる現象とす。他所に於て見るべからざる一種特有の石理とは何ぞや、即ち球斑狀の組織 Granophyric structure を有する假珠 Pseudosphaerulite を包有すること是れなり。即ち外海府眞更川の東より南に延び露出するもの、眞更川北小浦間の沿道より黑姬越に連亘せるもの、內海府黑姬より浦川の西南に亘るもの、小ノ見越より小ノ見川の上流に亘る輝石富士岩の間に散點するもの、外海府達者及び姬津に連亘するもの、小川の南より外海府街道を經て下相川の海濱に及ぶもの等は、孰れも黝・綠・褐等の雜色を帶び、流狀石理及び斑狀石理明なると同時に、球斑狀の組織を現はすもの甚だ多し。此の組織は必ずしも顯微鏡に

小佐渡の流紋岩

藉らざるも、肉眼を以て明かに之れを認め得べきことにして、下相川海濱には豆大の球顆が半ば風化せる母體より個々分離するを認むるを得べく、また往昔相川鑛山に於ては、其の石英及び長石の集合より成れる球顆の堅硬なる性質を利用して、本岩を精鑛用の臼に應用せりと云ふ。蓋し此の球斑狀の組織は、本岩が岩漿より冷却凝固するに當り、長石及び石英が個々別々に結晶成生せずして、同時に同處に共生したる結果として、二鑛物相合して一種の球形を爲せるものに凝結したるに由るなり。此の球顆を假球と云ふ。本地方の流紋岩にして以上の球斑狀の組織を缺くものは、石基概ね微晶質にして、斑晶は石英よりも長石を多しとし、鐵苦土鑛物は寧ろ稀にして、あれば黑雲母の多く綠泥質物に變化せるものに過ぎず。

其の他小佐渡經塚山附近に擴布せる相川第三紀層に恐くは岩床を爲して挿入せる流紋岩は、黝・白色を常とし、時には褐・綠等の雜色を帶び、多くは球斑狀若くは微晶質の石基を有するも、時としては玻璃質にして流理判然たるものあり。檜山峠の東より西南に連亘して赤泊の西に達するものは、佐渡に於

ける本岩の露出廣袤最大なるものにして、黝白褐色を帶び、石基は概ね微晶質にして、斑晶として多量の斜長石を碁布すること屢あれば、其の一部は富士岩に移化するの傾向あるものと云ふべし。

石英富士岩

石英富士岩及雲母富士岩　流紋岩中の斜長石其の量を增加すれば、遂に石英富士岩に移化するに至るなり。石英富士岩の多くの雲母を含むものを英雲富士岩と稱し、多くの角閃石を含むものを英閃富士岩と云ふ。孰れも流紋岩と富士岩との中間に位するものなり。

越後飯士山の英閃富士岩

越後南魚沼郡魚沼川の東に碁峙する飯士山四近の連山を構成するものは、黝色若くは黝黑色の英閃富士岩にして、微晶質の石基中に、斜長石・石英・角閃石及び磁鐵鑛の斑晶を散布し、時としては多少の輝石を加ふることあり。三國街道湯澤附近の對岸に絶壁を爲し露出するものは、往々同岩の集塊岩を混ぜり。

佐渡の雲母富士岩

佐渡の雲母富士岩　佐渡外海府岩谷口の西北より、字關に擴布せるものは多く雲母を含み、英雲富士岩に屬し、暗黝褐色を帶び、斑狀石理常に判然たり。其の里姫越街道に露出するものは、多く流紋岩に類する石基を有し、多量の斜長石及び黑雲母を散布せり。

小佐渡國見崎以北の雲母富士岩

內海府蟲崎に起り、西南の方向に延長して海拔九百四十米の高距に達する金剛山を構成し、金北山及び片邊間の沿道に達するものは、佐渡に於ける最大の面積を占むるものにして黝色若くは紫色を呈し、微晶質の石基中に、長石及び黑雲母を斑點せり。此の岩石は一方に於ては角閃石を多く雜へ英閃富士岩に移化し、一方に於ては球斑狀の組織を包有する流紋岩に移化す。又小野越の沿道に於て相川第三紀層及び輝石富士岩に界して狹少の區域を占領する本岩は、假球に富める微晶質石基中に長石の斑晶を碁布す。色は黝若くは紫色なり。內海府羽吉の西南に於て第四紀古層に頭角を表はし、尙ほ西南に延長して石田川上流の地に及ぶもの亦英雲富士岩に屬す。

小佐渡國見坂以北に露出するものは、通常黝黑褐若くは紫色を帶び、潛晶質乃至微晶質の石基中に、石英・長石及び多少風化せる黑雲母の斑晶を碁散す。時としては流狀石理判然たることあり。國見坂以西にあるものは輝石富士岩

に移化するの傾向あり。尚ほ東濱の野浦より赤玉に連亘するものも、前區域のものと同樣の性質を有す。

越前大日峠附近の雲母富士岩

越前勝山町の北なる龍谷より大日峠に至る徑路の左方に、侏羅系に屬する砂岩を被覆し岩床を爲す雲母富士岩は、濃褐色を帶び、板狀節理を呈し、石基は脫玻璃質にして其の中に斜長石・黑雲母及び磁鐵鑛を散點し、更に少量の玻璃長石・角閃石・輝石等を副成分として有す。斜長石は邊緣に多量の玻璃包裹物を含み、黑雲母は其の中に多くの磁鐵鑛粒を包む。丹生郡清水尻に丘陵を爲して露出するものは、黃白色堅緻の岩石にして、微晶質の石基中に斜長石・黑雲母に加ふるに更に稍〻多量の角閃石及び少量の分解せる輝石及び石英を含み、英閃富士岩に近き、分解すれば紫色若くは褐色を帶ぶるに至る。加賀能美郡大杉に第三紀層の角礫岩と共に斷崖を爲せるものは、堅緻藍色の岩石にして、微晶質の石基中に斜長石・黑雲母・石英及び少量の玻璃長石を斑晶として有し、英雲富士岩に屬す。江沼郡荒谷に岩脈を爲して第三紀凝灰岩を貫通するものは、淡黃色若くは白色を帶ぶる堅緻の岩石にして、微晶質の石基中に石英・斜長石及び黑雲母と少量の玻璃長石を混じ、能美郡輕海に小丘を爲すものは、微晶質の石基中に破碎せる石英・斜長石・玻璃長石・黑雲母等を斑晶として有し、石英は多量の玻璃質包裹物を有す。

角閃富士岩　白山熔岩

角閃富士岩　角閃富士岩の當地方に存するものゝ重もなるものは、先づ指を白山熔岩に屈せざるべからず。白山熔岩は之れを分ちて二種となすことを得べし。一は黑色の地に白色の斜長石の斑點あるものにして、多く玻璃質を帶び、試みに鐵槌を以て之れを擊てば片々に破壞し、專ら噴火孔附近に產す。他は黑褐若くは黝綠色の地に斜長石の白斑を雜へ、玻璃を含まず、主として噴火孔を距る遠き所の加賀室以北白水瀧等に產す。第一種は石基玻璃質にして長石・輝石及び磁鐵鑛の微晶を含み、斑晶として斜長石・角閃石・輝石等を基布し、第二種は微晶質の石基中に、斜長石・角閃石・輝石等を散布し、角閃石は輝石及び磁鐵鑛に變化するを常とす。白山々中龍ノ馬場及び越前石徹白等より產する、俗に印籠石と稱するものは、此の角閃富士岩の分解して生じたる角閃石砂に外ならざるなり。

大日山の角閃富士岩

白山の西方に崛起する大日山も亦角閃富士岩より成る、黝色を帶び流理を呈する石基に、角閃石・斜長石及び小量の輝石を斑晶として碁布す。其の角閃石が黑色の磁鐵鑛の邊緣を有し、其の一部輝石に變ずることは、白山のものと異なることなし。大日山の北花立峠附近のものは、角閃石及び輝石の外に更に橄欖石を含み、其の裂罅は含水酸化鐵に變じ紅褐色を帶べり。別山の南に聳ゆる笠場山美女坂附近のものも亦花立峠產のものと同じく少量の橄欖石を含めり。越中礪波郡立野脇の地に、第三紀角礫岩上に岩床を爲して露出する角閃富士岩は、前者と稍其の趣を異にし、黝色黑斑の堅岩にして流理を呈し、針狀斜長石及び磁鐵鑛粒より成る石基と、磁鐵鑛の黑色周邊を有し、內部輝石に變ずる角閃石の斑晶とより成り、白山附近のものゝ如く斑晶として斜長石を有すること少し。

米山附近の角閃富士岩

城ノ腰城山の角閃富士岩

角閃富士岩は又越後米山の最古の噴出岩として之を見る。然れども其の露出區域は甚だ狹少にして、城ノ腰の城山・黑岩の旗持山・鯨波の海岸等に個々分離して現はる。城ノ腰の城山產のものは淡褐色にして稍赤色を帶び、黑色の角閃石及び白色の長石斑晶を有す。鏡下にては此の外に斑晶として輝石・燐灰石・磁鐵鑛を認め得べく、更に後成鑛として綠泥石及び陽起石を見る。角閃石及び斜長石は共に著しく分解するを常とす。旗持山產のものは前者より稍新鮮にして五角或は六角の柱狀節理發達し、淡褐色を爲し、少しく赤色を帶び、黑色角閃石の斑晶を碁布す。其特徵は角閃石と斜長石との集合より成る桃實大より長さ一尺に達する球形又は瓢形の謂はゆる角閃石塊を有することなり。蓋し其の岩漿より凝結する際に謂はゆる岩漿分體作用により生じたるものにして、其の噴出の際他岩を捕捉し來れるものにあらず。鯨波の海岸に露出するものは常に日本海の澎湃たる怒濤の爲に洗はるゝを以て分解作用大に其の度を進め、正確に其の何岩なるやを知る能はざるも、其の包有する謂はゆる角閃石塊の全く旗持山に於ける者と等しきにより、今之れを角閃富士岩とす。

旗持山の角閃富士岩

黑岩の旗持山より北の方三町許にして高さ數十丈に達する巨岩あり。卑俗之れを手箱岩と云ふ。此の岩石はまた甚だしく分解して肉眼にては顯晶の何たるやを知る能はずして、たゞ壓方解石の大塊が岩石の空隙を埋め、または

岩片全く方解石に化し去れるを見るのみ。之れを鏡下に照らすに斜長石・輝石・黒雲母及び多くの纖維狀の鑛物等を見、角閃石は著しからずして、寧ろ粒狀富士岩若くは雲母富士岩の如きも、其の現出の狀態全く角閃富士岩に同じきと、其の露出の位置が角閃富士岩に接近せるとの事實よりして、特に米山火山を調査せる岩崎理學士は之れを角閃富士岩中に列せり。

妙高火山の閃輝富士岩

越後妙高火山の中央火口丘を構成する淡灰色の岩石は、針狀の長石結晶幷に磁鐵鑛より成る石基と、長石・角閃石及び輝石の斑晶を有し、閃輝富士岩に屬す。其の新鮮なる內部は白色若くは淡灰白の石基を有し、又多少浮石質に近き粗面岩質石理を有し、長石幷に角閃石の斑晶を散點し、外部にありて熔岩の表面を爲す部分は粗鬆多孔質にして、鐵分は酸化して表面は一般に褐色を帶べり。彼の頂上附近に於て奇岩怪石嵯峨として屹立し、日本石・胎石・鞍石等の名を以て呼ばるゝは、此の岩石に外ならざるなり。又彼の笈摺（オヒスリ）貝摺（カイスリ）等の名を以て呼ばれたる急峻なる傾斜を成すは亦、此の岩石に外ならざるなり。

燒山の閃輝富士岩

妙高山の西北に位し、日本海岸の活火山として有名なる燒山を構成せる富士岩中にも亦、斜長石・角閃石・輝石及び磁鐵鑛の微晶と玻璃とよりなる石基と、斜長石・角閃石及び輝石の斑晶とを有する黝色粗鬆なる閃輝富士岩に屬し、越後・信濃の堺を劃し、燒山の西方、戸隱山の北方に屹立する雨飾・天狗原の二山は亦全然淡黝色にして角閃石の斑晶を散點する角閃富士岩より成り、早川谷と能生谷との中間なる第三紀丘陵の上に孤立せる鋒ヶ獄及び權現山の中複以上は總て濃綠色或は黝白色の斑狀角閃富士岩より成り、其の一溪流の大龍附近には美麗なる細柱狀節理を呈し、其の下に橫はれる第三紀砂岩を變質せしめ居れり。

雨飾山・天狗原山の角閃富士岩

以上雨飾山・天狗原山及び鋒ヶ獄・權現山を構成する角閃富士岩は、其の噴出の時期前數者に比して古るき外觀を呈せり。

新潟の角閃富士岩

越後長岡の南に當り、東山々脈の西部に露出し、通稱村松石の名を以て建築材に使用せらるゝものは、淡黝色を呈し、角閃石は黑色の邊緣を以て包圍せられ、尙ほ副成分として黑雲母・輝石等を含む。

越後の村松石

粒狀富士岩

粒狀富士岩　本地方に於ける粒狀富士岩の重もなるものは、九頭龍川の南

九頭龍川北岸の粒狀富士岩

北兩方に、第三紀層又は輝石富士岩間に、高峻なる山岳或は大小の岩塊を爲して存在するものなり。九頭龍川の北、淨法寺山を構成するものは、石基は微晶質にして、其の中に分解せる斜長石及び綠簾石を散布し、綠色堅緻の斑狀岩石なり。江沼郡九谷の奥なる眞砂附近のものは流狀石理を有せる石基中に、多少分解せる斜長石・角閃石等を基布し、我谷の溪畔に絕壁を爲せるものは、微晶質の石基に、斜長石・輝石及び其の分解より來れる綠簾石を基布し、經ヶ森の骨格を成し、和佐森銀山附近に露出するものは、細粒濃綠色の堅岩にして、稍分解せる斜長石及び輝石を含み、其の他大聖寺・九岡間の一驛笹岡附近に於て、第三紀の角礫岩を貫くものは、流狀石理を呈する石基中に輝石及び斜長石を基布す。

九頭龍川南岸の粒狀富士岩

九頭龍川の南岸轟村の地に露出するものは、斜長石・輝石及び磁鐵鑛より成り、中に綠簾石を混じ、粒狀石理を呈す。又勝山街道より曹洞宗派の本山たる永平寺に至るの道路に沿へる字京善の地に在るものは、微晶質の石基に、分解せる斜長石・輝石及び綠簾石等を散布し、空隙に往々玉髓・方解石等の後成的鑛物を充たし、永平寺附近に露出するものは時に多孔狀を呈し、其の孔壁に石英粒を附着し、內に綠泥石を充たす。其の他足羽川に沿へる田尻の地に產するものは、石基流理を呈し、斜長石・輝石に加ふるに黃鐵鑛及び後成に係る石英を含み、勝山町の對岸蓬生に產するものは、角閃石を含有す。

輝石富士岩

輝石富士岩　本地方は富士火山脈及び白山火山脈の其の端を發する所、角田・米山等の越後海岸諸火山の存在する所、而して又乘鞍火山脈の其の跡を沒する所なるを以て、諸種の火山岩甚だ多く、中に就き主として此等諸火山を構成する輝石富士岩及び其の集塊岩は角閃富士岩と相待つて實に本地方の火山岩の要用なるものなり。

妙高火山の輝石富士岩

妙高火山の中央火口丘が閃輝富士岩より成ることは前項已に之れを述べたる所なるが、其の外輪山は輝石富士岩と其の集塊岩との互層より成るなり。其の最下部に位するものは稍綠色を帶びたる黑色緻密のものにして、小田切上流の南地獄、大田切の上流及び其の支流の上流北地獄の近傍、ヨイヨイ坂、稱名の瀧附近等に露出す。之れを蔽ふて集塊熔岩あり、南方の外輪山なる赤

倉山の如きは、其の尖峯凡て此の岩石より成るを見る。北方外輪山なる大藏嶽・神名山の高峻なる火口壁面を見るに、此の集塊熔若の上を一流の熔岩被覆するありて淡黝色細粒質の輝石富士岩なり。尙ほ之れを覆ふて又集塊熔岩あり。而して粒狀石理の富士岩再び之れを覆ひ、更に集塊岩三たび其の上を被覆す。以上諸岩類の最上部を被覆し、表面に露出する熔岩は、種々の方面によりて多少其の性質を異にし、或は大藏嶽に露出するものゝ如き黝色堅緻にして斜長石・輝石の外橄欖石に富めるものあり、或は廓嶽に於て見る如き黑色多孔質にして粗面岩的石理を有するものあり、或は火口瀨の支溪なる瀧ノ澤に於て露出を爲すものゝ如き堅緻にして斜長石・輝石・橄欖石の斑晶を有するものあり。要するに輝石富士岩の種類に富む妙高火山の如きは本地方に於ては他に多く其の比を見ざる所なり。

火打火山の輝石富士岩

妙高山の北方に連なる火打火山群にも亦數種の輝石富士岩の噴出あり。其の最高峯なる赤倉山の西北部に於ては英閃富士岩の露出あるも、其の東方の頂上鬼ヶ城を破りて噴出せるは粗大なる斑晶を有せる複輝石富士岩にして、

其の稍〻南方に偏し總瀧附近に流出せるは暗黑色堅緻にして玄武岩の觀を呈し、東方に流出せるは淡黝色の石基に斜長石及び輝石の斑晶を散布するものにして、時に整然たる柱狀節理又は板狀節理を呈せり。鬼ヶ城噴口附近に噴出し、最上層を爲すものは、粗鬆にして全體粗大なる斑晶より成り、概ね淡黝色なり。赤倉山の北東に位する火打山は又黝色にして稍〻粗粒なる輝石富士岩より成り、其の北にある不動山の小丘も等しく粗質の輝石富士岩より成る。

燒山の輝石富士岩集塊岩

妙高山の北西北に位し、單獨なる圓錐形を呈する燒山活火山亦幾多の輝石富士岩の岩脈を以て貫通せられたる集塊熔岩、及び輝石富士岩、幷に前述せる閃輝富士岩より成り、糸魚川驛の東南に幾多の危峰巍峨として天を摩す烏帽子群山は、主として凝灰質集塊岩より構成せられ、阿彌陀嶽の西には柱狀節理の能く發達せる複輝石富士岩の露出するを見る。彼の西越後名勝の一として世に喧傳せる月不見池の如きは、此の集塊岩の大塊が散亂せる間に湧出せる泉水に過ぎざるなり。此の塊片は、一般に黑色にして、暗褐色の玻璃に富める石基に、斜長石・輝石等の斑晶を恭布する複輝石富士岩に外ならず。

苗場火山の輝石富士岩

越後第一の名山として稱せらるゝ苗場舊火山にも亦數種の輝石富士岩あり。中津川溪谷の石落の地に柱狀斷崖を爲して露出するものは、帶青黝色にして玻璃質乃至潛晶質の石基に、斜長石・紫蘇輝石・輝石の斑晶を散點する複輝石富士岩なり。逆卷溫泉の母岩を爲し、中津川の峽流に柱狀の斷崖を爲して露出するものは、黑色堅緻にして微晶質乃至潛晶質の石基に輝石と斜長石との斑晶を散點し、且つ斑晶所々に集合して粒狀部を形成し、又紫蘇輝石の量普通輝石に比して少きを特徴とす。其の他苗場高原の西南端を爲し、大岩に於て絶壁を形成するものは玻璃毛氈狀構造の石基に小なる斑晶を散布する複輝石富士岩に屬し、越後七不思議の一として柱狀節理を以て有名なる田代の七ツ釜を形成するものは、黑色を帶び、玻璃潛晶質乃至玻璃毛氈狀の石基に、兩種の輝石及び斜長石の小斑晶を抱く複輝石富士岩に屬す。

田代七ツ釜の輝石富士岩

山頂に安置する藥師を以て有名なる米山の大部は、集塊岩を以て構成せられ、最後の噴出物として輝石富士岩を見る。此の米山の大部を構成する集塊岩に二種あり、一は大小不定且つ稜角ある種々の火山岩片の數層狀を呈する集合にして、之れを集塊凝灰岩と稱し、一は多くは球狀の橄欖輝石富士岩の大小の岩塊を、之れと同質なる熔岩を以て膠結せるものにして決して層理を呈せず、之れを集塊熔岩と云ふ。此の集塊岩を爲す岩塊には角閃富士岩・閃輝富士岩及び複輝石富士岩等種々あり。

米山の集塊岩

米山最後の噴出物たる複輝石富士岩は、其附近の溪谷又は山頂に互に離隔して存在し、常に板狀或は柱狀節理發育し、淡黝色を呈し、玻璃毛氈狀の石基に斜長石・紫蘇輝石・普通輝石を碁布し、時として顯晶大に達する磁鐵鑛を含み、幷に又長さ五分に達する角閃石あることあり。

米山の龜裂塊

米山の各地殊に青海川の河口に於ては、直徑四五寸乃至二三尺に達する扁平なる球狀若くは鏡餅狀を呈する輝石富士岩の龜裂塊を見ることありて、是れ米山が曾て噴火したることを證するものなり。龜裂塊の黑色を帶び粗面なるは橄欖輝石富士岩に屬し、黝白色にして緻密なるは複輝石富士岩に屬す。

米山の東麓の一溪谷女原に於ては、輝石富士岩の分解より來る輝石粒を砂礫と共に產し、結晶稍〻判然し、鑛物學者の好標本として貴ぶ所なり。

角田火山の輝石富士岩

角田火山亦諸種の富士岩質集塊熔岩及び富士岩類より構成せらる。福地學士によれば其の成層の順序は次の如し。但し下より列擧す。

集塊凝灰岩　角田火山の基底を爲し、複輝石富士岩塊に富む。

熔岩　暗黝色緻密の複輝石富士岩にして、御宮山澤に露出す。

凝灰岩　閃輝富士岩質にして、青色又は綠色を帶び、コネリ澤に發達す。

集塊熔岩　角田山の北方及び西方に流れたる暗黝色堅緻の閃輝石富士岩にして、大部は集塊岩狀を爲すも、角田附近の岩屋にては柱狀節理を呈す。

熔岩　淡黝色の複輝石富士岩にして五箇峠附近にのみ發達す。

集塊熔岩　角田火山の本體を構成する黑色緻密の複輝石富士岩にして、東方竹ノ町附近及び西方五箇濱角海附近に多く其の流れるを見る。

熔岩　角田火山最後の熔岩にして其の頂上にのみ發達する黝色堅緻の複輝石富士岩なり。

佐渡の輝石富士岩及集塊岩

佐渡全島に廣く發達する輝石富士岩は、其の現出の狀態及び岩石學上の性質によりて之れを二つに分つを得べし。一は相川第三紀層中に、岩床を爲して介在するものにして、綠色を常とし、斜長石及び輝石は多少分解して綠簾石・方解石・黃鐵鑛・綠泥質物等の後成鑛物を生じ、輝綠玢岩に類似せり。一は相川第三紀層を貫通するものにして、概ね黝黑等の雜色を帶び、微晶質の石基に割合に新鮮なる斜長石・輝石の斑晶を散布す。以上二種の富士岩は、大佐渡及び小佐渡に二大區域を爲して發達し、其の他外海府願村・眞更川・北狄及び小川の附近、西浦の南岸、內海府見立・黑姫越の間、三崎半島等に相川第三紀層又は澤根第三紀層を通して迸發流溢し、大小種々の區域を占め、或は相川第三紀層の間に厚薄不定の層盤を爲して介在し、佐渡全島を構成する岩類中最も重要なるものなり。

大佐渡山脈以西の輝石富士岩

大佐渡山脈以西の地を構成し、山脈の走位と同じく東北より西南の方位に連亘するものは、其の北部なる黑姫越大倉峠の沿道より、外海府關・小野見間に於て概ね黑色にして緻密乃至微斑理ある富士岩及び其の集塊岩を露出し、關・矢柄間に於ては澤根第三紀層を貫通せり。鋭下にて微晶質の石基に斜長石・輝石及び時に石英を斑點し、大倉峠の沿道には柱狀節理を呈せり。小野見川・

千本川其の他入川及び北立島の山間に數條の鑛脈を胚胎するものは、概ね爛して輝綠玢岩に似たる外觀を呈し、微晶質の石基に、多少分解せる斜長石と、後成的の方解石・綠簾石・黃鐵鑛及び綠泥化せる輝石とを散布す、石英は時に之れを缺き、時に之れを含む。

內海府玉川・小松の西に起り、富士權現・羽黑山・三峯山・金北山・妙見山・白子刀根等の峯頂を構成し、相川鑛山に達するもの及び梅津越沿道以北及び相川鑛山の地に露はるゝ者は綠色を帶び輝綠玢岩に似たる外觀を呈し、東部第四紀古層に接する附近の者は集塊岩狀を爲し、分解して赤色の土壤を生ずるもの多し。其の新鮮なるものに就て之れを見るに、普通多量の輝石を含有し、時に多少の石英を含むことあり。佐渡第一の秀峯たる金北山頂を構成するものは、暗黝・黑・紫等の色を帶び、斑狀石理明かにして、酸化鐵に富めり。二ノ岳を構成するものも亦之れと大同小異にして、往々に石英を混ず。妙見山に露出するものは黑色若くは黝褐色にして、斑理明かに、或は斜長石の斑晶を散點し、時に石英粒を交雜す。靑野峠及び五十里の東北山田に露はるゝものは、往々

小佐渡の輝石富士岩

少量の黑雲母を雜ゆ。

北は兩津灣の羽丹生・椎泊間、東濱の水津・月布施間より、多少小佐渡山軸と同方位を取り、西南小木新町街道の東及び西浦に擴布する富士岩及び其の集塊岩は、概ね分解爛して、表面は土壤を以て覆はるゝを常とするも、其の岩石學上の性質は外海府矢柄・小野見の沿岸を構成するものと大差なく、微晶質の石基に斜長石・輝石・磁鐵鑛等の斑晶を碁布し、稀に角閃石の小量を副成分として含むことあり。其の椎泊・羽丹生間にあるものは黝黑・綠の雜色を帶び、時に集塊岩となりて、石英及び稀に黑雲母を副雜し、片野尾・月布施及び立前・小浦の海濱に露るゝものは多く集塊岩狀を爲す。千原越沿道の西北には又多く集塊岩狀のものを雜へ、以東には概ね黝黑等の雜色を帶ぶるものあり。國見坂の東西に露はるゝものは、中には千原越のものに類するものあるも、中には紫色を帶び多くは石英を含みて漸次英雲富士岩に移化するものあり。小倉附近には黑色緻密にして玄武岩に類し、多量の輝石を含有するものなり。西浦沿岸及び大小村三貫目澤には、數條の鑛脈を胚胎する粒狀富士岩若くは

輝綠岩に似たるものあり。

前區域の南にありて東敎山・飯豐山・元飯豐山・女神山・男神山等の高峯を構成し、西南に進みて羽茂川の流域及び前濱に達するものは、岩石學上の性質前者と大差なく、たゞ輝石に富める黑色玄武岩狀のもの、殊に多きを見るなり。而して前濱海岸には東濱海岸に於けるが如く、殊に集塊岩の多く發達せるを見る。

三崎半島の輝石富士岩

三崎半島を構成するものも亦概ね外海府矢柄・小野見間に於けるものに類し、殊に黑色多孔質にして微晶質の石基に多量の輝石斑晶及び斜長石を碁布するもの及び其の集塊岩を著しとす。彼の佐渡に於ては良港と稱せらるゝ小木港が、能く其の風波を防ぐは、堅硬にして波浪の浸蝕作用に抵抗すること多き此の類の岩石より成る岬端が、遠く海中に突出するに由るなり。白木の海濱には黑曜岩の露出するを見、半島の南方海濱には集塊岩を普通とす。澤崎・木流間には、黑色斑狀の輝石富士岩及び多孔質にして黑黝色を帶ぶる同岩の集塊岩が、澤根第三紀層に屬する黑黝色の凝灰質泥板岩と互層を爲す露出ありて、約二十度の角度を以て東に傾斜するは、以て其の迸發の時期の澤根第三紀層と同時期なるを知るに足るべく、而して小木港沿岸・木ノ浦等には同種の富士岩が、澤根第三紀層を貫通するの事實よりして之れを考ふれば、佐渡に於ける輝石富士岩の迸發は、其の時期に多少の前後あるも、要するに略〻澤根第三紀層堆積の時期と同一なるを知るに足るべし。

玄武岩

越後間瀨の玄武岩及び其の凝灰石

輝石富士岩は其の他、飛驒山脈を横走する三條の火山脈を爲して出て、柱狀のものは越前丹生郡居倉の背後に聳ゆる奇峯ガラガラ山等を構成するもの等あれども、其の岩石學上の性質は特記するに足るものなし。

玄武岩及其の集塊岩　玄武岩及び其の集塊岩の本地方に於ける發達は、割合に多からず、たゞ越後間瀨地方に於て、有名なる泡沸石の母岩として其の凝灰岩が同地方第三紀の上部を占むるもの特に注意すべきあるのみ。其成層の順序は福地學士に從へば次の如し。但し上より之れを列記す。

玄武岩熔岩流

玄武岩質集塊凝灰岩

泥板岩

玄武岩質集塊凝灰岩

泥板岩

玄武岩質集塊凝灰岩

此の集塊凝灰岩中には數多の玄武岩の岩床を介在し、其の岩石學上の性質は集塊岩の岩塊の性質と全く同一なり。即ち黝色乃至黑色の緻密乃至多孔狀の岩石にして橄欖石は存することあり、存せざることあり。輝色の多くは微紅色を帶ぶ。中には斑晶として橄欖石のみを備ふることあり。

其の他丹生郡大森より笹谷に至る沿道の東に小丘を爲す玄武岩は黑色堅緻にして、斜長石・輝石及び磁鐵鑛粒より成る微晶質の石基に、大形を爲せる斜長石、新鮮なる輝石、晶體の周邊若くは龜裂部より分解して黃綠色の纖維鑛物に化しつゝある橄欖石の斑晶を含めり。

七　溫泉

溫泉

福井縣蘆原溫泉

打波溫泉

地形狹長なる本地方の東北越後には、富士火山脈の北走し來れるものあり、妙高山・燒山等は之れが終點をなし、加賀の南隅には亦白山火山のあるあり、從て各縣共に湧泉に富むを見る。唯日本海中に孤立せる佐渡島には、一も溫泉の湧出するものなく、西南若狹國亦溫泉に乏し。今本地方の溫泉を縣別して、之れを略說せん。

福井縣　本縣下は本地方中に於て、最も溫泉の數に乏しきのみならず、從つて又た有名のものなし。坂井郡蘆原村の蘆原溫泉(鹽類泉の一種食鹽泉三十三度乃至七十七度)は第四紀新層の地に十二間乃至二十間の鑽井を穿ち、多量の湧出ありて、泉水初は淸澄なれども、後には不透明となる。地鑛北に丘陵を負ひ、田圃西南に開く。三國町を距る東方一里餘、福井市より加賀に到る縣道を距る遠からざる所に在るを以て、交通頗る便なり。戶數三百餘なれども、溫泉宿を業とするもの七十戶、每戶入浴の設備あり。而して更に本泉水より製したる內服用及び入浴用の鑛泉は瓶詰として販賣せり。大野郡大野町の東七里を距てる五箇村大字上打波に打波溫泉(炭酸泉十度)あり。富士岩の地

より湧出し、之れを二戸の浴舍に導き、火力を用ひて澡浴に供す。此の地經ケ嶽の溪間に位し、土地僻遠、道路不便なるを以て浴客多からず。其の他縣下に湧出するものを擧ぐれば左表の如くなれど何れも有名ならず。

福井縣地方溫泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	地質
丹生	糸生	天谷	天谷溫泉	鹽類泉	冷	富士岩
今立	河和田	上河内	上河内溫泉	炭酸泉	仝	第三紀層
仝	新横江	下新庄	下新庄溫泉	仝	仝	仝
仝	仝	仝	定・次溫泉	仝	仝	仝
仝	河和田	寺中	寺中溫泉	仝	仝	仝
遠敷	熊川	河内	河内溫泉	仝	仝	秩父古生層

新潟縣　本縣は溫泉に富み、各郡部に散在して其の交通多くは便なるを以て浴客陸續として來り集り、頗る繁盛を極む。縣の北隅岩船郡瀨浪村大字濱

青山湧泉

新田小字青山に於ては、去る明治卅七年四月上旬一油井より俄然熱水を噴出せり。附近の地質は第三紀層より成り、前記の油井は此の地層を穿貫せしものなるが、七八十間掘り下げたる時、堅固なる泥板岩に會し、此の時よりして既に多少の溫泉を湧出したり、而して尙深く下部の石英粗面岩を衝き、百四十間に達するや、突然井中の濁水噴出し初め、轟然たる音響と共に十數間の高さに噴騰するに至れり。然れども爾後其の勢衰退し、噴出の量も減じたりと云ふ。溫度頗る高く、手を觸るれば火傷す。泉水無色透明にして、クロール・ナトリウム・硫酸の多量及び燐酸・マグネンウム・カルシウムの少量を含有す。當時油井を變じて、溫泉となすの計畫を爲せるものありき。西蒲原郡關屋村にある關屋溫泉未詳十六度は村内第四紀層の水田の傍より湧出し、之れを浴槽に採酌し、火力を用ひて澡浴に供す。旅舍數戸あり。新潟市の西方僅に一里を隔てたるのみなるを以て、夏日は浴客頗る多し。同郡岩室村の岩室溫泉(鹽類泉二十一度)は彌彥神社の北一里に位し、岩室山と稱する小丘の麓第三紀層より湧出し、泉水無色透明無臭無味なり。浴舍三十餘戸、新潟・三條・長岡地

關屋溫泉

岩室溫泉

長崎溫泉

方より來浴するもの甚だ多し。同郡國上村字長崎にある長崎溫泉單純泉十七度)は、國上山の東麓なる第三紀層より湧出し、浴舍七戸あり。各湯槽の設け備はる。南蒲原郡三條町の南東約一里を距てる槻田村大字如法寺の東北隅、

如法寺溫泉

第四紀層水田の畔より湧出する如法寺溫泉(鹽類泉十六度)は、之れを酌み取りて槽中に貯へ、火力を用ゐて澡浴に供す。無色透明にして白色の沈澱あり。

矢田溫泉

本泉の南西約一里を距てる大潟村大字矢田には、矢田溫泉單純泉十六度)あり。同村の山間第三紀層中より湧出す。其の南西隣僅に一小丘を隔てる第三紀層

北潟溫泉

よりは、北潟溫泉單純泉十六度)の湧出あり泉水無色透明なり。西隣なる古志郡北谷村大字田井村の湯ノ澤溫泉(二十度)は、長岡より橡尾に至る街道に當り、

湯ノ澤溫泉

刈谷田川に接す。泉質未だ詳ならず。北魚沼郡湯ノ谷村大字上折立に、橡尾

橡尾又溫泉

又溫泉(硫黃泉)あり。湯澤川北岸花崗岩の地より湧出す。溫度は詳かならざるも秋冬の季は冷却して、浴する能はず。然れども土地幽邃にして、且つ効驗あるが故に、夏日は浴客頗る多く、本泉に來浴せんとするものは、北東の來迎寺驛よりするを最も便なりとす。南魚沼郡湯澤村の湯澤溫泉單純泉四十九

湯澤溫泉

度)は、湯澤山の麓第四紀古層の地より湧出し、二町を隔てる浴場に筧を以て通ず。泉水無色透明にして、少しく沈澱あり。土地三國街道に近きを以て、

松ノ山溫泉

來往に便にして、浴客頗る多し。東頸城郡松ノ山村字湯本に松ノ山溫泉(鹽類泉五十四度)在り。泉水は溪間第三紀層より二ヶ所に湧出し、村の中央に浴場を設け、筧を通じて之れを導く。四面山岳圍繞し、他村に到るに凡そ二里の

赤倉溫泉

峻坂を越へざるべからず。土地既に斯くの如く不便なる僻遠に位するも、風景幽邃にして、靜養に宜しきを以て、夏季來浴するもの甚だ多く、極めて繁盛なり。中頸城郡妙高村大字一本木新田の赤倉溫泉泉質未詳五十四度)は、信越線の田口停車場の西一里半に位し、遠く赤倉山の麓より湧出せるものを筧を通じて數個の浴槽に導き、浴舍十數戸あり。殊に其の旅舍の樓上に在りて

關山溫泉

風色を恣にするを得るが如きは、多く他に見ざる所なり。同郡關山村字湯河原に在る關山溫泉(炭酸泉五十二度)は、信濃街道の關山村を距る西二里半の地にありて、約一里は山徑にして、道路頗る嶮隘を極め、車馬を通ぜず。猶遠く妙高山中に燕溫泉あり、其他縣下の溫泉を列擧すれば左表の如し。

新潟縣地方溫泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	地質
三島	塚山	西谷	寺尾溫泉	不明	二十一度	第三紀層
刈羽	横澤		猿橋溫泉	仝	十七度	仝
仝	增田	原	原溫泉	單純泉	十六度	仝
仝	森近		森近溫泉	酸性泉	不明	仝
仝	横澤		山横澤溫泉	不明	十六度	仝
仝	大廣田		大廣田溫泉	鹽類泉	十八度	仝
仝	小澗ダニ		湯ノ谷溫泉	不明	仝	仝
仝	東城	赤田北方	臭水ヶ谷溫泉	炭酸泉	十六度	仝
北魚沼	蒲生ヒヲ		蒲生溫泉	不明	二十度	仝
仝	城川	時水	時水溫泉	炭酸泉	十八度	仝
仝	櫻町	地獄谷	櫻町溫泉	仝	不明	仝

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	地質
仝	三佛生		三佛生溫泉	單純泉	不明	第四紀古層
古志	北谷	田井	田井溫泉	不明	二十五度	第三紀層
仝	中貫	成願寺	成願寺溫泉	單純泉	十度	仝
仝	吉樫	吉水	吉水溫泉	仝	十六度	仝
仝	石坂	村松	片平溫泉	不明	仝	仝
南魚沼	大君田	大澤	大澤溫泉	仝	十七度	仝
仝	吉里		吉里溫泉	硫黃泉	二十度	仝
仝	六日町		六日町溫泉	不明	十七度	第四紀古層
東頸城	松之山	湯山	松之山溫泉	鹽類泉	五十四度	富士岩
中頸城	春日	中屋敷	春日山溫泉	不明	十八度	第三紀層
仝	七ヶ栃	窪	栃窪溫泉	鹽類泉	十五度	仝
仝	湯谷		湯谷溫泉	單純泉	十七度	仝
西頸城	東能生	中野口	中野口溫泉	酸性泉	不明	仝

石川縣

石川縣　本縣下は溫泉豐富にして、患者の靜養に適するの地甚だ多し。而して縣下溫泉の配布を通覽するに、多少火山に關係あるものゝ如し、其の白山に近き中宮・一ノ瀨等の溫泉が比較的高溫度を有するが如き、恐くは白山火山の働力と親密の關係あるものならん。今是等溫泉の名あるものを略述せんに、

中宮溫泉

石川郡吉野谷村字中宮の山中なる中宮溫泉(鹽類泉六十度)は、八谷川の西岸角礫質流紋岩の裂罅より湧出し、源泉より筧を以て東岸二ヶ所の浴室に通じ、之れに接して旅舍數戸あり。道路稍〻不便なれども、東に切張山・西に八谷山を負ひ、北方八谷川に臨み、其の風色佳なり、泉源の附近に硅華を沈澱堆積したる處あり。

湯涌溫泉

同郡湯涌谷村字湯涌の湯涌溫泉(鹽類泉三十九度)は、大高尾山の麓にありて、第三紀凝灰質砂岩の裂罅より湧出す。浴場は石を以て圍み、數戸の旅舍其の周圍にあり。傳說に據れば養老元年の發見にして、元祿二年火炎に罹りしを以て、舊記を詳にする能はずと。舊藩主歷世此の溫泉に浴して、病を治したるを以て、浴場補修の費を助くるを例とせり。安政二年地震のため、泉竅閉塞すること二旬に及びたれど、村民之れを開鑿して舊に復したり。金澤市を距る凡そ三里、道路山徑にして高低あり、車を通ずべからず。

粟津溫泉

小松町より西南二里十町を距る、能美郡粟津村大字粟津の粟津溫泉硫黃泉三十三度)は、角礫質流紋岩の裂罅より多量に湧出し硫化水素の臭氣あり。四面皆山を繞らし、後方の山上に藥師寺あり。境內老樹鬱蒼として、頗る幽邃なり。尾小屋・金平鑛山の通路に當るが故坑夫の來り浴するもの多し。官道を距ること僅に一里半、丘陵起伏すれども、道路不便なりと云ふべからず。

一ノ瀨溫泉

同郡山口村字辰口の辰口溫泉(鹽類泉二十六度)は、人家を離るゝこと南三町餘なる第三紀層丘陵の池中に多量に噴騰せる泉水を、筧を以て浴槽に引き、火溫を加へて澡浴に供す。里傳に曰く、此地古へ湯屋と稱せしが應永年中手取川洪水のため、沈沒して池沼となりしを、天保六年再興せり云々と。道路は粟生の官道に達する二里餘にして便なり。

同郡白峯村の一ノ瀨溫泉(炭酸泉三十四度乃至四十二度)は、湯谷川の左側に沿ひ、白山火山の基礎を構成する侏羅紀砂岩の間隙より氣泡を發揚して、多量に湧出し始めは透明なれども後には不透明となる。其味は鹹酸味ありて稍〻收斂性を帶ぶ、白山溫泉と稱する者是れ

片山津温泉

なり。夏季白山登山を兼ねて浴するもの多し。江沼郡作見村大字片山津にある片山津温泉鹽類泉三十八度内外)は、芝山潟の西南に當り、北陸鐵道動橋驛より、僅に一里を距つるに過ぎず。承應二年前田利明之を發見し、浴場を設けんとせしも、激浪のため妨げられて、其の効を奏せず。文政以後村民之れを採酌して、澡浴に供したり。源泉は陸地を距ること凡て百間許の湖底に湧出し、石槽を以て之れを圍み、樋を設けて浴場に導く。此の地後方に丘陵を負ひ、前方に柴山潟を望み、風光頗る明媚なり。

山代温泉

同郡山代村の山代温泉(鹽類泉七十四度)は、大聖寺町の東南一里十町の處にありて、本村の東方神明山下なる第三紀泥板岩の裂罅より多量に湧出す。其の泉質の良好なると、宿舍の清麗なるとを以て名あり。士女の來り浴するもの四時絶えず。地勢南に較掛山の餘脈を負ひ、北は廣濶なる平野に連る。現今村の中央に一大浴場ありて、之れを總湯と稱し、其の四周にある旅舍又た各浴槽を設く。本泉を距る西南一里十餘町なる山中村に山中温泉(鹽類泉四十八度)あり。大聖寺川の西岸第三紀凝灰質角礫岩の裂罅より湧出し、風景の幽邃なるを以て其の名高し。大聖

山中温泉

深谷温泉

寺驛より山中馬車鐵道の便あり。地勢三面山を負ひ、大聖寺川の清流其の間を回り、風光閑雅俗塵を絶す。河北郡藥師谷村字深谷温泉(鹽類泉十一度)は、山麓の第三紀層より湧出し、附近に數戸の宿舍あり。泉水淡褐色にして、之れに火力を加へて澡浴に供す。

新宮温泉

羽咋郡南志雄村大字新宮にある新宮温泉(鹽類泉二十七度)は、一名藥師野温泉と稱す。山間の溪谷花崗岩の地より湧出し、樋を以て浴槽に導く。

和倉温泉

鹿島郡七尾町の西北二里十五町の端(ハシ)村大字和倉の和倉温泉(鹽類泉八十二度)は、泉池は海岸に在りて、潮の干滿に隨ひて、湧量に增減ありと云ふ。往昔本泉は藥師嶽の西麓湯谷より湧出せしが、天正年間湮塞して現今の處に轉湧せり。當時今の地は海中なりしかば、爾來種々の施設を經て、遂に明治十二年大に土工を起し、山を拓き、海を埋め、大に面目を新め今日の繁盛を見るに到れり。海濱は屏風崎に接し、北に三口峽を望み、山色波光の美、眞に心身を靜養に適す。鹽類泉中本邦唯一の沃度泉に屬す。其の他本縣にある温泉を列擧すれば左表の如し。

石川縣地方温泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	地質
能美	白峯	—	河内溫泉	炭酸泉	四十三度	侏羅紀層
仝	仝	—	鳩ノ湯溫泉	仝	—	仝
仝	瀬谷	—	瀬領溫泉	仝	三十九度	第四紀古層
石川	富樫	—	山科溫泉	礬土泉	—	第三紀層
河北	津幡町	—	津幡溫泉	炭酸泉	二十九度	第四紀新層
鳳至	鵜川	—	鵜川溫泉	鹽類泉	十三度	第三紀層
珠洲	日置	—	佐野溫泉	酸性泉	十度	仝

富山縣地方

小川溫泉

富山縣　本縣下溫泉に乏しからずと雖も、他縣地方に比して、有名なるもの少し。下新川郡山崎村字溫田山中の小川溫泉は、小川の上流侏羅紀層流紋岩の裂罅より湧出し、泉源二ヶ所あり。一を舊湯(炭酸泉四十七度)と云ひ、他を新湯(炭酸泉五十度)と云ふ。二湯相隔つる僅に三町餘、共に木樋を通じて浴室に導く。近傍浴舍十餘戸あり、道路平坦にして、車馬を通ずるを以て、夏秋の候浴客甚多しと云ふ。同郡片貝谷村字西鐘釣に西鐘釣溫泉(炭酸泉四十九度)あり。黑部川上流の西岸花崗岩と石灰岩との接觸部より湧出し、其近傍に浴舍數戸あり。毎年五月より十月迄の間營業し、冬季は戸を鎖して平澤村に歸る、道路嶮岨にして、浴客の數多からず。同郡横山村に小黑部溫泉(硫黃泉四十七度)、硫黃澤溫泉(硫黃泉七十度)あり。二者何れも嶮惡の地域にありて、高山四時積雪を見る。同郡音澤村の入黑薙溫泉(炭酸泉四十二度)は黑部川の支流黑薙川の畔なる花崗岩の裂罅より湧出す。道路惡しく、冬春の候は開湯せず。上新川郡立山山中大鳶山の麓輝石富士岩の地に出枝原溫泉(硫黃泉四十九度内外)あり。泉水濁りて、少しく灰色を呈す。土地邊陬にして、只夏季立山參拜の信徒等の來り浴するものあるのみなり。同郡蘆峅寺を距る東方七里、常願寺川の上流に立山溫泉(硫黃泉五十六度)あり。富士岩の裂罅より溫泉の湧出するものの數所、就中最大なるものは熱湯なれども、其の位置不便にして、浴室の設けなし。道路嶮惡にして、且冬期積雪甚だしければ、夏秋の候を除くの外は浴客少なし。婦負郡八尾町の西南二里を距る山田村字湯村の山田溫泉(鹽

西鐘釣溫泉

小黑部溫泉

硫黃澤溫泉

入黑薙溫泉

出枝原溫泉

立山溫泉

山田溫泉

西明寺溫泉

類泉四十五度)は、山田川の岸頭第三紀層礫岩の裂罅より湧出し、筧を架して四個の浴槽に導く。其の位置八尾町に近きが爲め、浴客甚だ多し。西礪波郡五位山村大字西明寺には西明寺溫泉(炭酸泉十六度)あり。第三紀層より湧出し、之れより伏樋を設けて浴槽に導き、火溫を加へて澡浴に供す。東礪波郡平村字祖山の祖山溫泉(炭酸泉四十度乃至六十二度)は、庄川の河畔片麻岩を通ずる

祖山溫泉

玢岩脈に沿ひ、多量に湧出す。而して河流暴漲すれば湯槽を沒するに至る、毎年五月浴場を開き、十月に之れを閉づ。同郡利賀村大牧に大牧溫泉(鹽類泉四十度)あり。前者と同じく庄川東岸の片麻岩を通ずる玢岩脈中より湧出し、

大牧溫泉

茲に湯槽を設け、泉水を潴す。又た同質の溫泉其の對岸なる片麻岩の裂罅中より湧出すれども、道路嶮にして、牛馬を通ぜず、從つて浴客亦多からず。

第四章　氣象

一般の風土氣候

北陸地方は、凡そ北緯三十六度より三十八度に至るの間、溫帶の中央部に其の位置を占め、其地勢曩に述べたるが如きを以て、其の風土氣候は大陸と日本海との感化を享け、殊に冬季に際すれば、表日本地方の雨雪寡きに反し、北國の地は風雪殆んど寧日なく、又夏季に於ては、炎暑比較的烈しきを常とす。然れども、彼の黑潮の支流にして、本地方の沿岸に近く北流する所の對馬海流は、裏日本一帶の氣候に影響すること、幹流の表日本に於けるよりも夐に著しく、殊に冬季の如きは、大陸より來る西北風は此の濕氣に富める暖流の上を吹きて夥しき降水を與ふるも、氣溫は大に調和せられ、寒威を輕減せらるゝの益ありて、彼の中部地方に在る、諏訪湖の如きは、嚴冬に際し、全く堅氷の鎖す所となるも、本地方の沼澤は、未だ斯の例あるを聞かず。尙ほ此の海流の衝に當れる能登の北半部及び佐渡に於ける年內氣溫の變化比較的甚しからざるに徵するも、亦以て此の流に負ふ所尠からざるを識るに足るべし。要するに、北陸地方一般の氣候は、夏季の炎暑敢て他の低緯度の地方に讓らず。而かも冬季に於ては。雨雪甚だ多きも、氣溫は比較的高度を保ち、

敢て溫和適順の樂土とは稱すべからざるも、亦決して蕭殺なる朔北の胡地を以て目すべからざること、左に逐次詳述する所の如し。

尙ほ氣象上の現象として、富山灣の海邊にては、氣暦に疎密を生じ易しと覺しく、往々彼の蜃氣樓を現出することありとは、殊に越中地方の人々の稱ふる所なり。

蜃氣樓

氣溫

氣溫　本地方に於ける年內平均溫度の高低は、概ね緯度の高低と相比例し、福井の十三度四より新潟の十二度六までの間を測り、我が國一般臺灣を除く)の年平均溫度に比して尙約一・二度計り高く、夏季八月の平均は、福井の二十六度四より輪島の二十四度九までの間にありて、近畿地方よりは二・三度低しと雖、比較的低緯度に所在せる關東地方とは大差なく、又嚴寒一月の平均は、輪島の三・二度乃至新潟の一度三にして、彼の中部高原地方及び奥羽地方に於けるが如く、月平均の零度以下となることは殆んど絕無にして、他の同緯度の地よりも高溫を保ち、北緯三十七度五十分に位せる新潟地方は、同三十六度半の低緯度に位せる前橋地方と共に十二度の同溫線上にあり。殊に冬季には、本邦の同溫線は鋭き舌狀をなし、信越の境上に沿ひて南西に凸出するを見、本地方の寒氣差して甚しからざるを示す。北國の單に深雪なるの故を以て、亟寒凜冽堪へ難きの地と速斷するが如きは、大に誤れりと云ふべし。唯寒暑の差稍大なるは、風土上免る能はざる所たり。年內溫度の變化最も急劇なるは、九月より十月に移る間に六度以上の月平均差を以て降るとき、三月より四月に移るに際し、五度內外の差を以て昇るとにあり。其の最も緩慢なるは、一月・二月間の月平均に殆んど差を認めざると、七月・八月間の平均差僅に二度を出てざるとにあり。是等氣溫の變化は、他地方と類例を異にする所少しと雖、冬季に於ける最高・最低溫度の較差至つて少なるは、裏日本殊に本地方の常態として著しき現象に屬す。是れ冬季は陰霧の日多きよりして、夜間地熱の輻射作用を生ずること甚しからざるを以てなり。最近までの絕對溫度は、金澤に於ける最高三十八度五(華氏百〇一度三廿五年九月八日)福井に於ける最低氷點下十五度一(華氏四度八廿七年一月廿七日)を推し、高低の較差五十三度六の多きに及び、中にも福井は同一地にして猶五十度以上の較差を生ぜるを見る。而し

最高・最低氣溫

て本邦中比較的高緯度にある金澤にて、華氏百度以上の高溫を測りしが如きは、洵とに珍しき事にして、臺灣・琉球等の地方にも未曾有の現象たるのみならず、其の他福井・輪島及び伏木に在りても、往々華氏百度間際に昇りたることあり。然るに之れに反して、最低溫度の示度に至つては、非常に極端に達したるものを認めざるは、頗ぶる人の意表に出づる所なりとす。尙假りに最高溫度の三十度以上に昇りたる日を算へて酷暑日數となし、最低溫度の氷點以下に降りたる日を算へて嚴寒日數と見做し、之れを他の地方のものと比較するに、本地方の酷暑日數は意外に多きにも拘らず、嚴寒日數は至つて少く、凡そ北海道各地の三分の一、本州內陸各地の二分の一を算ふるに過ぎずして、東京及び山口地方よりも尙少きを見る。其の詳細は次表に示すが如し。

最高溫度の年內三十度以上に昇りたる日

地名	平均日數	連日引續きたる最長日數	初日 平均日	初日 最早日	終日 平均日	終日 最遲日
金澤	三十八日	二十六日間	六月十四日	五月廿三日	九月廿日	十月廿三日
伏木	二十日	十日間	六月廿七日	五月卅日	八月卅一日	九月十五日
新潟	三十日	十八日間	七月三日	六月十二日	九月七日	九月廿三日

最低溫度の年內氷點以下に降りたる日

地名	平均日數	連日引續きたる最長日數	初日 平均日	初日 最早日	終日 平均日	終日 最遲日
金澤	五十七日	二十四日間	十二月十日	十一月廿五日	三月卅一日	四月十七日
伏木	三十四日	十四日間	十二月十五日	十一月十七日	三月廿日	三月廿五日
新潟	六十五日	十二日間	十二月八日	十一月十七日	三月廿七日	四月九日

又た地方の氣溫を地球上同緯度の地に於ける模範(或は標準)溫度と比較するときは、左表に示すが如く、寒期に於て夫れよりも低きこと六度內外にして、內陸地方よりは約一度高きを示し、暑期に於ては、模範溫度と大差なきを見る。

世界同緯度地との比較

地名	北緯	寒期(一月)	暑期(七月)	年平均
金澤	三十六度三十三分	模範溫度よりも低きこと 六度三	模範溫度よりも高きこと 〇度二	模範溫度よりも低きこと 三度二
伏木	三十六度四十七分	同 低きこと 六度六	同 低きこと 〇度二	同 低きこと 三度一
新潟	三十七度五十五分	同 低きこと 五度七	同 高きこと 〇度三	同 低きこと 二度六

各項の終りに逐次掲ぐる所の氣象平均表は、主として明治三十六年までの累年平均を以て之れを示す。

平均溫度表（攝氏の度に據り、負と記したるものは零度以下なるを示す）

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	絕對最高	日	絕對最低	日
福井	二、七	二、五	六、三	一一、四	一六、五	二〇、二	二四、〇	二五、九	二一、五	一四、九	九、九	四、九	一三、四	三七、一	廿四年八月十六日	負一五、一	廿七年一月廿七日
金澤	二、四	二、一	五、三	一一、〇	一五、五	一九、九	二三、八	二五、六	二一、六	一五、三	九、八	五、〇	一二、二	三八、五	廿五年九月八日	負九、七	廿七年一月廿七日
輪島	三、三	二、七	五、二	九、九	一五、〇	一八、八	二二、三	二四、五	二〇、九	一四、七	一〇、〇	五、三	一二、七	三六、七	廿五年九月八日	負七、五	廿四年二月五日
伏木	二、三	一、九	五、四	一〇、七	一五、二	一九、六	二三、八	二五、八	二一、九	一五、八	一〇、二	四、八	一三、一	三六、六	廿三年八月廿五日	負二、一	廿七年一月廿七日
新潟	一、四	一、四	四、五	一〇、三	一四、九	一九、二	二三、四	二五、七	二一、七	一五、二	九、五	四、一	一二、六	三六、二	廿一年八月五日	負九、七	廿六年二月十二日

氣壓

氣壓　我が國年內氣壓の配布は、初卷來屢〻述ぶるが如く、一般に西部に高く、東部に低きが故に、本地方に於ける配布も略〻此の例に從ひ、其の年平均は、福井の七百六十一粍五より北東に到るに從ひ漸く示度を減じ、新潟の七百六十一粍乃至山形の七百六十粍八に及べり。而して七百六十一粍の同壓線は、東方に彎出せる孤狀をなし、紀州沖より三河・信濃を縱貫し、新潟の南方より日本海に向つて引くを得べし。年內低壓に達する時期は、各地一樣に七月にして、又高壓を呈する時期は、金澤より北東は十一月、南西は稍〻後れて一月或は二月とす。絕對高低示度は、最高新潟の七百七十八粍三（廿七年三月十四日）、最低金澤の七百三十二粍九（十八年七月一日）、其の較差四十五粍四にして、高壓部位の擴充移動するや、本地方は其の進路に當ること多きを以て、氣壓の大なる示度は屢〻之れを測れども、其の非常に小なる示度は、之れを測ること稀なりとす。

低氣壓

我が國に襲來する低氣壓にして、本地方に影響することの著しきものは、彼の屢〻記述したる所謂二百十日前後南海岸に侵來し、近畿地方を經、加・越・能地方を掠めて日本海に出づるものを主とし、其の他秋冬の候琉球附近より朝鮮海峽を過ぎ、日本海を一掃して、津輕海峽に出づるもの、及び冬春より初夏に亘り頻次支那東海の北部に發生し、朝鮮海峽より日本海の沿岸を通過して、間宮海峽方面に去るもの等にして、琉球附近より來るものは、冬季殊に

本地方の海陸を荒らすを以て著しく、支那東海發生のものは中部以西の地方をして、常に南西の暖風を起し、且つ豪雨を釀さしむるに顯著なるを見る。是等低氣壓の進行は、本地方に到りて漸く其の速度を加へ、陸地を離るゝに從ひて愈甚しとす。

平均氣壓表（粍を以て示し海面及び重力の更正を施せり）

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	海面及重力の更正
福井	七六五、一	七六四、三	七六四、三	七六二、五	七五九、〇	七五六、七	七五六、一	七五七、九	七五九、三	七六三、三	七六五、〇	七六四、四	七六一、五	加〇、三
金澤	七六四、六	七六四、三	七六三、八	七六二、〇	七五九、三	七五七、一	七五七、〇	七五七、六	七五九、五	七六三、二	七六四、〇	七六二、四	七六一、四	加二、〇
輪島	七六四、八	七六四、四	七六三、八	七六二、五	七五八、九	七五六、七	七五六、一	七五七、九	七五九、六	七六三、一	七六四、五	七六三、七	七六一、三	加〇、三
伏木	七六四、二	七六四、四	七六四、一	七六二、三	七五九、三	七五六、八	七五六、六	七五七、四	七五九、三	七六三、〇	七六四、一	七六二、四	七六一、四	減〇、二
新潟	七六三、三	七六三、五	七六三、三	七六二、〇	七五九、二	七五七、〇	七五六、九	七五七、六	七五九、六	七六三、一	七六三、〇	七六一、〇	七六一、〇	加一、八

最高（新潟）七七八、三　廿七年三月十四日　　最低（金澤）七三二、九　十八年七月一日

風

風向は地勢上所によりて多少趣を異にすと雖、概して南東若しくは南西寄りのもの多きに居る。冬季北若しくは北西の風、本邦一般に卓越するは謂ふまでもなしと雖、本地方一局部より見れば、北寄りの風却つて少きが如し。是れ上層氣流は北より來るも、下層風向は必ずしもこれと一致せざることあるべく、又冬季は海面の空氣溫暖にして、海陸風の作用を起すに際し、陸風は海風よりも比較的多きを占むること、之れに關係する所あるべきなり。四季の卓越風向は次ぎに記すが如し。

地名	冬 最多	冬 次	春 最多	春 次	夏 最多	夏 次	秋 最多	秋 次	年 最多	年 次
福井	南西	北西	南西	北西	南西	北西	南東	北西	南、南西	北西
金澤	南東	南西	南東	東	南東	東南、北西	東	南東	南東	東
伏木	南西	南	南西	北東	南西	北東	北東	南西	南西	北東
輪島	北及北西	南西	南西	北西	北	南	北	南	南	北
新潟	北西	南東	南東	西	北	南東	南東	北	南東	西

風力は新潟地方最も強く、伏木これに次ぎ、金澤最も弱くして、一般に沿

海及び平原に強きを示せり。概して裏日本地方は表日本地方よりも風力強きを常とし、強ち是れが原因には非ざるべきも、本地方の市邑は、祝融の災に罹ること甚だ多く、爲めに火災保險率は本邦中最も貴しと稱せらる。年内風力の強き時期は、各地一樣ならざれども、其の弱き時期は概ね夏季にあり。最強速度は伏木の一秒間三十八米三（廿二年九月八日）を推す。

又金澤伏木福井等の地方に於ては、殊に夏季に際し、屢〻乾燥なる暖風を山地より吹き下ろすことあり。岡田理學士等は、此の作用を以て彼の常に西ヨーロッパの山嶽地方に發生する所のフェーン風に等しきものなりと說けり。前記地方の夏季割合に高溫を示すことあるは、蓋し是れに因するものあるべし。

フェーン風

平均風向表

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
金澤	南六六度四	南六八四	南四五四	南四五四	南四八四	南六三四	南四一四	南一五四	南四七東	南四八東	南一一東	南五四四	南二七東
伏木	北二〇四	南八七四	北二六東	北六東	北一一東	北一三四	北二四東	北三五東	北四四東	北三五東	北六二四	南六〇四	南六五四
新潟	北七九四	北八六四	南六八四	南四八四	南四一四	南三八四	南三五四	南一〇東	南一九東	南五九四	南七七四	南七九四	北七一四

平均風速度表（一秒間、米）

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最強速度	同上日
福井	三、〇	三、一	三、七	三、八	三、三	二、八	二、四	二、五	二、四	二、六	三、六	二、九	三、〇	三三、七	廿三年八月十九日
金澤	二、九	二、七	二、六	二、五	二、四	二、〇	一、九	一、九	一、八	一、九	二、五	三、六	二、四	二八、四	廿二年十二月廿三日
輪島	四、五	四、三	四、二	三、七	三、七	二、九	三、〇	二、七	二、六	三、二	三、七	三、六	三、六	二一、八	廿四年二月十七日
伏木	四、〇	三、七	四、三	四、三	四、〇	三、七	三、四	三、四	四、〇	四、三	四、二	三、九	三、九	三八、三	廿二年九月八日
新潟	六、一	五、六	四、九	四、二	四、一	三、三	三、二	三、二	三、五	三、八	四、九	六、四	四、四	三七、五	廿四年十二月四日

濕度

濕度　本地方は濕度稍〻大なる地方に屬し、各地の年平均は何れも%八〇内外にあり。概して夏季と冬季とに最も大に、秋季これに次ぎ、春季に最も小なるを以て、年内二回の最大最小を呈するを常とし、表日本地方と聊其の趣を異にせり。絕對最小は金澤に於ける一九%（廿四年三月廿日）なりき。又水蒸氣張力の最大なりしは、金澤の三十四耗二（十九年八月五日）、其の最小なりしは、新潟の一耗一（廿七年二月十四日）なりとす。

平均濕度表（百分率）

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最小	同上日
福井	八五	八三	七七	七六	七六	八〇	八四	八二	八六	八五	八五	八七	八二	二七	廿四年五月一日及此外三回
金澤	八二	八〇	七五	七五	七六	八〇	八二	七九	八一	七九	八〇	八〇	七九	一九	廿四年三月廿日
輪島	七八	七六	七二	七五	十六	八〇	八五	八三	八三	七九	七八	七八	七九	二三	廿四年五月廿六日
伏木	八五	八四	七九	八一	七九	八四	八四	八三	八三	八〇	八二	八五	八三	二	廿四年五月廿日
新潟	八二	八〇	七五	七六	七六	八二	八三	八〇	八〇	七九	七九	八二	七九	二	廿二年六月五日

降水量

降水量 本地方の降水量は概して多く、就中越前・加賀・能登及び越中の西半部は、殊に其の夥多なるを以て識られ、年内の平均總量二千四百粍以上に及び本邦中降水量最多き地方と稱せらる大隅諸島起伊新宮地方に比較すれば稍〻寡しと雖、其の區域の廣狹より觀るに、また同日の談にあらざるなり。されば。本邦中一般に雨雪の多き地方を擧げんには、先づ首として本地方を推さゞるを得ず。殊に冬季に際しては、表日本地方の概ね晴朗なるに反し、裏日

深雪

本地方は常に陰鬱にして雨雪多く、就中其の中央に位せる本地方の降雪期（十二月・一月・二月）の平均降水量の如き、金澤は七十五日（三個月九十日間にて）其の總量八百十六粍、福井七十四日・總量七百八十六粍、伏木は七十四日・總量七百二十九粍、新潟は七十九日總量五百四十四粍の多きを測る。試みに之れを同期間に於ける東京の二十二日・百八十六粍の寡少なるに比較すれば、其の間に非常の懸隔あるを認むべし。蓋し冬季氣壓の配布、北西風の卓越を來し、其のシベリア內陸の寒冽なる平原を吹掃して驀然日本海を過ぐるや、對馬海流上より發散する所の水蒸氣を齎して、本州主山脈の北面に當れる裏日本一帶の地に於て悉く之れを凝結せしめ、夥しき雲霧を釀し、凍雲常に漠々、遂に雪霙となり、霏々として降下す。裏日本中の裏日本たる北陸地方の冬季降水多きは、實に此の理に外ならず。就中地形扇狀をして北方に開けたる溪谷地、例せば加賀手取川の上流、能美郡白峯村四近の如きは、此の作用最も甚しく、積雪常に丈餘に及び、往々二丈にも達することありとは、編者等曾つて該地に遊びて、地形上然かあるべきを信じたる所、南海地

方の人々の實に夢想にも及ばざる所たり。されば此の季節に際しては、諸所人馬汽車等の交通杜絶となるは言ふまでもなく、或は吹雪・頽雪の害に逢ひ、或は早春融雪の際、河川暴溢汎濫する等のこと頻々相次ぎ、一般人事上に及ぼす所の影響尠しとせず。彼の全市一面、滿目皚々たる銀世界の下に埋沒し、『此の下に高田あり』てふ標柱を樹つるに至れりとの奇談は、洵に北陸深雪の光景を評し得て妙なるものと云ふべし。而かも此の地方は、寒氣さして烈しからざること、既に氣溫の條に述べしが如し。（第十五圖）

降雪の光景

抑も本地方連嶺の峯頭に、初めて白冠を戴くを見るは、例年十月下旬若しくは十一月上旬頃にして、加賀白山の如きは、盛夏猶巔に殘雪の斑々たるを見る。十二月上旬頃よりは、平地も到る處霰雪降らざるはなく、其の方言に所謂根雪となるは、同下旬頃より降り積もるものにして、漸次深さを加へて寒中に至り、乾坤白皚々たる大美觀を呈す。殊に奇なるは、越後平原の風强き所には、往々積雪起伏して蜿蜒相連なり、所謂雪丘を形成するにあり。寒明け後は俗に泡雪と稱へ、融解早く、積ること多からざるも、彼の根雪は愈〻

堅密の度を增すを以て、俚言之れを「締り」と呼ぶ。青帝紖を回らして、日溫漸く加はるに從ひ、根雪も追々融解し、遂に三月下旬に至れば、平地は既に終雪を告げ、梅花先づ笑ひ、櫻桃尋いで綻び、百花爛熳殆んど同時に妍を競ふを見る。北國地方時候變移の急なる、亦自然上に於ける特殊の光景たり。

雷鳴

又本地方に於ては、俗に雪雷と稱へ、大雪將に來らんとするに方り、屢〻雷鳴を聞くことあり。此の現象は、一種低氣壓の進行に基くものにして、敢て北陸のみには限らざれども、他地方にては之れに反し、雷鳴は降雪歇むの兆と見做す所多し。

冬季に次て降水多きを九月中下旬時雨の頃とし、之れに次ぐを初夏七月の梅雨期の頃とす。要之此の地方の降水量は、冬季殊に多く春夏に寡く、其の趣表日本地方と全然相反することは、最も顯著の事實に屬す。今其の年內の變化に就て略述せんに、一月は十二月に次て多く、二月より漸次寡少を呈し、以て五月の最寡期に達す。爾後六月より七月に亘つて稍〻多く、八月に至つて俄に寡く、九月に又多く、十月・十一月は普通にして、遂に十二月の最多期に

達するを常とすること、各地殆んど其の揆を一にし、年々此の變化を繰返すものゝ如し。

降水量の絶對的に最多なりしは、福井の一晝夜間百九十三粍六（三十一年六月廿六日）を之れに次ぐものとす。降水量多き割合に豪雨の非常に大なるものを測りしことなきは亦一奇なり。

平均降水量表（粍を單位とす）

地名／月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年（總量）	最多一日中	同上日
福井	二五八、七	一八二、六	一三八、三	一三六、一	一三三、三	一六三、三	二八三、二	一四八、八	二六〇、八	一四五、五	二〇二、六	三四四、三	二三九七、三	一九三、六	廿五年七月十四日
金澤	二七一、三	一七四、八	一六七、三	一七五、〇	一四五、三	一六六、一	二一九、八	一五四、八	二一四、〇	二〇三、六	二七九、七	三六九、八	二五三八、五	一四六、八	廿一年六月廿六日
輪島	一八七、六	一四四、七	一二八、〇	一二六、四	一〇六、七	九〇、六	二四八、一	一五〇、六	二七二、三	一七一、〇	一九二、四	二六五、四	二〇八三、八	一三四、三	廿年九月四日
伏木	二五一、八	一四九、三	一三三、一	一三七、八	一〇九、一	一四三、一	二〇〇、四	一四二、六	一九三、二	一四九、二	二〇三、四	三二七、五	二一四〇、五	一〇九、二	廿二年六月廿四日
新潟	一九〇、〇	一二四、六	一〇七、七	一〇九、六	八四、九	一二九、五	一六一、二	二二〇、七	一七五、二	一五一、三	一九一、六	二二九、八	一七六五、九	一三四、五	十八年八月十七日

天氣

雨雪日數は、必ずしも前記雨雪量と相比例せざるものにして、本地方に於て殊に然るを見る。其の日數最多なるは一月にして、三十一日間の殆んど全部即ち二十六七日は、日として多少の降水あらざるはなく、十二月・二月・十一月遞次これに次ぎ、何れも二十日以上の平均雨雪日數を算ふ。其の最少なるは八月なれども、猶十一日或は十二日に及び、彼の寡雨地方の十日以内なるに過ぎざるが如きことは殆んど無く、一個年中各地平均二百日以上即ち約十分の六の雨雪日數あらざるはなし。殊に新潟地方にては、雨雪量の本地方中稍〻寡きに比して、雨雪日數は却つて多きを見る。而して連日引續き降水ありたる最長日數は、新潟の六十九日間（十六年自一月十六日至四月四日）を最とし、伏木の三十七日間（二十一年自一月五日至二月十二日）之れに亞ぐ。又之れと反對に連日引續き降水無かりし最長日數は、新潟の二十七日間（二十年自七月廿一日至八月十七日）を最とし、伏木の二十五日間（十八年自七月廿三日至八月十六日）之れに次ぐ。後者旱魃日數は敢て珍しからざるも、前者陰霖日數の約七十日間にも亘りたるが如きは、我が國に於ては、秋田の八十一日間（自十六年十二月二日至十七年二月二十日）に次で頗る稀有の事たり。

平均雨雪日數表（一粍の十分の一に達せざる日は此の日數に算へず）

地名＼月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年計	一年間百分比例
福井	二六、〇	二三、九	二〇、三	一五、一	一四、七	一二、七	一七、〇	一一、七	一六、七	一六、六	一九、三	二四、九	二一七、九	六〇%
金澤	二六、四	二三、四	二〇、一	一五、三	一三、九	一四、五	一五、〇	一一、七	一六、六	一六、八	二〇、三	二五、七	二一八、七	六〇%
輪島	三六、七	二三、六	一八、一	一三、一	一二、三	一二、三	一七、四	一二、七	一五、三	一五、一	二一、〇	二六、六	二一三、三	五八%
伏木	二六、六	二三、〇	一九、七	一五、七	一三、五	一四、七	一五、三	一一、八	一六、五	一六、三	二〇、三	二五、五	二一七、九	六〇%
新潟	二七、五	二三、八	二一、七	一五、六	一四、五	一四、一	一五、一	一一、一	一六、五	一八、〇	二二、四	二七、三	二二七、六	六一%

霜雪の季節

霜

霜雪の季節　本地方に於ける初霜は、平均福井の十一月上旬に之れを見るを早きものとし、輪島の十一月下旬に見るを遅きものとす。其の絶對的最早は伏木の明治二十三年十月二十一日なり。又終霜を告ぐる平均季節は、新潟・輪島の四月上旬を早きものとし、福井の四月二十日頃を遅きものとし、絶對最遅を輪島の三十四年五月二十一日とす。故に結霜あるべき平均期間は、新潟・輪島は凡そ四個月半なれども、福井は五個月半の長きに達す。實際に結霜ありたる年内平均日數は、伏木三十日、金澤二十八日、新潟十六日を算へ、其の數他地方に比して頗る少し。是れ本地方の必ずしも非常に温暖なりとの故にはあらず、冬季曇天多きよりして、結霜すべき要素に缺くる所あるを以てなり。

雪

又本地方の平地に於て初雪を見る平均季節は、新潟の十一月下旬を早きものとし、福井の十二月中旬を遅きものとす。其の絶對最早は新潟の二十二年十一月十二日なり。而し終雪を告ぐる平均季節は、伏木の三月下旬を早きものとし、新潟の四月一日頃まで降るを遅きものとし、絶對最遅を新潟の十五年四月二十八日とす。故に平均降雪期間は、福井は凡そ三個月半なるも、新潟は四個月以上の長きに亘る。由是觀之福井地方は結霜期間に於て長く、降雪期間の長きに亘るを知るべし。實際に降雪ありたる年内平均日數は、新潟七十二日、金澤五十九日、伏木五十七日を算へ、此の内新潟の日數は秋田の九十日に次て本州中第二位にあり。

霜雪季節表

地名	霜 初 平均日	霜 初 最早日	霜 終 平均日	霜 終 最遅日	霜期間 平均日	霜期間 最早日	雪 終 平均日	雪 終 最遅日	雪期間 平均日

福井	十一月五日	卅年十月廿二日	四月廿二日	卅六年五月三日	五個月二旬	十二月十日	卅四年十一月廿六日	二月廿三日	卅五年四月十一日	三個月半
金澤	十一月十四日	卅四年十月卅一日	四月十二日	廿九年五月八日	五個月	十二月一日	十七、廿八年十一月十四日	三月廿八日	十六年四月十五日	四個月
輪島	十一月廿一日	卅三年十一月三日	四月七日	卅四年五月廿一日	四個月半	十二月九日	卅四年十一月廿五日	三月廿三日	卅五年四月十二日	三個月半
伏木	十一月十三日	廿三年十月廿一日	四月十七日	卅三年五月十日	五個月一旬	十二月三日	廿八年十一月十四日	三月廿二日	卅一年四月廿一日	三個月二旬
新潟	十一月廿日	廿三年十月廿五日	四月四日	卅五年四月廿五日	四個月半	十一月廿六日	廿二年十一月十三日	四月一日	十五年四月廿八日	四個月一旬

警報信號標

左に例に據り、本地方に建設しある正式氣象警報信號標の所在地名を記載し、以て本章の結尾となす。（三十八年一月末現在）

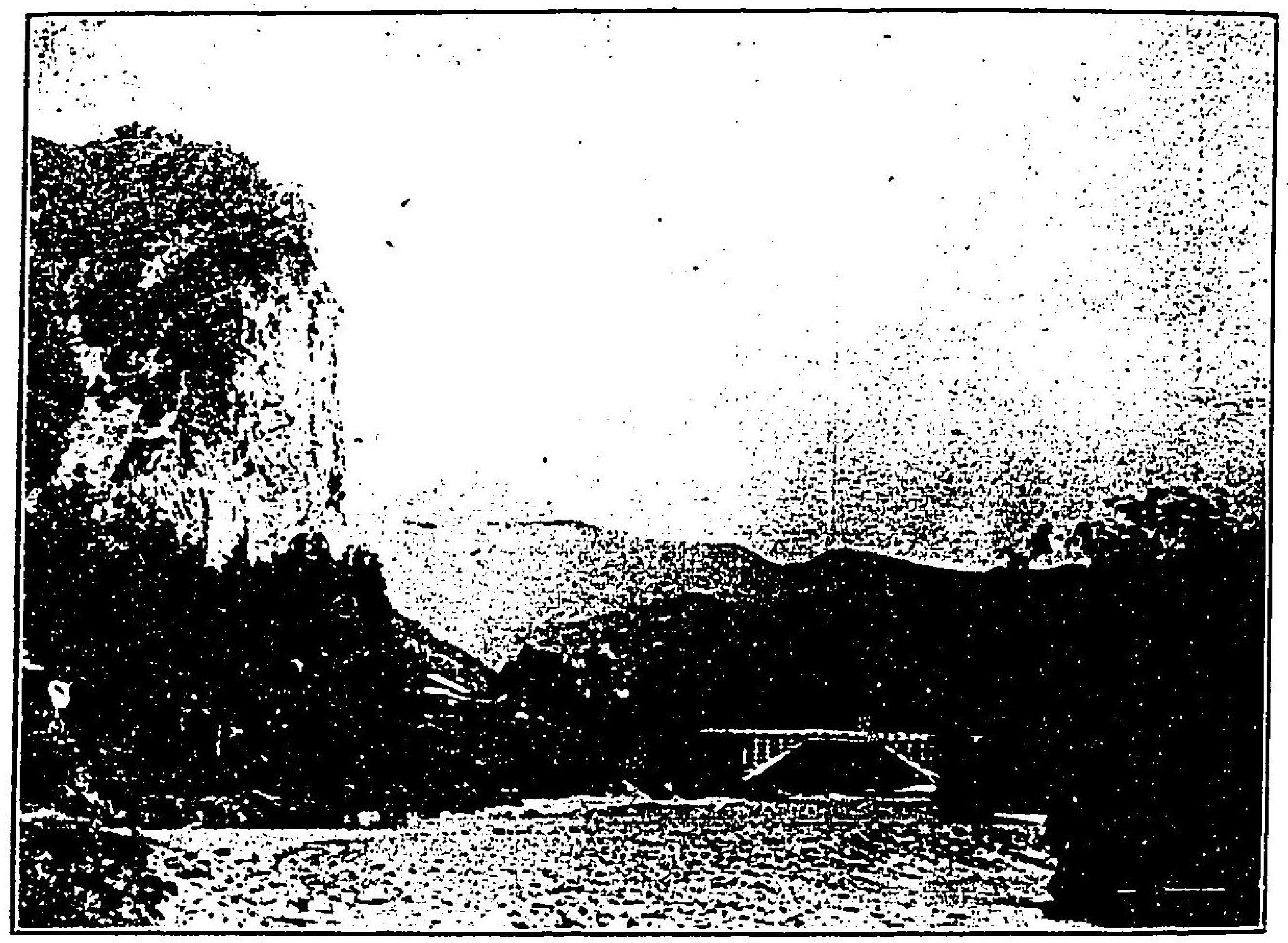
（福井縣）福井市日之出下町、敦賀町、三國町、小濱町。

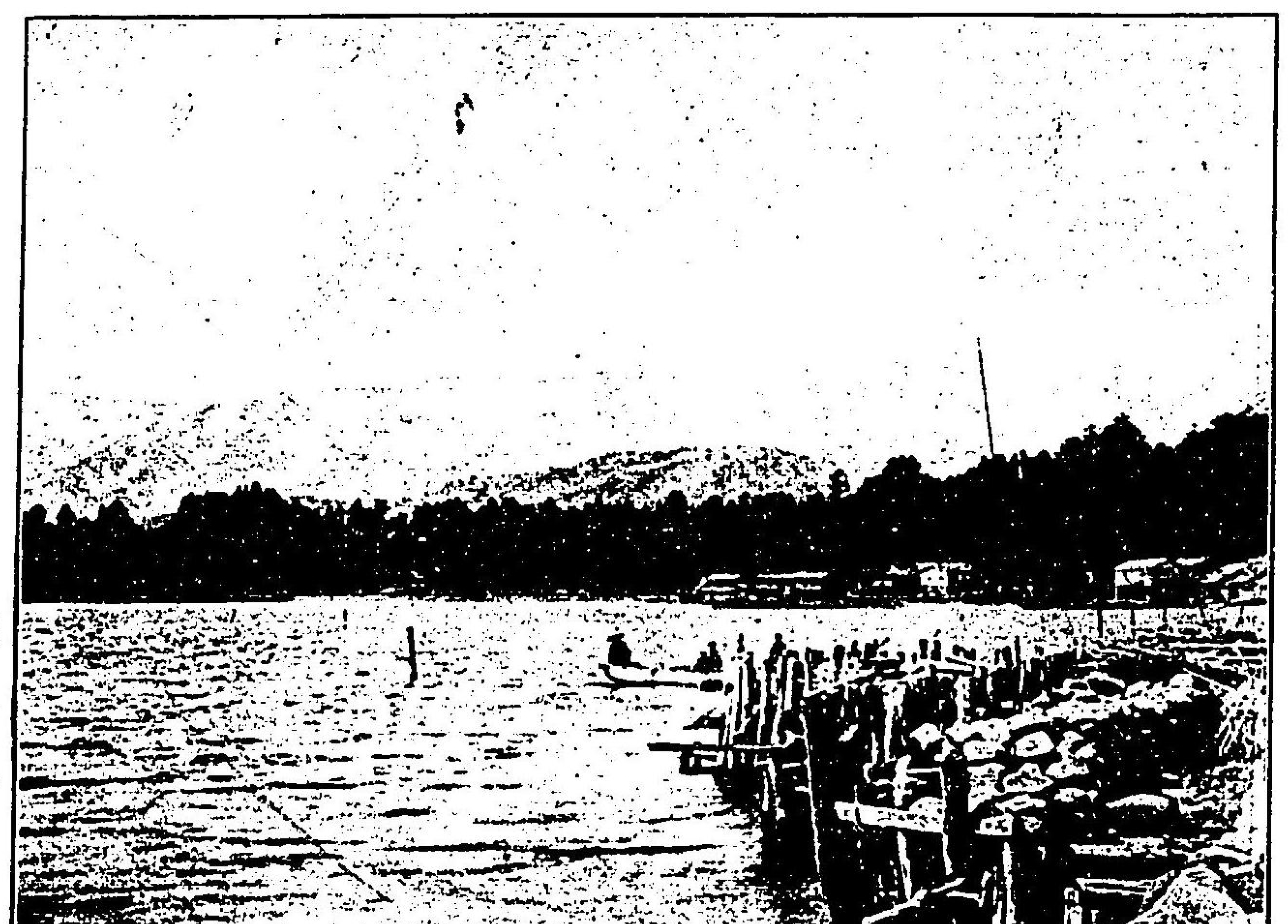
（石川縣）金澤市廣坂通測候所、大野町、金石町、美川町、安宅町。

（富山縣）東岩瀬町、滑川町、魚津町、伏木町、氷見町、泊町。

（新潟縣）新潟市旭町通測候所、同市西船見町、同市上大川前通、直江津町、岩船町、泊町、能生町、兩津町、相川町、澤根町。

(甲)越後八木ヶ鼻





(乙)佐渡加茂湖より金北山を望む

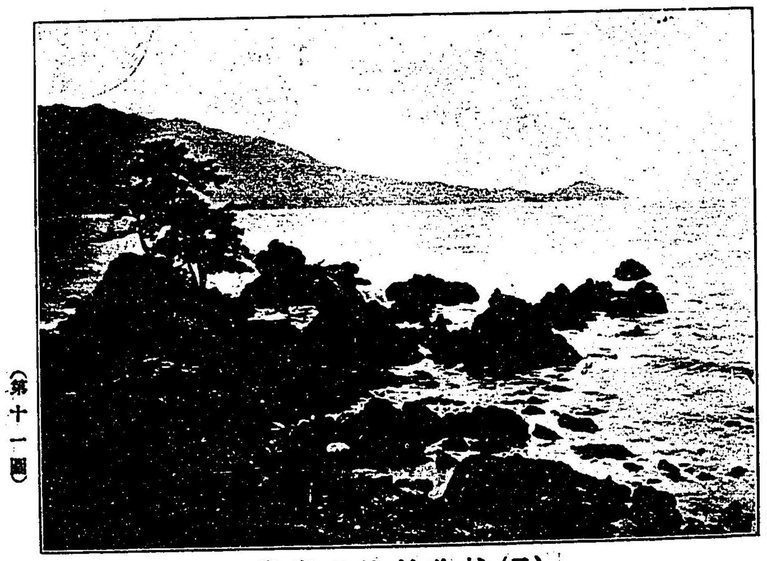
（第九圖）

(甲)若狹外面大門小門

(乙)同外面の海岸

(第十一圖)

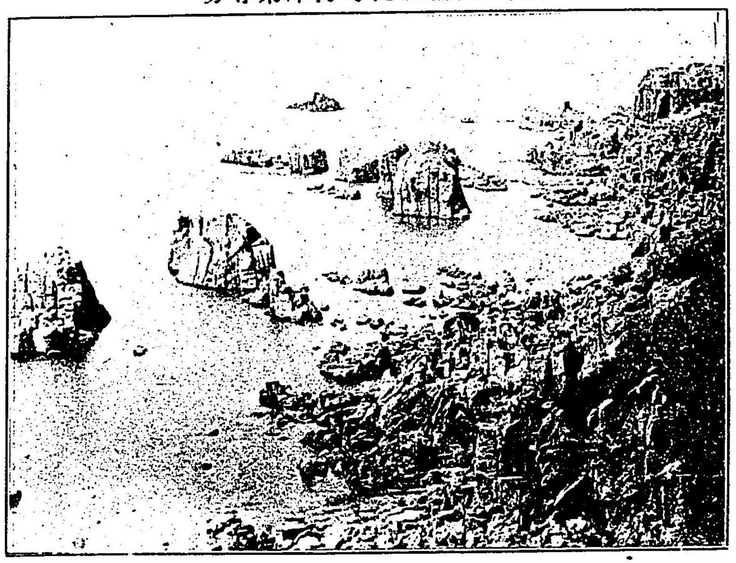
(甲)越前常宮辨天島



(乙)越前杉津の海岸

(第十一圖)

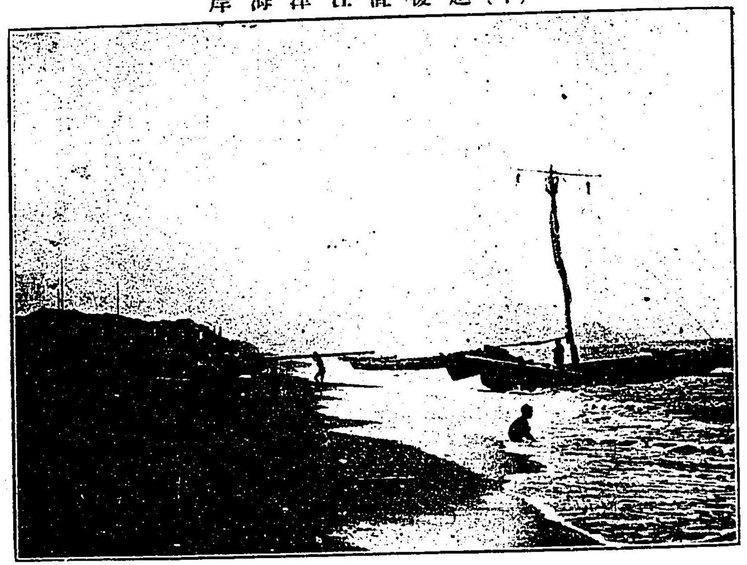
(甲) 越前三國町海岸東尋坊

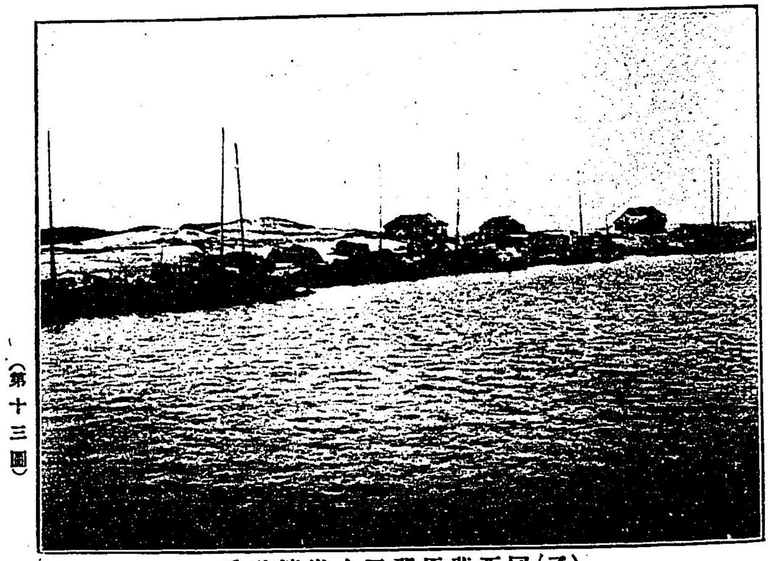


(乙) 能登和倉海岸

(第十二圖)

(甲) 越後直江津海岸





(乙) 同西蒲原郡五十嵐濱砂丘

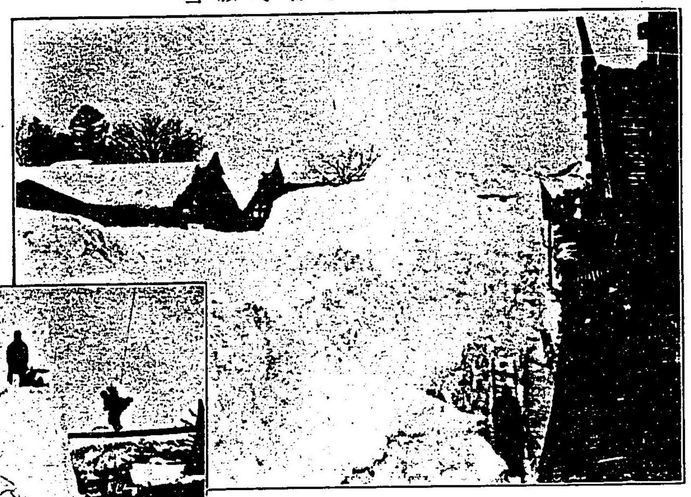
(第十三圖)

(甲)越後田代七ッ釜

(乙)加賀白山御前岳寶庫石

(第十四圖)

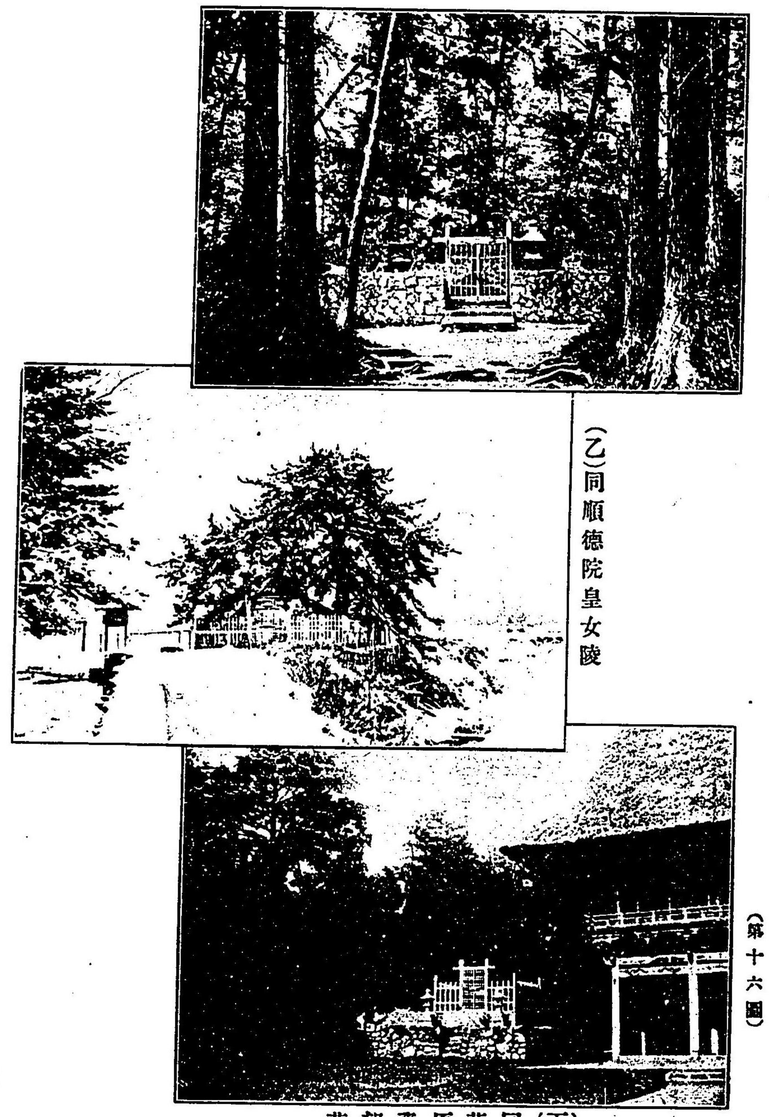
(甲)越後小千谷町積雪



(乙)同

(丙)同

(第十五圖)



(甲)佐波眞野御陵

(乙)同順德院皇女陵

(丙)同藤原資朝墓

(第十六圖)

第二編　人文

第一章　沿革

一　石器時代

石器時代遺物發見箇所

日本海の沿岸に蜿蜒として横はれる北陸道の地方が、石器時代に於て如何なる狀態にありしかを按ずるに、先づ明治三十四年四月東京帝國大學理科大學編纂發行に係る、第三版日本石器時代人民遺物發見地名表に據れば、北陸全體に於て合計百五十五箇所あり。之を日本全國に於ける遺跡總數三千四百六十六箇所に比較すれば、廿二分の一弱に當るに過ぎず。又た當代人民が全盛を極めたりし時と稱せらるゝ關東平原住居の頃、最とも多くその遺跡を止めたりし武藏一國六百八十三箇所に比して、僅に四分の一弱に當るのみ。今左に其の遺跡を國別に表示せん。

越前十四箇所。加賀二十箇所。能登二十二箇所。越中十三箇所。越後七十

遺物の種類

二箇所。佐渡十四箇所。

而して此等の諸處に發見せられたる遺物の種類には、石鏃最とも多く、其他石斧あり、石棒あり、石錐あり、石槍あり、石環・石匙・石劍・石冠等ありて、前諸卷に見えたる發見遺物の外に出でず。寧ろ種類に於ても其の箇所と同じく少なきのみ。又た右に擧げたる國別表中、越前に於ては加賀に隣接したる坂井郡に比較的多く發見せられ、加賀にありては石川郡その遺跡に富み、越後は三島及び西蒲原の二郡が比較的豐富の地方なり。北陸諸國に隣れる諸國中、遺跡の多き諸國は、信濃の百九十五ヶ所を最とし、飛驒の百三十八箇所之に次ぎ。羽前の百二十三箇所等なり。又前諸卷を通覽するに、關東に一千二百十六箇所、奥羽に九百九十二箇所、中部に五百四十四箇所、近畿に五十五箇所にして、北陸には百五十五箇所の遺跡あり。是を以て觀れば、本州の大部分に於て、其の數東北に多く西南に減少するを知るべし。されば我石器時代人民が西南の地方より、漸々東北に移住したりとの說ある、亦た偶然にあらざるを見るべし。

遺跡數寡の地方

蕭愼人說

北陸地方の石器使用人民に就ては、特に茲に詳說するの必要なし。唯第一卷に於てコロボックル人說を述べたり。第四卷に於ては石器時代人民と所謂土蜘蛛族との關係說を紹介したり。而して今茲には肅愼人なりとの一說を紹介せん。是の說や主として、北陸地方の石器遺物より胚胎し來りたればなり。其の主唱者は實に新井白石なり。彼が佐久間洞巖に贈りし書簡に云く、

上略石鏃三ッさて〳〵珍しく忝存候。此物の事は本期の國史に二所か三所か見え候。某方にも鹿島の浦出羽由利郡能登珠洲郡より出てし物と、此度被下候と合て十に罷成候。南部に居候親類どもよりも南部のものを可遣と申約候。此物俗間に申す軍神の矢根にて候。極めて古き物に候。即ち書經に候。琴・孔子家語・國語などには石砮にて肅愼の物に候。既に國史にも肅愼國の者、佐渡に入犯し候ことも候。蝦夷地入犯の事も候。中略太古の時に、彼國の者共入犯し候は云ふに及ばず、東奥・常陸又は越後の地に盤據し候て、度々の軍も候て、俗に神軍と申傳たるに候。其軍有之候時にかち得候て、かの軍役をほり埋め、又は塚などにし候が、急雨の時にはじき出され候を、

國史には降候と心得て記し置かれ候と見え候。假初にも西南地方になき物に候を以て、彌以て肅慎の楛矢・石砮・孔子の御覽及ばれ候ものと存候得ば、珍重の物に候云云

と。白石は北陸及び奥羽の地方に發見せし遺物を擧げて論じ、西南地方に絶無なりと爲し、肅慎說を推斷せり。然れども斯道の研究漸く盛となり、今日に於ては假令少數なりとは云へ、四國・九州・臺灣の各地方にも石器遺物を發見するに至れり。されば白石の首唱に係る肅慎人說の推斷には、吾輩は首肯し得ざるなり。降りて白石の說を紹述したる者、木內小繁の石鏃考あり。其一節に說て云く、「謹んで按ずるに、上古肅慎國の鏃なること、和漢の書に明らけし。中略憶ふに上古を指して神代と云ふ。神代の戰に用ゐたる矢の根なる故に、神軍の說あるか。風雨震動の後尋ね拾ふは、土砂の中より洗ひ出して拾ひ易き故なるべし。濃州の社友云ふ、鏃石を拾ふには、大雨後極めて宜しと。本朝通記に云ふ、肅慎國より日本を犯すこと三十六度、石の鏃に毒を塗りて發す。人にあたるときは忽ち死す。日本勢是に恐ると。同書に云ふ、齊明天皇二年阿部比羅夫肅慎國と戰ふ。後肅慎降りて生羆三・羆皮七十枚を貢すと。肅慎國は今の蝦夷なり。疑ふらくは鏃石出づる所は上古の戰場なるか。按ずるに阿部比羅夫の肅慎と戰ひし比は、今の松前熊石は勿論、南部津輕は一統に肅慎の地なりしなるべし云云」と。久米邦武氏の如きも、亦た我邦に石器を遺せし者は肅慎人にして、石器の分布は即ち是れ肅慎人の勢力圈を示すものなりと說かれたり。吾輩は四國・九州・臺灣の石器、皆悉く是れ肅慎人の遺物なりとは左袒し得ざるなり。我史上に見えたる肅慎國と北陸地方との關係、及び阿部氏の肅慎征討の事は、後段に之を詳にせり。

諸丹二尊の北陸經營

二　上古

伊弉諾・伊弉冉二尊が大八洲を統一したる時に方りて、今の北陸道の地方は如何なりしかを察ずるに、日本書紀の記する所に據れば、二尊筑紫洲を征服するの後、「隱岐佐渡を雙生して越洲を生む」と見えたり。實に所謂二尊大八洲生みの順序に於て、此の地方は第五・第六（一說に越洲は第七位に在りと）に位せり。當時此の地方は

異人種蝦夷の占據する所たりしは疑ひなからん乎。されば二尊は九州地方征服の後東北に轉じて、隱岐・佐渡の二島を平定し、隱岐に據りて山陰地方を循へ、佐渡に據りて越州の地に異人種を征服したるものと謂つべし。次て大己貴命國土經營に際して、此の地方亦た其の開拓する所となりしものゝ如し。古事記に「此八十矛神、將婚高志之沼河比賣幸行之時、到其沼河比賣之家云々」と見えたり。今越後國に奴奈川神社あり。思ふに沼河比賣なるもの已に北陸の地に在りて、當時の一豪族たりしものならん。而して命と比賣との間に建御名方命生れぬ。即ち信濃國諏訪湖近傍の地を開拓せしは此の人なり。その信濃に入るや、蓋し頸城の地方より山路を踰え或は信濃川を溯りて、漸々諏訪の地方には到りしならん。

大己貴命の經營

北陸の地が出雲種族と關係の深かりしことは、かの出雲風土記意宇郡の條、國引の一節に表はれて明かなり。即ち

前略また越の都々の岬を、國の餘りありやと見れば、國のあまりありと詔り給ひて。童女の胸すきとらして、大魚のきだつき別けて、旗すゝきほふり別けて、三つよりの綱うちかけて。縛つゝらくるや〳〵に、河船のもそろ〳〵に、國來〳〵と引き來縫へる國は、三穗の埼なり。云々

國引の傳說

是れ素盞男尊の孫なる八束水臣津野命が、出雲國元來小國なるを以て、新羅及び意支（今の隱岐）等の沿海地方の國土を割きて引き來り、出雲國に縫合したりとの傳說なり。此の傳說果して何等の史實を包含するや。或は移民拓殖か、或は征服か。思ふに是れ命が新羅の地、或は隱岐及び越の都々岬の地方を征定し、その地方の人民を出雲に移して、以て開拓に從事せしめたるなからん乎。要するに當時既に所謂國の餘りありと認められし、都々岬の邊、夫れ或は人民繁殖したりしにあらざるなからん乎。果して然らば越國即ち今の北陸の地方が、夙に開發し居りしを知るに足らん。

今此に所謂都々岬とは、果して今日の那邊に該るや。本居宣長はその著玉勝間十の卷に說て曰く、都々乃三埼（一本には都乃三埼とあり）はさだかならず。和名抄に能登國羽咋郡に都知郷、越後國頸城郡に都宇郷、神名帳に越前國敦賀郡又坂井郡に御前神社などはあり。これらの中にもやあらむ。猶よく尋ぬべしと。平田

都々乃三埼

篤胤は羽咋郡都知郷を以て是れなりと爲し、大日本地名辭書には都々は珠洲の轉聲なるべし。鈔註の諸家一致すと云へり。要するに都々岬の地は、今の能登國珠洲岬の地方と見て大過なかるべし。

北陸地方と韓國との關係

山陰道殊に出雲が三韓と密接の關係ありしは、皆人のよく知る所なり。而して山陰道と同じく日本海の一帶水を隔てゝ、韓地と相對したる北陸道の地、また之れと往復關係の頻繁なりしことは、察するに難からず。由來北陸の地には古社多く彦媛の稱號を有し、就中能登に於て最ともその多數を見る。即ち神名式に據れば、能登に羽咋郡の麻加夫都阿良加志比古神社、能登郡の加夫刀比古神社・荒石比古神社、白比古神社、阿良加志比古神社、鳳至郡の美麻奈比古神社・美麻奈比咩神社あり。その他越前敦賀郡に信露貴彦神社等あり。是れ上古にありて新羅・辨韓等より渡來して、これ等の地方に移住繁殖し、その子孫が、祖先崇拜の風より、祭祀するに至りしにはあらざるなきか。垂仁紀には、御間城天皇崇神之世、額有角人。乘一船一泊于越國筒飯浦一。故號二其處一、曰二角鹿一也。問曰、何國人也。對曰、意富加羅國王之子、都怒我阿羅斯等、亦名曰二于斯岐阿利叱智干岐一。傳聞日本國有二聖皇一、以歸化之云々と見ゆ。額に角ある人とは、是れ彼土の人々角額兜を冠せるを傳へたるものなるべし。加夫刀比古神社の稱號も是れより考ふれば、思半ばに過ぎん。

敦賀の名稱由來

爰に少しく越前敦賀の名稱に就て述べんに、敦賀又た角鹿に作る。大日本地名辭書の說明に云く、角鹿は額に角ある人の來り居れるに由り、其れに因みて地名と爲すと云ふは疑ふべし。若し古代の日韓兩國が、同語一詞の國なりとすればいざ知らず。（中略）都奴我てふ異族の人々、（蘇那曷叱智は都奴我の異聲同語也、叱智・斯等は韓語の渠帥なり、阿利・阿羅は韓の一國なり、干岐は韓語王なり。日韓古史斷にその說見ゆ。）の來り居れる地をば、やがて都奴我と呼べりと云ふに過ぎず。此の都奴我は本來韓語にして、蘇那曷とも、都魯鹿とも聞え、我語音に正しくは言ひあらはし得ざるものならん。されば古事記には、血臭と云ひ、靈異記には都魯鹿と載せ、和名抄にも都留我と註す。猶臆想にて云はゞ Tsung-Ka なりしを、我語法にてかくは寫したるならん。然りと雖ども今亦日韓同語の國なりとの推論をなすにも、此の敦賀は援引せらる

べし云々と。今俄に推斷しがたきも、近時我が韓國の經營進捗と共に、韓語の研究學者間に唱說せらるゝを見る。されば此の說の如きも其の審判を見る近きにあるべし。要するに古來敦賀の地は要津にして、韓人渡來の門戸たりしを知るべし。

崇神帝の朝四道將軍を置くや、十年癸巳九月大彦命に將軍の印綬を授け、北陸の地を戡定せしむ。時に其の弟武埴安彦叛して、山城より當時の京師即ち大和磯城郡三輪町なる磯城瑞籬宮地を襲はんとせしかば、大彦命は先之が鎭定に力め、其事平ぐや直に北陸の地方に發向して之を征定し、翌年四月に至り歸京平定を奏しぬ。北陸の名稱實に初めて此の時に見えたり。然れども古事記には北陸とは云はずして、高志國と稱せり。されば高志の北陸の名恐く後人の追書ならん。高志とはこれ越の國訓にして、古くは高志越相幷用せり。その他萬葉集には古思古之或は故之等に作る。又た高石と書きたるもあり。上古の所謂越と稱せる範圍は、今日の越前加賀能登越中越後より更に廣く、羽後の地方をも含めるものにして、北方は直に陸奥と相連接せり。又た

大彦命の北陸鎭定

高志の名稱

越の意義に就きては、近江美濃飛驒信濃の地より、此の地方に入るには、總て山阪を越ゆるが故に越と云ふ。日本釋記或は其他に角鹿と稱する阪路あり。行人之を踰えて越路に入るを以て越なり日本記纂疏と。或は異域の人來り調貢を運び越せしより越と號したり三州志、諸國名義考と。古事記傳の如きは、山を越えて行く國なるを以てなりと說きたり。又我邦全部を人體に譬ふれば、北陸の地方はその腰部に當るが故なりと。臆說も亦甚だし。而して越即ち高志の稱は、古事記神代卷に高志の八俣遠呂智の名見えたり。是れ地名か、人種の稱呼か、俄かに斷定しがたしと雖ども、その名稱は上古に存せしこと知るべし。又若狹は脇狹の意なりと。信じかたし。佐渡は迫門の義にして海路の狹きに因ると云ひ。或は郡名雜太に起原すと稱し。或は越路即ち越後地方より望見して里の如きより其名ありと云ふ。果して孰れか是なるを知らず。要するに大彦命の北陸鎭定は正史の載する所、又崇神帝の皇子大入杵命の墓は、能登國鹿島郡御祖村大字小田中の地にあるより察すれば、我が中央政府が此の地方の經營に着手せしは、此の頃に權輿せしものならん。而して皇子貴尊の身を以て、

北陸諸國の名稱

武内宿禰北陸路國を觀察す

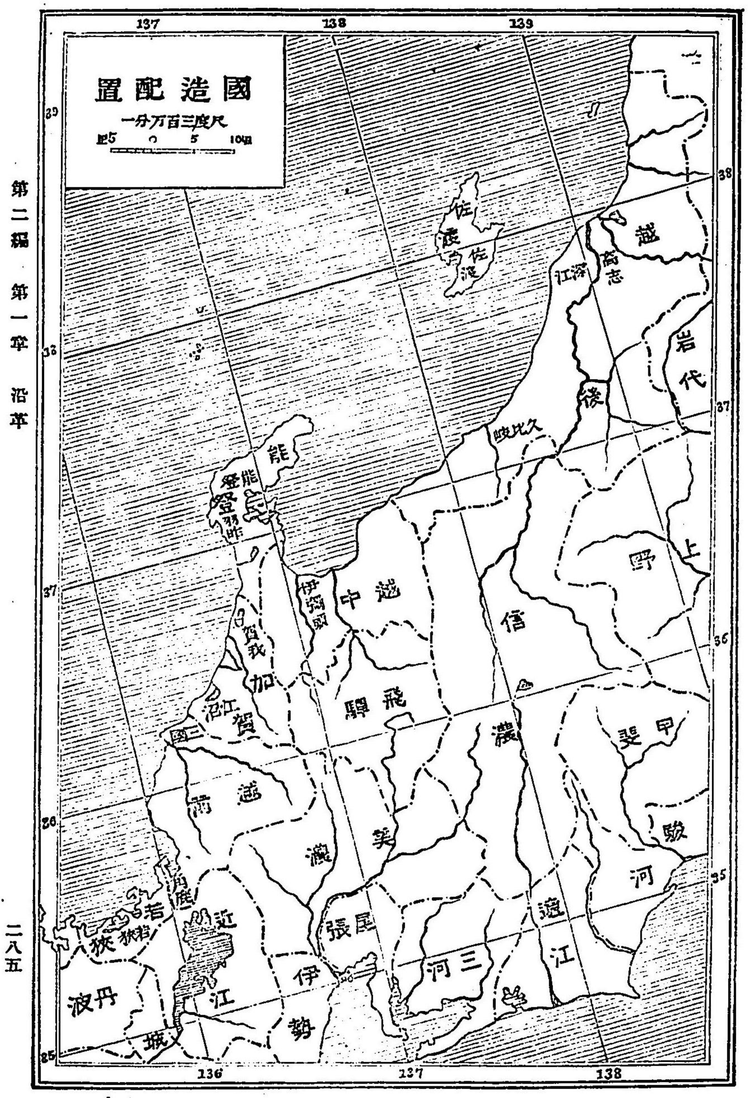
邊陬の此の地方に出でられしを以ても、其の經營に重きを置かれしを察し得べし。

景行帝二十五年七月武内宿禰をして、北陸及び東方諸國を巡廻せしめ、地勢風俗を視察せしめたり。次で四十年信濃及び越國頗る王化に從はざるが故に、吉備武彦を越國に遣して、之を鎮定せしむ。是れ北越の地蝦夷の據りしところにして、往古以來王化に染まず、放縱陸梁を極めたりしが故なり。降りて皇極帝の元年越邊の蝦夷數千内附すと見え、齊明帝の元年七月には越蝦夷九十九人を齎せし等の記事より見れば、その全く皇化に從ふに至りしは、遙に後代に在りしなり。

久比岐の地

深江國

國造本紀に據れば、崇神帝の時御戈命を久比岐國造に、素都乃奈美留命を高志深江國造に定賜すと見えたり。久比岐は今の越後國東西中頸城三郡の故地なるべし。また高志深江國に就きては、或は今の越前鯖江の舊名深江なりと稱し、或は故栗田博士の如きは、越後頸城郡沼川郷（今糸魚川根知谷今井谷青海市振より大和川谷早川谷の地方歟）深江村ある是れなりと。又一説には越後南西中蒲原三郡の地是れ古の所謂深江



國なりと。第三說最とも信憑するに足らんか。景行帝の朝膳臣の遠祖磐鹿六雁命に若狹國を賜ひて、子孫世々之を領知せしめたりき。成務帝の五年、山川田里の區劃を立て、國造縣主等を置くと雖ども、其の詳なることを知りがたし。其の後北陸諸國の各國造定賜の詳なることは之を略して、左に主として故栗田博士の國族造類考（栗田先生雜著所載）に據り、少しく補修して北陸諸國の國造等の族祖を揭ぐれば左の如し。

北陸諸國の國造

北陸道諸國國造配置表

若狹　孝元天皇……大彥命……宍人朝臣
荒礪命……若狹國造
越前　孝昭天皇……天足彥國押人命……伊部臣・丸部臣
孝靈天皇……稚武彥命……角鹿國造
孝元天皇……彥太忍信命……三國國造・江沼臣
加賀　孝元天皇……大彥命……越道公
彥太忍信命……江沼國造
垂仁天皇……意知別命……賀我國造
能登　崇神天皇……豐城入彥命……能登國造・能登臣
垂仁天皇……意知別命……羽咋國造・羽咋臣
越中　孝昭天皇……天足彥國押人命……和爾部宿禰
孝元天皇……彥太忍信命……伊彌頭國造・射水臣
越後　孝元天皇……大彥命……高志國造・深江國造
御戈命……高志公
佐渡　久志伊麻命……佐渡國造
成務帝の御宇、國縣の制定まり地方政治漸く緒に就くに及んで、僻遠の經營を見るに至りぬ。帝崩じて仲哀帝立つや、直に角鹿（越前）筍飯宮に幸し給へり。其の何の故たるを詳にせずと雖ども、氣比神社傳記に記する所は帝の偉略を傳へたり。又書紀通釋は、帝幣帛を筍飯大神に奉りて拜祭し、更に皇后氣足長姬（神功皇后）に敕して曰、朕此國を望見するに、海陸相通じて異賊を防ぐの地に

筍飯の行宮

當れり。朕八州を巡見して後に宮居を此に移して永居せんと欲す。且つ新羅久しく歸化せず、往昔御間城入彥五十瓊殖天皇崇神の御宇、意富加羅國の王子都怒我と云ふ者、こゝに來着し朝貢を献じて奉仕せり。活目入彥五十狹茅天皇垂仁の御代に至り、深く慈を垂れて、都怒我を彼の本土なる任那國に送り還らしむる時、新羅道を遮りて之に寇せり。豈に禮を我國に失ふにあらずや。恒に之を征せんと欲す。朕先づ南國を巡狩すべし。汝皇后此の地に留りて筍飯の神を祀り、三韓を退治せんことを禱り、宜しく北國海路の消息を聞くべし云々と。是れ未だ俄に信じがたしと雖ども、當時敦賀の位置と我邦及び韓地の形勢とに鑑みれば、必ずしも牽強附會の言にはあらざるべし。かくて帝は紀伊に巡幸し、更に熊襲背叛の爲め親征して穴門長門に幸す。皇后亦角鹿を發して赴き會せしか、適ま帝の崩御に逢ひ、皇后奮然として舟師を率ゐ外征し韓半島を征服しぬ。されば韓國經營の大策は、仲哀帝の角鹿行幸に其の端を開きしものと謂ふべし。

爾來十數代の間、時に蝦夷或は背叛騷擾し、或は內附朝貢したりしかば、

大迹皇子の開拓事業

北越の地方亦た時に叛服したりしこと察するに難からず。然れども史籍の記載なく信を考ふるに由なし。繼體帝未だ皇位に登らず男大迹皇子と稱せられし頃、越前坂井郡三國の附近に龍潛し給ひ、その地方を開拓せられしが如し。近時足羽山頭に御像を石造し、偉績紀念碑を建立して其の功德偉績を奉頌せり。其の文に據れば、皇子越前に在すの頃、國中洪水氾濫したりしを治し、今の三國港口を疏鑿し、日野・足羽・黑龍の三川を北海に導注せしめ、以て水害を除き併せて運漕の便を開けり。其の他石谷或は酌谷の採石業は、皇子の創むる所なり云々と見ゆ。是れ、一概に信じがたきも、亦皇子が此の地方の開拓に與りて功績ありしは、沒却すべからざるが如し。そは今日福井市に鎮座する足羽神社に、繼體帝を祀ると傳ふるもの偶然にあらざるなり。蓋し足羽神社は繼體帝の越前潛龍の際、大宮地の靈即ち宮中鎮座の座摩巫祭神五座の一なる、阿須波神を祀りしものなるに、後人天皇の故事を追慕して、之を本社に配祀したるなるべし。

足羽神社

肅愼人來航す

欽明帝の五年十二月越國奏聞して云はく、今年肅愼の船佐渡島御名部崎に

來りて淹留し、春夏の季魚を捕へて食と爲す。其の人言語通ぜず、島人之を畏れて敢て近かず、故に彼等抄掠を縱にす云々と。是れ肅愼人來航の我史上に現はれたる始めなり。肅愼に就ては古來幾多の說あり。今こゝに必要なければ略しぬ。次て皇極帝の元年に越邊の蝦夷數千內附すと史に見えたれば、此の地方の統治其の宜しきを得たるを知るべし。蝦夷に熟蝦夷・麁蝦夷・津輕蝦夷の別ありしことは前卷既に述べたるが如し。而して此の地方のものは所謂熟蝦夷にして、早くより我大和民族に接して、王化に歸服せしものならん。

三　大化以後奈良朝

孝德帝大化の改新に國造縣主の制を廢し、國司郡司を定めて管轄せしめたりき。是の頃に當り大化三年渟足柵を造り柵戶を置きぬ。翌年には磐舟柵を修めて蝦夷に備へ、越及び信濃の民を選んで柵戶を定めたり。渟足柵址今詳ならず。越後の中蒲原郡王瀨河渡の近傍にありしならん。沼垂濱の名蓋しその遺稱なるべし。磐舟柵は今越後岩船郡岩船町明神山蓋しその遺址なるべし。

渟足磐舟の二柵

此の地沙丘にして放眸頗る佳なり。その他當時の城柵にして史に見えたるものに、都岐沙羅柵あり其の址詳ならず。或は云く越後北蒲原郡今乙村あり、古へ乙と稱す。其位置渟足磐舟兩柵の中間にありしかば、柵間の濱なりしより、轉傳して乙と變ぜしならんと。或は然らんか。要するに北越の地方以上の三柵等を設けて、蝦夷の警戒に備へたりしかば、その近傍は靜穩となりぬ。是に於て邊陬經營は一步を更に北方に進めたり。

都岐沙羅柵

齊明帝四年四月越國守阿部引田臣比羅夫をして、舟師百八十艘を率ゐて蝦夷を討たしむ。比羅夫直に齶田秋田渟代能代二郡の蝦夷を降し、渡島蝦夷を綏撫し、更に轉じて肅愼を討伐しぬ。翌年三月彼は復た蝦夷を征し、齶田・渟代・津輕の三郡及び膽振鉏の蝦夷を歸服せしめ、後方羊蹄に治所を定め郡領を置て還れり。實に阿部氏は古より越國の豪族にして、其の地方に重きを爲したり。殊に比羅夫に至りて蝦夷肅愼を討伐して開拓綏撫に大功あり。その威の及ぶ處は秋田・津輕より更に遠く北海道の地に及びぬ。されば從來叛服常なかりし蝦夷も全く王化に歸服し、拓殖移民亦大に進捗せり。而して朝廷大に蝦夷綏

阿部比羅夫蝦夷及び肅愼を討つ

撫に努め、連年群夷に饗醼を賜ひ或は爵位を賜ひ冠位を授けたり。今次に越蝦夷に關する綏撫の大略を述べんに、

越蝦夷內附す

天武帝十年十二月、越蝦夷伊高岐那等俘人七千戸を以て一郡と爲さんと請ふ。朝廷之を聽して田川郡を置きぬ。持統帝三年正月には、越蝦夷に沙門道信佛像一軀及び幡鐘鉢等の諸器を賜ひ、同七月には越蝦夷八釣魚等に物を賜ふこと差あり。同十三年三月に越渡島蝦夷伊奈理武志等に、錦袍袴緋紺絁斧等を賜はりぬ。次て文武帝二年六月越後蝦夷方物を献じたりしかば、翌年四月朝廷越後蝦夷百六人に爵を授けぬ。此の如く惠恩厚く之に加へしと雖ども、亦一方にはその背叛を慮り、警備を嚴にしたり。即ち同二年十二月越後に令して磐舟柵を修理せしめ、次て四年復た越後・佐渡に課して其の修理を完からしめたり。

斯くの如く北越阪遐の地方異人種綏服に務むると同時に、既に全く王澤に浴するの諸國は益〻之が統治を計れり。天武帝の十四年九月東海・東山以下六道の使を置かれし時、北陸道の名は見えざりき。文武帝海內を七道に分ち各〻之に巡察使を置かれしときに、北陸道の分置ありしならん。而してその七國の區劃の定まりし年代一々詳にし難きも、越後の名稱は始めて文武元年紀に見えたり。然れ共是より先持統六年紀に既に越前の稱あり。越中の名は始めて續紀文武帝二年の條に見ゆ。されば三越の分置は、天武帝の朝諸國の境堺を制定せし頃にもやあらん。最とも古事記神功十三年の條に、建內宿禰太子を率ゐて高志前の角鹿に假宮を作ると見えたり。かく分置せられたる三越の中、越後は今日に比して遙に北方に廣かりしなり。即ち出羽秋田・能代の地方を含み、南方に於ては今日よりも狹く信濃川・阿賀川の河口邊に限られたりき。然れども幾もなく文武帝大寶二年に、越中の四郡（頸城・魚沼・古志・蒲原）を割きて越後に屬せしめ、元明帝和銅元年に出羽郡を立てゝ越後に隸せしが、同五年始めて出羽國を分置し、越後の田川・出羽の二郡を割き最上・置賜・飽海・三郡と併せ之に屬しぬ。かくて此の頃に於ける北陸道の諸國とは、今日の如く七國にはあらずして、若狹・越前・越中・越後・佐渡の五國ありしのみ。能登（養老二年分置）加賀（弘仁十四年分置）共に當時越前の內に包含せられたりき。

北陸道分置
三越分置年代
上古越後の範圍

歷朝大に蝦夷絆服に務めたりしことは、前既に述べたるが如し。然れども彼等は無智蠢愚の徒、加ふるに歸服日猶淺くして、所謂「承恩則忘、見怨必報」の俗、一朝一夕に我王民と爲しがたきや明かなり。元明帝和銅二年に至りて、越後・陸奥の蝦夷屢〻良民を侵害するの飛報あり。是に於て三月使を遣して、遠江・駿河・甲斐・信濃・上野・越前・越中の兵を徵發し、左大辨巨勢麻呂を以て陸奥鎭東將軍と爲し、民部大輔佐伯石湯を征越後蝦夷將軍と爲し、內藏頭紀諸人を副將軍と爲し、節刀軍令を授け道を分ちて往き征せしむ。同七月諸國に令して兵器を出羽柵に運送せしめ、又越前・越中・越後・佐渡に課して、船一百艘を征狄所に送らしめたりき。かくて翌八月に及んで蝦夷平定し石湯諸人等凱旋しぬ。帝依て詔見して其の勳功を賞し給ひぬ。是より朝廷蝦夷を遇するの厚きを加へしこと前日の比にあらず。即ち翌和銅三年正月朔帝太極殿に御して、賀正を受けらるゝ時に、蝦夷亦其の列に在り。次て帝重閣門に御して夷人等に宴を賜ひ位祿を授け、又彼等に君姓を賜ひ編戶を同うすることを許しぬ。

征越後蝦夷將軍

元正帝の靈龜二年、中納言巨勢麻呂出羽移民を建言するや、越前・越後・信濃・越の民を奥羽の地に移す

等の民各〻百戶を以て出羽に隸屬せしめ、又出羽柵防備として信・越の地方より人民を移らしむること屢〻なりき。和銅七年に於て越後・信濃・尾張・上野等の人民二百戶を出羽柵戶に配し、養老元年及び三年にも亦同樣の事ありき。かくて出羽柵の警備充實するや、更に多賀柵（陸前宮城郡多賀城村）を築きて邊寇に備ふるに至れり。而して從來越後地方にありし淳足・磐舟及び都岐沙羅の三柵は、漸く廢するに至れり。是れ北越地方の蝦夷は全く服從したる乎、或は大和民族と混和したる乎を證するものなり。爾來越後の地方には蝦夷の背叛騷擾を聞かざるこゝとはなりぬ。

越後蝦夷全く服從す

當時の北陸諸國の地方政治を按ずるに、養老五年八月越前に按察使を置きて佐渡をも管せしめたりと雖ども、未だ合併したるにはあらず。佐渡は元と雜多の一部なりしが、是の年加母・羽茂越の二郡を增置したり。聖武帝天平十五年二月に至りて、佐渡は之を越後に屬せしめたりしが、幾もなく孝謙帝天平勝寶四年十一月、舊に仍りて別に一國となし世々國司をして治めしむ。能登は古來自から一國の形を成せしも、此の頃まで越前に隸屬したりしが、養

北陸諸國の地方政治

能登の分置

大伴家持越中守となる

老二年五月越前の羽咋能登・凰・至・珠洲の四郡を割きて、能登國を置かれしは續紀に見えたり。次て天平十三年十二月之を越中に併せ、更に天平寶字元年五月舊に依りて分置したり。今日の加賀は此頃は越前の加賀・江沼の二郡に過ぎざりき。是の頃に當りてかの有名なる歌人大伴宿禰家持は從五位下を以て越中守に任ぜらる。時に天平十八年なりき。彼は直に任所に赴き國務を執りぬ。家持庭中花の歌に、

美由伎布流、古之爾久太利來、安良多末能、等之能五年、之吉多倍乃、手枕末可受、比毛等可須

とあり。之に據れば彼れが越中に在りしことは、五年間なりしを見るべし。然れども天平十八年より天平勝寶三年彼れが歸京せし間を算ふれば、在任六年なりしものゝ如し。この穿鑿此に要なければ略しぬ。彼れは在任中その領内なる、礪波・婦負・新川・能登・凰・至・珠洲の諸郡を巡行しぬ。實に萬葉集中彼が此の地方の歌賦を載せて、數十首の多きに及ぶ、偶然にあらざるを知るべし。

北陸の地古來韓國との交通頻繁なりしことは、前述したるが如し。此の頃

渤海國使節の渡來

に及んでは渤海國（東方日本海に面し西は契丹、南は新羅北は黑龍江地方に及び吉林寧古塔附近なる忽汗城に都せり）の使節、此の地方に渡來入覲すること漸く多し。聖武帝神龜四年九月高齋德等八人出羽に來る。是より先彼の寧遠將軍高仁義等二十四人蝦夷地に到りしが、殺害に逢ひ高齋德等僅に免れて出羽に到れり。次て天平十一年七月使節己珍蒙等又た出羽に來りぬ。孝謙帝の天平勝寶四年九月使節暴施蒙佐渡に渡來す。左大史坂上老人等命を受けて越後に到り之を慰問しぬ。淳和帝天平寶字六年十月渤海使節王新福等二十三人越前加賀郡に來る。此の前年には伊吉益麻呂等を彼國に派遣せり。

渤海使節を越前に安置す

かく彼我の使節往復漸く頻繁となるに及び、彼の國書驕傲の辭あるに至りしかば我之を斥け、又た我北邊に來ること勿らしめたり。然れども彼れ漂着と稱して來航絶えず。光仁帝寶龜四年六月使節烏須弗能登に來るや、國司之を斥け糧食を與へて放還し、再び我北海に來る勿らしめ道を筑紫の地に取るべきを諭したれども、同七年十二月には使節史都蒙等海上颶に逢うて越前に來りぬ。朝廷終に之を其の地に安置して衣食を給するに至りぬ。同九年使節高淑原等越海に溺死し、その浮屍越前に漂着せしかば、勅して之をその地に埋葬

せしめたり。同年九月又使節張仙壽等越前三國港に來れり。斯く連年渤海の使節渡航多く越登の地に來りしかば、終に客館を松原（敦賀市近傍）その他に設くるに至れり。

愛發關

當時三關の一たる越前愛發關は、樞要の關門として嚴重に堅められたり。此は近江と越前との境上に在りて、鈴鹿（伊勢）不破（美濃）と並んで三關と稱す。平安朝に降りては愛發廢して逢坂關起りたれば、平安朝の所謂三關は愛發を算せず。奈良朝の頃大和より北陸の地に入るは、琵琶湖の西岸に沿うて高島郡今津を經、海津に出て、七里半越を踰えて敦賀に到る。七里半越は是れ愛發山の連山なれば、關址は恐らく此山中にありしならん。今その關址を詳にし難し。或は駄口にありしと云ひ、或は山中に或は追分附近にありしと稱す。又たその創置の年代も詳ならず。元明帝和銅元年三月の勅に三關の事見え、同二年九月には從五位下藤原房前命ぜられて、關剗檢察に出張したる事あり、されば設置も此の頃にありしならんか、元正帝養老五年太上天皇不豫なるを以て、使を遣して三關を固めしめたり。後大喪なる毎に必ず三關を堅めしめ

惠美押勝の叛

たるより察すれば、當時に在りて如何に之か重要視せられたるかを知るに足らん。孝謙帝天平寶字八年惠美押勝叛するに際して、朝廷先づ三關を堅めしむ。押勝又た太政官印を盜みて近江に奔るや、朝廷北陸諸國に令して太政官印を承用するを禁じぬ。時に官軍佐伯伊多智等馳せて越前に入る。押勝之を知らず、精兵數十を遣して愛發關に入らしむ。時に物部廣成等之を排拒す。押勝進退谷まり終に道を變じて復た愛發を指せしが、事終に就らずして誅戮に伏しぬ。

北陸道の佛教

聖武孝謙の朝はこれ佛法甚だしく尊崇せられし時にして、始めて諸國々分寺を置かれしは神龜九年に在り。同十三年に至りては每國の僧寺に封五千戸水田十町を施し、尼寺には水田十町を附しぬ。又た僧寺には必ず二十僧を置き光明四天王護國寺と名け、尼寺には十尼を置き法華滅罪寺と稱しぬ。然れども北陸の地方果して此の時に國分寺の建立遍かりしや否や疑はし。同十九年越中の人礪波志留志米三千石を以て盧舍那佛を奉ぜしかば、帝之を賞して志留志に外從五位下を授けられぬ。次て勅して諸國司を戒飭し、或は使を遣

して寺地を檢定し、寺費支給を增加し寺塔建立を奬勵せられしかば、此の地方にも亦た漸く佛敎普及するに至りしなるべし。

配流地

初め聖武帝神龜元年三月始めて配流の地を定め、京師を距る遠近の道程に從ひ三等に分たれし時、佐渡は伊豆・安房・常陸・隱岐・土佐と並びて遠流の地たり。越前は安藝と共に近流の地とせらる。されば官爵ある人にして此等の地に配流せれたるもの史上に多く見ゆ。孝謙帝の天平寶字二年十月の勅に、從來國司交替四年の期限を改めて六年と爲し、三年毎に巡察使を遣して國郡司の政績を檢し、人民の疾苦を問はしめき。今此の時代に北陸道に巡察使或は觀察使となりし人にして、その名史に著はるゝ者には、天平十六年九月從五位下石川朝臣東人、同十八年四月中納言從三位巨勢朝臣奈氐麻呂、天平勝寶六年十一月從五位下藤原朝臣武良志、天平寶字二年正月正六位上紀朝臣廣純、同三年十二月從六位上石上朝臣奥繼、天平神護二年九月從五位上豐野眞人出雲、寶龜七年正月從五位下吉備朝臣眞備等ありき。

巡察使觀察使

四　平安朝

愛發關全く廢す

桓武帝延曆八年七月越前及び伊勢・美濃三國に勅して曰く、關を設くるは本と非常に備ふるが爲なり。今や海內一統したるを以て關險を置きて、中外を隔絕するは政務に益なくして、却て人民の煩憂たり。故に三國の關は一切停廢し、その兵器糧食は各國府に運收すべしと。而して平城帝大同元年桓武帝崩御に際して、使を越前・美濃・伊勢に派して三關を警戒せしめたれども、この後は愛發の關全く廢したり。

加賀の分置

嵯峨帝の弘仁十四年越前守紀末成奏請すらく、加賀郡は國府を距ること遠く往復に便ならず。且つ途中四大川ありて洪水に遇ふ毎に人馬阻絕す。又た郡司郷長遠阻に乘じて任意侵漁し、人民爲めに怨嗟す。而かも訴ふるに由なく終に逃散するもの多きに至る。別に一國を分置して加賀と名けんと。依て是年三月越前の加賀・江沼二郡を割きて加賀國を置き、六月に越前に今立郡・加賀に能美・石川二郡を新設しぬ。是に至て今日の北陸道七國の設置全く成りぬ。

今左に國府及び國分僧寺所在地を掲げて、是等諸國の地方政治及び信仰の中心地を示さん。

國府及國分僧寺所在地

國府所在地

若狹　遠敷郡今富村大字府中
越前　南條郡武生町
加賀　能美郡古河村大字古府
能登　鹿島郡矢田郷村大字府中村
越中　射水郡伏木町大字古府村
越後　中頸城郡直江津町大字鹽谷新田　中頸城郡國府村大字五智國分
佐渡　佐渡眞野村大字竹田　佐渡郡眞野村大字國分寺

國分僧寺所在地

若狹　遠敷郡遠敷村大字國分
越前　南條郡武生町大字曙町
能美郡古河村大字古府
鹿島郡德田村大字國分
射水郡伏木町大字國分村
中頸城郡國府村大字五智國分
佐渡郡眞野村大字國分寺

又た北陸の地方に於て古來尊崇の厚かりし一の宮表を擧げ、その祭神及び所在地を記すれば次の如し。

一の宮所在地及北祭神

所在地	社名	祭神
若狹遠敷郡遠敷村	遠敷神社	上社彦火々出見尊　下社玉依姫
越前敦賀郡敦賀町	氣比神社	伊奢沙別命及仲哀天皇
加賀石川郡河內村	白山神社	上社菊理姫　下社伊弉冊尊
能登羽咋郡一宮村	氣多神社	大己貴命
越中礪波郡高瀨村	高瀨神社	大己貴命
越後西蒲原郡彌彥村	伊夜比古神社	天香久山命
佐渡佐渡郡羽茂村	度津神社	五十猛命

北陸諸國諸郡名

當時海內の諸國は各〻大・上・中・下の四等ありて、國守より以下介・掾・目・史生其の員數等しからず。又た京畿を距る道程によりて遠國・近國の別あり。從て納稅の納付期限を異にせり。例へば仁明帝の承和八年に越前・能登・越中の貢調期限翌年の二月なりしを、年內十一月に復せしが如き是れなり。次に延喜式に見えたる北陸道の諸國郡を列擧せん。

（和名抄）

若狹　和加佐　遠敷（オホイヒ）　大飯（ミカタ）　三方
越前　古之乃三知乃久知　敦賀（ツルガ）　丹生（ニフ）　今立（イマタチ）　足羽（アスハ）　大野（オホノ）　坂井（サカヰ）

加賀　訓閲　江沼　能美　加賀　石川
能登　訓閲　羽咋　能登　鳳至　珠洲
越中　古之乃三知乃奈加　礪波　射水　婦負　新川
越後　古之乃三知乃之利　頸城　古志　三島　魚沼　蒲原　沼垂　石船
佐渡　訓閲　羽茂　雜太　賀茂

渤海使節渡來

奈良朝の時越前・能登の地方に、渤海の使者頻年渡來せしこと前述の如し。此の時代にも猶我禁制を顧みず來航するもの尠からず。延曆十四年には使節呂定琳等六十八人漂流して、蝦夷の爲めに剽刼せられしかば、之を越後に置きて衣食を支給せり。嵯峨帝弘仁元年五月渤海の首領高多佛なるもの脱して越前に來りしかば、その地に安置して食を給し、人を撰んで渤海語を就學せしむ。後ち高多佛に高庭高雄の姓名を賜れり。斯く來航頻繁なりしかば、延曆二十三年六月に勅を發して曰く、比年渤海の使者多く能登に到るが故に、その宿泊所勿略にすべからず。宜しく速に客院を造るべしと。思ふに松原客館の設立もそれ此の頃にありしならん。我の是等を接待するには、領客

渤海語修學

松原客館

使・存問使等を其の地に遣して迎接せしめ、或は京師に入覲せしめて之を饗せられぬ。陽成帝元慶六年九月能登に勅して、土民濫に羽咋福良泊山の材木を伐採するを禁じ、以て彼の船舶修理に便ぜしめき。然れども醍醐帝延長年間に至りて、渤海國滅亡せしかば往來絶えたり。

越・羽の地蹙には肅愼人の渡來あり、近くは渤海使の來航屢なるが上に、蝦夷とその境域を接したりしかば、佐渡の如きは陸奥・出羽・隱岐及び壹岐・對馬と相並びて邊要と稱し、軍團兵庫の設備・職員の人數・文・他國と異り、郡司等帶仗を許されたり。又た弩師の官を配置せしが如き見るべし。元慶四年八月の太政官符に、

應置弩師一員事、

右得佐渡國解�segment、此國本夷狄之地、人心强暴、動忘禮義、常好殺生、望請准出雲・隱岐等國置弩師一員、謹請官裁者、正三位中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請。

と。又た以て佐渡の人情風俗を察するに足らん。

佐渡の防備

地方政治紊亂

文德淸和の頃より朝權漸く外戚藤原氏に移り、攝關の職は悉くその世襲する所となり、終に天子を蔑視するに至りぬ。中央政府既に斯の如し況んや地方をや。國司の如き多く遙任と稱して任地に赴かず。京畿の地に止りて淫逸華奢を事とし代任を遣して治せしめ、或は郡司・庄司をして分轄せしめたり。又た偶〻國司任地に在るものは收斂苛酷にして、公租を私し中央政府に納れず。從うて群盜橫行して良民を刼掠せり。光孝帝仁和二年五月諸國司年を經て任に赴かざる者を處罰したることあり。又檢非違使を遣して諸國官吏の奸濫を糺し、人民の凶邪を禁ぜしめたれども、是れ却て奸惡なる國司等の爪牙となり了りぬ。佐渡・能登兩國に始めて檢非違使各〻一人を置きしは、元慶元年の頃なりき。地方政治の紊亂は延いて各地の豪族勃興を致せり。

藤原利仁

醍醐帝延喜の頃藤原利仁・越前・能登・加賀の鎭守府將軍（或云く北陸道七州の大守）たり。利仁は左大臣魚名六世の孫民部卿時長の子なり。時長越前の人秦豐國の女を聚りて利仁を生む。利仁敦賀の富豪有仁の女婿となり、沈勇にして將帥の器あり。延喜中命を受けて下野高座山の賊徒を平げ武威大に振ひ、其子孫北國に蔓衍しぬ。即ち利仁の長子太郎某越前に住して齋藤氏を興し、次子次郎叙用加賀に住して富樫氏を興し、三子三郎越中に在りて井口氏を興す。就中富樫氏の一門支流繁昌して累世加賀國守たりき。越後の如きは堀河帝寛治の頃より豪族國守の下向なきに乘じて、郡司或は庄司となりて國內を分割せり。この頃中條庄司といふもの頸城郡の方三十里の地を管せり。その他柏崎氏・橡尾氏・古津氏等ありて各地方を分割しぬ。かの越後にありて著名の豪族たりし城氏の如き、當時にその基を開きたり。城氏は餘五將軍平維茂より出づ。維茂は鎭守府將軍繁盛の孫にして從祖父平貞盛の養子なり。先きに陸奥に在りて土豪澤勝師種なるものと田を爭ひ、終に兵を執りて起ちしが、維茂大に克ちて勇武東國に振ひぬ。時に一條帝長德四年なり。其の子繁茂に至り出羽權介より越後介となり、子孫世〻頸城郡鷄冠城（今中頸城郡島坂村）に住して武威を四隣に振へり。殊に平淸盛太政大臣に陞り一門子弟朝野に勢力を得るに及んで、城氏亦平氏の族たるを以て威勢益〻增大し、終に越後一國を押領し、資永・長茂等に至りては越後守に任じ、陸奥の藤原秀衡と相並んで東國を威壓しぬ。

齋藤氏

富樫氏
井口氏

中條庄司

城氏

當時朝權甚だ輕く、蠻穀の下盜賊横行し、諸地方犯罪の徒頗る多し。されば遠流の地たる佐渡に配流せらるゝもの亦尠からず。今その著しきもの二三を擧ぐれば、

佐渡に配流せられし者

延暦四年十一月能登守從五位下三國眞人廣見、誣告の罪を以て流さる。

貞觀八年九月伴宿禰清繩、應天門火災の罪を以て流さる。

安和二年四月僧蓮茂、謀逆の罪を以て流さる。

長保元年十二月藤原致忠、前相模守橘輔政の子及び家人を殺すの罪を以て流さる。

長元五年九月出雲守橘俊孝、杵築神社の神託と稱して官位を授與せしを以て流さる。

永承二年十二月筑前の人清原守武、私に宋に往き貿易せしに座して流さる。

康和五年八月神祇權大副大中臣輔弘、豐受太神宮に放火せしを以て流さる。

嘉承二年七月散位賴貞なるもの、香椎の神輿を射て神人を殺せしを以て流さる。

宋商渡來

天仁元年源義綱、近江甲賀山に據りて叛せしが捕へられて放流せらる。その他保元平治以後に至りては枚擧に遑あらず。かの清原守武の如きは宋に密航して配流せられしが、當時宋國新に興り彼我の交通亦少からず。而して多くは皆通商貿易の爲めなり。圓融帝天元五年及び一條帝永延元年宋商若狹に來りしが如き、後冷泉帝康平二年宋商を越前に安置したるが如き、史上に明記する所にして、又た此の地方が一の要津たりしことを知るべし。

五　源平二氏時代

安德帝養和元年閏二月平清盛薨じて平氏の勢威頓に地に墮ちぬ。是の前年即高倉帝治承四年五月源賴政以仁王を奉じて兵を起せしが、一敗地に塗れて賴政歿したり。同年源賴朝亦令旨を奉じて東國に起り、義仲信濃に起りぬ。義仲幼にして父を失ひ畠山重能の垂憐に依て齋藤實盛に托せらる。實盛更に信濃の中原兼遠に托す。兼遠大に喜び意を傾けて鞠育し、心竊かに成長の後北陸道大將軍たらしめんと期す。義仲賴朝の兵勢漸く振ふを聞き兵を集む。

木曾義仲越後に入る

義仲の勢威北陸に振ふ

北陸宮

養和元年六月城長茂越後出羽の兵を徵し分て三と爲し、濱小平太をして筑摩越より、津波宗親をして上田越より進ましめ、長茂自ら筑摩川に至り横田川原に陣す。義仲井上光基等と夾擊大に之を破る。長茂終に越後の國府に逃れ還る。義仲追躡して越後に入りしに、國中相率ゐて來り屬する者多し。長茂終に支えずして出羽に走る。義仲即ち國府に入り北陸道を風靡しぬ。事京師に聞ゆるや、八月中宮亮平通盛・但馬守平經正に詔して長茂と倶に義仲を討たしむ。九月通盛進んで越前水津（今敦賀郡東浦村）に至り、義仲の先鋒根井幸親の爲めに破られ敦賀城に退保す。是に於て朝廷更に左馬頭平行盛・薩摩守平忠度を遣し通盛を援けしむ。義仲一時軍を越中の國府に回す。時に越前平泉寺の僧齊明・越中の豪族野尻・河上・石黒・加賀の林・富樫諸氏相約して義仲に降附せしかは、義仲の勢眞に旭日昇天の概ありき。壽永元年延曆寺の僧以仁王の子をして義仲に倚らし。義仲大に喜び越中に之を迎へ奉ず。北陸宮即ち是れなり。

壽永二年四月右近衛中將平維盛・通盛・行盛・知度・經正・清房等一族と倶に、畿內・山陰・山陽西海諸國の兵を擧げて北陸に入りて義仲を擊つ。義仲部將仁科守弘・

燧城の攻擊

加賀悉く平氏に屬す

般若野の戰

林光明・匹田俊平等を越前に遣し燧城に防禦せしむ。燧城址は今の南條郡湯尾村大字燧なるべし。源平盛衰記に此の地の要害を記して曰く、

燧城と云ふは磐石高く聳へ擧つて、四方の峯を連ねたれば、北陸第一の城郭なり。還山の麓西は經尾と名づけ、東は皷岡と云ふ。其間二町には過ぎず。南より北へ流れたる山河あり日野川と名づけ、能美新道の二の谷河の落合なり云々

と。かゝる天險の堅城も、終に內應者ありて陷りぬ。之より平軍源軍を追躡して加賀の篠原（今江沼郡篠原村）に入り、林・富樫諸氏を降し加賀悉く平氏に屬しぬ。義仲急を聞き今井兼平をして越中に赴かしむ。五月維盛越中に入り、越中・越後の境上寒原（蒲原にも作る）の險を扼ぜんと欲し平盛俊を遣はす。然れども兼平既に寒原を踰えて越中に進入し、盛俊の兵と般若野に戰ひ平軍を破る。般若野は礪波山下今の埴生村の郊野なり。維盛次て大軍を以て礪波山に、通盛・知盛等は志雄山に赴き據る。義仲之を聞き越後を發して、越中の國府を經、般若野に到り部下に諭して曰く、敵の大兵礪波の險を踰えなば我に不利なり。疾く進ん

て山の北麓に進據すべし。彼必ず猿馬場（河北郡倶利加羅村の内ならん）に陣して我を待たん。我兵南北分進して敵を南崖に擠さば勝利期すべしと。保科黨をして北麓に據守せしめ、又兵を分ちて七となし、源行家をして一隊を以て志雄山を攻めしめ、自ら進んで埴生（今礪波郡埴生村）に陣し、更に北麓に進出す。夜半南麓の諸隊呼譟して進擊するや、義仲牛四五百頭に炬火をその角に縛し平氏の陣營に驅逐し、軍隊その後より突喊して進擊す。平軍大に騷擾し皆南崖に走り互に擠陷して死傷す。時に積屍谷を塡ひと云ふ。義仲大に勝ち進んで加賀に入る。維盛急に安宅に至り橋を撤して扼守せしも終に破らる。源軍追尾して篠原に至り大に平軍を破りしかば、平軍の精鋭殆んど盡きたり。かの齋藤實盛の悲慘なる最後も實に此の時にありき。是より義仲兵を二分し。一は行家之を帥ゐて東山道より、一は自ら之を督し北陸道より京師を指して並び進む。七月義仲越前の國府に入り、遙に延暦寺の僧徒に移牒して之を誘ひ、遂に進んで京師に入る。平氏の一門相率ゐて帝及び建禮門院を奉じて西海に走りぬ。

義仲倶利加羅嶺に平軍を破る

義仲京師に入りて京都守衛の任に當りしも、朝廷の論功頼朝を第一とせし

義仲四上す

かば懷に慊焉たらず。又た北陸宮を帝位に即かしめんことを奏請して聽かれず、益々不平を抱きぬ。その將士京師に滯留する日久しく糧食欠乏を告げしかば、こゝに暴掠侵略を恣にし、京師は無政府の狀態に陷りぬ。此の時に當り頼朝奏して、東海・東山・北陸三道の宣旨を下し、曾て平氏が侵奪せる國領及び莊園を其の本主に還附せんことを奏請せしも、後鳥羽帝義仲を憚りて北陸道のみは之を許可せざりき。然れどその暴横も暫時にして、義仲頼朝の爲めに斃されて止みぬ。

義仲の暴横

頼朝既に義仲を除き、又た義經を憎んで之を殺さんと欲し、後鳥羽帝文治元年僧昌俊をして堀河第を夜襲せしめしが果さず。次て頼朝自ら東國の兵を率ゐて鎌倉を發し、東山・北陸兩道に令して近江美濃に出會せしむ。十一月頼朝進んで黄瀨河に至る、義經之を聞きて西海に走らんとして成らず、大和吉野に匿る。頼朝此等の搜捕に便ぜんため諸國に守護・莊園に地頭を置かんことを請ひ、自ら總地頭たらんことを請うて悉く許さる。同三年には頼朝使を伊勢太神宮に遣し義經等の捕獲を祈らしむ。かく搜索甚嚴なりしかば、是の年二

義經奥羽に走る

安宅關

北陸諸國の守護

年義經妻河越氏及び從者等と俱に吉野を脱して、伊勢・美濃を經て北陸道に入り、終に陸奥に走り藤原秀衡に依る。然れども秀衡死し泰衡嗣ぐに及んで義經その殺す所となる。初め義經陸奥に走るの際伴りて修驗者に扮して安宅關を通過すとは、人口に膾炙する所なれども、これ謠曲等に載せて修飾したる所其實信じがたし。安宅關址は三州名跡志によれば二三里の海中に在りて、百年前まで枯松を見たりと傳ふれども信ずるに足らず。

文治五年七月頼朝勅許を待たずして大に兵を徵し、藤原泰衡叛人を隱匿せしの罪名を以て之を討伐す。千葉常胤・八田知家・東海道の兵を以て常陸より、比企能員・宇佐美實政等北陸道の兵を帥ゐ越後より並び進ましめ、親ら中軍に將として鎌倉を發し進んで之を殄滅せり。是より海内漸く平穩となりぬ、建久元年頼朝天下總追捕使となり、同三年征夷大將軍に補せられ兵馬の權全く鎌倉に移りぬ。當時越後は頼朝の所領九ヶ國の一にして、安田某守護たりしかば城氏の勢力の如きは殆んど皆無なりき。若狹は此時稻庭時定の管する所なりしが、建久七年時定・頼朝の意に忤うて改替せられ、津々見忠季之に代りぬ。佐渡は本間能忠なるもの播磨より移り來りて土着し、又た澁谷・土屋・名古屋の諸氏各〻所領の地を賜はりて移住し、常に鎌倉番衛を務めたり。自餘の北陸諸國亦各〻守護地頭の補任配置ありしなり。

城資盛亂を越後に作す

承久の變

土御門帝正治元年正月頼朝薨じ頼家嗣ぐ。建仁元年二月城長茂・頼家の昏暴にして人心を失へるに乘じ、亂を京師に作し、後鳥羽上皇に頼家討伐の宣旨を强請せしが許れず。終に大和吉野に捕獲せられて斬らる。是時長茂の甥小太郎資盛亦亂を越後に作し鳥坂（北蒲原郡中條町大字羽黒の觀音なりん）に城く。四月頼家・佐々木盛綱に命じて之を擊たしむ。盛綱時に上野に在り。命に接して直に越後に入りて之を攻め、苦戰終に之を破る。資盛城を棄てゝ逃遯し越後全く平定す。降て承久の變起るに及んで、執權北條義時諸將を部署し、北條時房・同泰時・三浦義村等をして東海道より、武田信光・小笠原長清・小山朝長等をして東山道より、北條朝時・結城朝光・佐々木信實等をして北陸道より並び進んで京師を犯さしむ。今此北陸方面のみに就きて詳說すれば、參議藤原信成の將河勾家賢・越後願文山（北蒲原郡金塚村寶塔山ならん）に據りしが、信實の爲めに敗らる。後鳥羽上皇鎌倉の大軍來り

犯すと聞き、宮崎定範・糟屋有久・仁科盛遠等を越中に遣して北陸道を扼守せしむ。朝時進んで越中に入るや、宮崎定範・市振に屯して蒲原の險を扼し、柵を道路に植て弩を山上に列して待つ。朝時夜炬火を牛角に縛し之を驅逐して進み一舉にして定範を走らす。定範退いて盛遠に合し礪波山を守る。糟屋有久亦加賀・越中の諸豪族を率ゐて志雄を守りしが皆敗られ盛遠・有久戰歿せり。かくて朝時等の軍は東海・東山兩軍に次て入京しぬ。

鎌倉の大軍既に入京して大に勝利を得、上皇の謀に與る者を捕へ或は斬に或は流に處す。承久三年七月十三日泰時後鳥羽上皇を隱岐に、同二十日順德上皇を佐渡に奉遷し、閏十月十日義時土御門上皇を土佐に遷し更に阿波に奉遷す。降て後嵯峨帝仁治三年九月順德上皇佐渡に崩御す。聖壽四十六。後鳥羽・土御門兩上皇も是より先に配處に崩ぜらる。抑〻順德上皇佐渡奉遷の際は御船越後の寺泊浦より出帆し、佐渡の小木か赤泊かに上陸し給ひ、爾來二十二年の春秋を僻遠孤島の一寒村なる眞野に過ごさせ給ひ、剩さへ此の地に崩御せらる。實に至痛極慘の大變事たり。御遺骸は今の佐渡郡眞野村大字眞野の

順德上皇佐渡に遷らせ給ふ

眞野陵

地に火葬し奉る。世に所謂眞野陵（或は佐渡陵）是れなり。次て寛元元年五月御骨を大原御墓所に納め奉る。實に山城國愛宕郡大原村大字勝林院なる大原陵なり。かくて眞野陵は一時殆んど廢滅せしが、延寶七年に至り探搜して修理を加へ、兆域を定め陵廟の稱號を附し給ひぬ。又た佐渡郡三宮村大字三宮には上皇の皇子の墓あり。二皇女の墓は同郡三宮村大字宮浦及び二宮村大字二宮にあり。斯くの如く佐渡には上皇に關する舊蹟少からず。

後醍醐帝立つに及び英邁の資を以て銳意治を圖り、記錄所を復して親から訴を聽く。此の頃執權北條高時驕恣にして、政刑當を失ひ人心離るゝに至りぬ。是より先伏見帝永仁六年二月、權中納言藤原爲兼・北條氏を滅さんと謀りて露はれ佐渡に流さる。後醍醐帝亦窃に北條氏を圖り、中納言藤原資朝・藏人頭藤原俊基等と謀議する所ありしが、漏泄して資朝は佐渡に流さる。後ち元弘元年僧忠圓・北條氏を謀るに座して越後に配流せらる。かくて資朝元弘二年六月を以て配所に殺さる、其子邦光年十三。遙に佐渡に往き守護本間山城入道の弟三郎を殺して、父仇を報じ脫還しぬ。かゝる間に時機漸く熟し、畿內

藤原資朝佐渡に流さる

新田氏の諸族

の地には楠木氏先づ勤王の義を唱へて兵を擧げ、次て足利高氏歸順し諸國勤王の士並起して、官軍の勢大に加はりぬ。關東の地方には新田義貞兵を擧げて勤王す。當時新田氏の支族越後に蕃衍す。即ち里見・鳥山・田中・大井田諸氏、義貞の義擧を傳聞して越後より之に加はり、元弘三年五月を以て鎌倉に進入し北條氏を滅しぬ。時に淡河時治北陸の地に在りて北條氏に黨す。越前平泉寺の僧徒等群起して之を攻めしかば、時治終に自殺しぬ。又た越中守護名越時有・二塚（今射水郡二塚村）に陣して官軍に抗せしが、六波羅滅亡（元弘三年にあり）を聞て士卒離散し、時有亦た自殺して北陸道全く平定しぬ。

北陸諸國の守護

六　南北朝時代

後醍醐帝北條氏を滅して政權を回收するや、建武元年大に諸將の功を論じ賞を行ふ。時に新田義顯（義貞の子）越後守護に任ぜらる。其の他足利高經は越前の守護、普門利清は越中・能登の守護を領せり。然れども濫賞は忽ち武將の不平を招き、加ふるに北條氏の餘黨各地に反旗を翻すあり。即ち北陸には建武二年七月名越時兼叛して四隣を攻略し、京師に入らんとして大聖寺に至りしが、土人敗地・山岸・瓜生諸氏の爲めに破られ平定に歸し。次て新田・足利兩氏の軋轢となり、終に尊氏の背叛となり邦内大に騷擾す。

名越時兼叛す

建武二年八月足利尊氏征東將軍に任ぜられて鎌倉に入り、北條時行を平げ自ら其の地に據りて叛す。諸國亦た背叛して之に呼應するもの多し。即ち北陸にありては越中守護普門利清叛し、尊氏に應じて國司源定清を攻めて之を殺し京師に迫らんとす。加賀の富樫氏・越前の足羽氏等皆尊氏に黨して兵を擧げ北陸道亂れぬ。延元元年五月尊氏大に九州の兵を擧げて再び京師を犯すや、官軍大敗楠木正成等戰歿し、帝復た叡山に幸して南朝の勢力萎微す。八月尊氏光明院を擁立し政權を掌握しぬ。時に若狹守護佐々木高氏（道譽）尊氏に請うて若狹路より近江に入り、悉く延暦寺の食邑を奪ひ、越前守護足利高經亦た官軍の北國に於ける糧道を斷ちて大に之を困しめき。十月帝尊氏と和し義貞・義助を召し諭すらく、卿等の忠義朕深く嘉する所なり。然れども時運非にして兵勢屈し如何ともし難し。暫らく尊氏と講和して時變を觀んと欲す。且嚮き

北陸道亂る

義貞越前に入る

に河島維頼を越前に遣し北國を徇へしめし時、氣比神官敦賀に城きて之に應じぬ。卿宜しく速に北國に赴き之を鎮定して恢復を計れよ。又た卿に託するに東宮を以てす。之を視ること朕の如くせよと。義貞・義助以下感泣して拜辭し、皇太子及び尊良親王を奉じて北陸道に入る。櫨中納言藤原實世・左近衛中將藤原行房・及び義顯・義助・義治等之に從ひぬ。

元弘三年十月義貞等皇太子を奉じて越前に赴かんとして近江鹽津に至る。足利高經路を斷つを以て更に木芽嶺に道して敦賀に出づ。氣比神官氣比氏治之れを奉迎して金崎城に入る。次て義貞・義顯を越後に遣し、義助を越前杣山（南條郡湯尾村の東北）に遣し諸國の兵を聚めしむ。時に杣山城將瓜生保二弟重照と與に義顯・義助を鯖（並鯖波にも作る南條郡南杣山村）に迎へて酒肴軍糧を献ず。杣山城址は今南條郡南杣山村大字阿久和に在り。是の時尊氏帝に迫りて義貞追討の詔を拜し、高經をして瓜生保を誘はしむ。保之を信じ城を閉ぢて自ら固め高經に應ず。保の弟僧義鑑夜義顯義助に見え兄の不智を訴へ、更に一公子を奉ぜんと請ふ。義助感激して義治を以て之に托す。義顯越後に赴かんと欲せしも士卒多く逃れ去りしを以て、義助と俱に金崎に還る。國人今莊淨慶反して柵を以て歸路を斷つ。義助之を說諭して道を開かしむ。然れども從卒逃去して存するもの僅に十六人のみ。而して金崎城重圍に陷るを聞き、或は越後に走らんと云ひ、或は自殺せんと欲す。栗生顯友其の無益を斥け金崎入城決行を主張し、終に敵陣を伐て之を破りぬ。

杣山城址

金崎籠城

瓜生保歸順す

尊氏金崎の兵潰亂せるを聞き、更に足利高經・仁木頼章・高師泰・今川頼直・小笠原貞宗等をして大擧之れを攻めしむ。貞宗山麓より登攻せんとして敗れ、頼直海上より進んで擊退せられ、こゝに持久重圍の策を執りぬ。時に義鑑私に杣山に留まりて義治を奉じ兵を起さんと謀る。瓜生保亦た高經の軍を脫し宇都宮泰藤・天野政貞と俱に杣山に還り義鑑と合して兵を聚め、燒城址の東南に壘を築き北陸の交通路を遮斷しぬ。高師泰之を聞て來り攻む。時に保・遠近の民家を燒き唯だ湯尾（今南條郡湯尾村）の一驛を存して待つ。師泰の兵湯尾の民家に進入するや、保等掩擊殆んど之を殲す。保又た高經を越前新善光寺（南條郡武生町にあり）に攻めて之を走らす。こゝに於て北陸道の官軍兵威漸く振ひぬ。

延元二年（光明院建武四年）正月後醍醐帝吉野行宮に在り。瓜生保・義鑑及弟源琳・重照等兵五千餘を以て金崎を援ふ。今川頼直之を拒ぎ破り保・義鑑陣歿し、源琳・重照僅に身を以て脱し還る。時に金崎城中食乏しく義貞・義助愛馬を殺して食ふに至る。かくて義貞部下の勸により二月五日義助・實世等と夜潛に城を出て、河島維頼を嚮導として杣山に入る。金崎の敵軍益〻城に迫り三月六日肉薄登攻す。城兵餓羸戰ふ能はず外壘終に陷る。義顯・氣比齋昭（氏治の子）に命じて皇太子を脱せしむ。城全く陷るや尊良親王自殺し、義顯・藤原行房・里見時義・氣比氏治等皆之に殉ず。皇太子船に乘り逃れて蕪木浦（南條郡河野村大字蕪木）に至りしも、杣山に入るに及ばずして捕へられ、京師に送りて幽せらる。當時金崎落城が如何に勤王軍に大打擊たりしかは、想像に餘ありと謂ふべし。

義貞金崎落城の報を得て悲憤し、潛に檄を諸國に移して兵を募りぬ。時に尊氏・皇太子の言を信じ義貞既に陣歿と爲せしが、義貞猶越前に在りて北陸の地應ずるもの多きを聞き、急に高經をして之を攻めしむ。高經杣山の險要なるを以て敢て逼らず。かゝる間に畑時能・加賀の人上木家光等を誘ひ、越前細呂木（坂井郡細呂木村）に城き大聖寺城を攻め陷る。平泉寺の僧徒亦た三峰（今立郡北中山村大字三峰）に據りて勤王す。加賀の敗地・上木・山岸諸氏細屋秀國を奉じて越前に入り國府に迫る。翌三年二月義助積雪漸く消ゆるを待ちて進み、宇都宮泰藤鯖並より、藤原行實・飽和（南條郡南杣山村大字阿久和）より、瓜生重妙法寺（南條郡神山村大字妙法寺）より、河島維頼三峰より、義貞杣山より並び赴援す。高經亦出てゝ之を拒ぐ。戰酣なる時三峰の官軍敵背に繞り出て、火を國府に放つ。高經退て國府に入る能はず足羽（福井市の南部木田村の邊）に逃る。義貞先づ足羽を拔きて後京師を復せんと欲し、諸將を遣し之を攻めしむ。然れども藤原行實・船田經政皆敗れ退き、細屋秀國亦た勝虎城（越前吉田郡中藤島村）を攻めて敗れ還りぬ。

越前の勤王軍復振ふ

是の頃に當り大井田氏經等兵を越後に起し、進んで越中に入り普門利清を破り、更に加賀に進入し富樫高家の抵抗を擊破して遂に義貞に越前に合しぬ。是に於て北陸道の勤王軍再び熾ならんとす。かくて義貞足羽を攻めて必取を期せるに際し詔あり。男山の陷落早夕にあり速に來援すべしと。義貞感激直に發せんとせしが、高經虛に乘じ北陸道を斷たんとを懼れて義助を遣す。義

助敦賀に至り男山火くと傳聞してその陷落を疑ひ、敢て進まざりしかば男山終に陷りぬ。かくて七月義貞・義助兵三萬餘を率ゐ、河合莊（越前吉田郡河合村森田村）に陣し足羽を拔かんとを謀る。時に平泉寺の僧徒高經に應じ兵五百餘を以て藤島に據る。閏七月二日義貞進んで燈明寺（吉田郡中藤島村大字燈明寺）に至り、兵を分ちて七寨を攻む。藤島の僧兵援動するや、義貞の軍勢に乘じて急に攻む。僧徒苦戰、日沒に及て官軍の形勢非なり。義貞之を危み自から變裝し五十餘騎を隨へ援ふ。途に高經の援兵三百に逢ふ。義貞奮然突進せんとして馬先づ矢に中りて僵る。義貞將に起たんとして飛矢に中り終に自刎して死す。年卅八。義助・石丸城（吉田郡森田村大字石丸）に還りて義貞の戰死を知り、部下亦之を傳聞して軍氣大に沮喪し逃亡する者多し。是に於て義助・河島維頼を留めて三峰を守らしめ、瓜生重をして杣山を、畑時能をして湊（越前坂井郡三國町附近）を守らしめ、自から兵七百餘を以て越前の國府に入りぬ。義貞戰死の地に付ては諸說あり。燈明寺と藤島城即今の東藤島村大字藤島との間にして、今の中藤島村高木の邊なりと稱し、或は近年福井市の西北半里許西藤島村大字三屋の近傍、路側に老杉數株鬱蒼たる處之なりと

義貞戰歿す。

義貞戰歿の地

云ふ。後者の地は曩に明暦二年村民此の地を耕作して一古兜を發掘し、義貞の遺物なりと爲す。萬治三年此に碑を建て、暦應元年閏七月二日新田義貞戰死の處と標し、後一小祠を設けぬ。

延元四年（光明院暦應二年）三月義助諸將に令して足羽を攻めしむ、即ち畑時能・河合河口の諸壘を略し、由良光氏・堀口氏政等亦諸寨を陷る。義助・維頼等越前の國府を發し進んで河合に陣し直に足羽に薄る。高經終に城を火きて加賀に走りぬ。斯の如く北陸の地越前には脇屋義助父子首として勤王し、一族江田・大館・里見・山名・桃井・青龍寺諸氏諸國に分れて南朝に盡しぬ。其他越前に於ては小國・池・風間・禰津・太田の諸族、終始一貫して南朝に勤王したりき。尊氏北陸の勤王黨勢を得て足羽を拔けるを聞て大に驚き、高師春・土岐頼遠等を遣し之を討たしむ。義助防戰甚だ力めしが利あらず終に美濃に走る。杣山城亦次て陷り、一井氏政平泉寺に走り僧徒を誘ひしも應ぜず。因て應巢城（越前坂井郡鷹栖村）に入りて畑時能に合す。是に至て北陸の勤王黨は唯だ此の一城を保てるのみ。尊氏又た高經・師春等をして之を圍ましむ、時に後村上帝興國元年正月なり。次て時能・氏政を

越前の勤王家

畑時能勤王す

して城を留守せしめ、自ら壯士十六人と城を脱し伊地山に登りて陣す。高經平泉寺の僧徒時能に應ずと爲し急に之を攻む、時能縱横馳突して終に戰死す。北陸の勤王軍殆んどこゝに殄滅しぬ。是より先、宗良親王逃れて越後に入り、國人之を奉じて兵を擧げしが利あらず。親王逃れて越中に入り更に信濃に轉走しぬ。

尊氏直義の不和

是の頃に當りて足利尊氏弟直義と相和せず。正平六年七月（崇光院觀應二年）直義越前敦賀に走り、北陸の兵を擧げて尊氏・義詮を排除せんと謀る。時に越前の足羽氏・加賀の富樫氏能登の吉見氏・越中の桃井氏・皆直義黨なりしかば、直義此等諸氏を統べ名を歸順に藉り、木芽嶺・愛發山の險を扼して尊氏に抗せんとせしが後和睦しぬ。又た近江守護佐々木高氏正平十六年加賀守護富樫高家死し嗣子猶幼なるに乘じ、加賀を奪うて女婿足利氏頼に授けんとせしが、細川清氏之れを阻害す。次て清氏・高氏の讒する所となり、其の領國たる若狹に走り小濱城を保つ。此の年十月將軍義詮・足利氏頼をして越前より、仁木義任をして丹波より進んで清氏を擊たしむ。清氏・氏頼の先鋒を敦賀に破りしが、小濱城中内

細川清氏小濱城に據る

應するものありて城終に陷り、清氏倉皇近江に走りぬ。

北陸道の勤王軍萎微す

是より先正平十三年（後光殿院延文元年）六月、新田義宗・義興・脇屋義治等兵を起して越後の半部を攻略し、大に恢復の策を講ぜしが、時運既に否にして終に上杉憲將の爲めに破られ、義宗戰歿し義治出羽に走りぬ。同二十四年桃井直常歸順して越中松倉城（下新川郡松倉村大字鹿熊）を拔き之を保つ。翌年桃井直和・敵將斯波義將と越中長澤（礪波郡古里村）に戰て死し餘衆松倉城に入りしが、次て皆離散し直常亦た逃走しぬ。此の地各地方の勤王軍萎微して振はず大勢既に決したり。降りて後龜山帝元中九年十月即ち北朝後小松帝明德三年、兩朝の講和成立して南北統一し多年の紛爭收まりぬ。

七　群雄割據時代

正平二十三年（後光殿院應安元年）足利義滿軍職を襲き、補佐その人を得て足利氏の制度多く此の時に定まる。即ち越前尾張及び遠江を領せる斯波氏は、畠山・細川兩氏と俱に三管領と稱し幕政を執り、能登の畠山氏・加賀の富樫氏・越後の上杉氏

は所謂國持衆の內にして、幕府に重要の位地を占めたりき。是より先正平四年尊氏の第二子基氏始めて東國管領となり鎌倉に治し、上杉憲顯・高師冬執事となり之を補佐す。尋て憲顯・越後・上野・伊豆三國の守護となり、鎌倉に在りて政治を總ぶ。時に憲顯・越後を以て憲藤に與ふ。是れ實に越後上杉氏の始祖と爲す。憲藤の子朝房は京都四條高館に在りて幕府に勤仕し、越後上條（今の刈羽郡上條村近傍）を領す。即ち高倉氏なり。朝房の養子憲榮（實は憲顯の末子）義滿に昵近して眷遇を蒙り越後守護に任ぜられしが、幾くもなく官を捨て出家せしかば越後は統一を欠きたり。上杉家の家老長尾高景・齋藤・千坂・石川等相謀り、憲榮の甥龍命丸を奉じて主と爲す。房方是れなり。房方心を民事に注ぎ長尾・宇佐美諸老臣と謀り、各地の荒蕪を開拓し河流を疏通して大に人望を得たり。長尾氏は上杉賴成の子景實・長尾氏を嗣ぎ上杉氏に屬す。實に齋藤・千坂・石川三氏と並び上杉の四家老と稱す。その子孫世〻三條（南蒲原郡三條町）に居り三條長尾と稱す。而してその府內に居る者を宗家と爲す。府內とは蓋し古の國府の墟なるが故に稱したるものにして、即今の中頸城郡直江津町大字鹽谷新田の附近なり。後に謂ふ春日山と

上杉氏の四家老

越後上杉氏の始祖

は全く異なれり。越中は正平二十一年斯波義將之れが守護に任ぜられ、同年一色範光若狹守護と爲り。能登は天授年間畠山義深之を領してより。相傳ふること十一代二百餘年に及べり。

鎌倉府は所謂鎌倉將軍氏滿の盛時を經て滿兼持氏に傳ふ。持氏竊に軍職を襲がんことを期して成らず、終に兵を集めんとす。執事上杉憲實之を諫止しぬ。これより持氏・憲實を忌み屢〻之を殺さんとせしかば、憲實走りて上野白井城に逃れ守護代長尾氏に據る。當時長尾氏に三家あり。即ち總社長尾芳傳・白井長尾昌賢、及び越後の長尾氏是れなり。持氏兵を出して憲實を討つ。將軍義教之を聞て持氏征討の綸旨を請ひ、東海・東山兩道の兵を以て上杉持房に屬し、箱根より進ましめ。北陸道の兵は之を教朝に附して持氏を討たしむ。此の時越後上條城主上杉清方軍功を以て越後守護に任ぜらる。この翌年即ち後花園帝永享十二年五月、將軍義教・武田信榮をして若狹・丹後・三河・伊勢の守護一色義貫を殺さしめ、若狹を以て信榮に賜ふ。武田氏の若狹を領して數代に傳ふるの始めは實に此の時に在り。

長尾氏の三家

武田氏若狹を領す

文安四年五月加賀介富樫敎家死して、其の長子成春・叔父富樫泰高と加賀守護を爭ふ。管領細川勝元・泰高を援け、前管領畠山持國（德本）は成春に黨して相軋る。是に於て將軍義政加賀を二分して各〻半國を領せしめ共に加賀介と爲す。花園帝長祿二年八月に至りて義政加賀の半國を以て赤松政則に與へしが、富樫氏累代の家臣等甲兵を以て之を抗拒せしかば、政則終に但馬に去りぬ。又寛正元年能登守護畠山義統・右動山衆徒訴訟に機宜を失するや、族政長之を奇貨とし、義統の所領たりし越中礪波郡埴生郷（今埴生村）を沒收して采邑と爲せしかば、義統深く之を嚙みぬ。

是より先寶德元年足利成氏（シゲウヂ）・關東管領となり、父持氏の泯滅の事より上杉氏を怨み、終に享德三年十二月を以て執事上杉憲忠（清方の弟）を殺す。上杉氏の宰臣長尾昌賢・上杉房定と謀り憲忠の弟兵部大輔房顯を越後に迎へて主と爲し、康正元年正月使を京師に馳せ、成氏追討の御敎書を乞ふ。將軍義政之を許す。即ち越後信濃・上野・武藏の兵を以て成氏を攻む。成氏亦た兵を率ゐ鎌倉を發して之を拒ぐ。爾來兩軍武藏の地に戰ひ各〻勝敗ありしが、成氏の勢力日に衰へ

古河御所
堀越御所

將士漸く乖離せしかば、終に長祿元年十月成氏鎌倉を去て古河城に徙る。所謂古河御所なり。翌年將軍義政・政知を以て鎌倉の主と爲し成氏を討たしむ。政知伊豆北條に居る。即ち堀越御所なり。是れより政知・山ノ内・扇ヶ谷兩上杉氏に倚賴し、徒に虛號を擁するのみなりき。

後土御門帝文正元年二月上杉房顯・武藏五十子の陣中に歿して嗣なし。家臣相諮りて越後守護上杉房定の第二子顯定を迎へて山ノ内上杉家を嗣がしむ。然れども是の頃より山ノ内家漸く衰微しぬ。抑〻上杉憲顯關東管領に執事として足利氏を輔佐してより、越後に出て〻執事輔佐となりしもの憲春・憲方・憲基・憲實・清方・顯定の六人ありき。翌應仁元年は是れ即ち細川・山名兩氏大に京地に戰ひ京都頹敗太甚し。是の時に際し能登の畠山義統は山名宗全を援けて北海の糧道を絕ち、大に細川勝元を困しめたりき。後將軍の敎令を奉じて細川氏に黨し糧道を開くに至れり。その他北陸諸國に於てこの戰亂に就ての向背を見るに、若狹の武田國信・加賀の富樫氏・越中の斯波義敏は細川方に與みし。越前の斯波義廉は山名方に黨しぬ。而して越後の上杉氏は當時關東の騷擾に忙

應仁の亂

はしく、應仁の亂には關せざりき。加ふるに騷亂は共に遠隔の地にありて、越後國内の如きは曩に憲顯守護となりしより、世々の守護皆心を民治に盡くし農商を勸奬せしかば、安穩靜謐なりき。

應仁の亂後は足利幕府は衰頽殊に甚しく、將軍は有れども無きが如く徒に虛號を擁するのみ、而して群雄は所在に割據して搏擊呑噬を事とし、弑逆簒奪その例甚だ多し。將軍は檻臣の左右する所となりて京都に安ぜず。義稙の如きは越中に逃れ越前に走りて各地に落魄し。義昭は越前朝倉氏に哀を請へるが如き以て見るべし。かゝる時に際して北陸殊に越・登・加の地方に最とも猖獗の兇焰を逞うせしは一向宗の一揆なり。

吉崎道場

後土御帝文明三年五月僧蓮如（本願寺開祖親鸞より第八世）近江より逃れて越前に入り、國主朝倉敏景に請うて吉崎（坂井郡吉崎村）に道場を建立し、人民の信仰を得たり。蓮如又た四隣に行脚して一向宗を布敎しぬ。時に富樫泰高御幸塚（カウヅカ加賀能美郡今江）に在りて族政親と和せず。泰高・蓮如を御幸塚に招きて留錫せしめ之を掩護す。政親之に反し之れを排斥す。本願寺門徒亦た政親を憎み、越・加・能諸國の信徒に移牒し所在に起りて政親を野々市館（加賀石川郡野々市村）に襲はんとを謀る。政親之を知り先じて文明六年三月不意に吉崎道場を襲ひ悉く之を燒夷し、藤島（越前吉田郡）の超勝寺（信頼四の建つる所）に火を縱ちて還る。その他加賀の本願寺支院を破却し改宗改派せざる者は皆之を追放しぬ。時に蓮如も亦た逃竄しぬ。是れより本願寺門徒の憤怨骨髓に徹し所在蜂起して騷擾連年絶えざりき。長享二年四月政親野々市より高尾（加賀石川郡富樫村大字高尾）に徙りて大に門徒を壓服せんとせしかば、門徒等怖れて陳謝する所ありしが許れず。是に於て門徒等激昂險に據り決死防禦せんと欲し、隣國の援路を絶たんとして、越前方面には敷地・福田（並に今江沼郡福田村）を扼し、越中方面は倶利伽羅・松根（共に河北郡にあり）守り、又た久安（石川郡三馬村）に新壘を起し高尾に對す。其の他勝願寺（河北郡磯部村）・弘願寺（河北郡笠井村）・大乘寺（石川郡野々市村）等の僧侶等相會し、富樫泰高を勾引して加賀守護と爲し、一揆の首領と仰ぎ勢益〻猖獗なり。將軍義尙政親の請を容れて越前・越中・能登に御敎書を下して之を討たしめしが皆破らる。政親の兵亦た各所に敗れ門徒等高尾に迫る、六月城終に陷り政親以下悉く自殺す。かくて加賀は一向一揆の淵藪とはなりぬ。彼等又た道場を小立野（今の金澤市の一部）に移建し本源寺と稱し、

一向宗の迫害

本願寺門徒の激昂

尊稱して御山と云ふ。即ち一揆の根據たり。泰高の如きは名は猶守護と稱すれども威權なく國務に關する能はざりき。

加賀の御山

越前の朝倉氏世〻、斯波武衛家の目代たり。相傳へて敏景に至る、時に斯波義敏・義廉相鬩ぐ。敏景之に乘じて文明三年主家を滅し越前を簒奪し一乘谷（足羽郡一乘谷村）に城きて治す。氏景・敎景・貞景に傳ふ。後柏原帝永正三年七月一向一揆復た加賀に起り越前に入らんとす。貞景・敎景擊て大に之を破り一時屏息せしめたりしが、幾もなく加賀石川郡の玄任なるもの超勝寺の門徒等と謀りて越前に侵入すること再度、終に敎景の爲めに破られ玄任等戰死す。此の時朝倉氏越前に在る本願寺諸支院を燒夷し、吉崎道場を破却したりしも、將軍義澄の命に依て門徒等と和睦しぬ。

朝倉氏

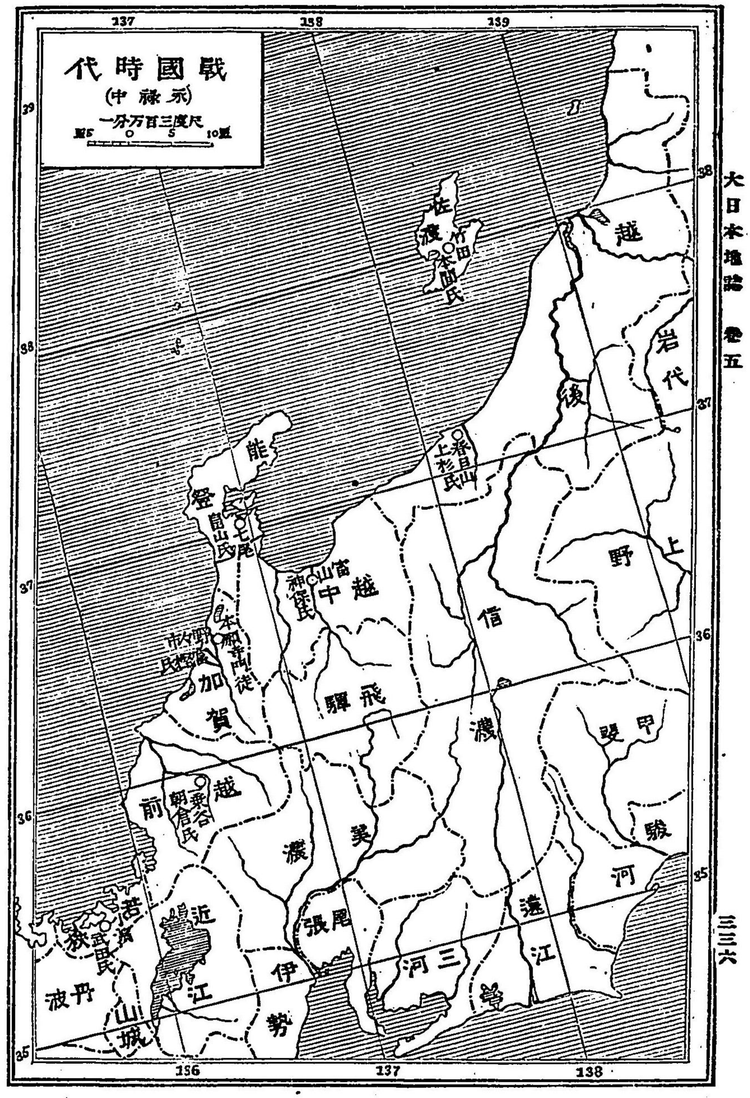
此の頃越後・越中の守護たりし上杉房能、苛酷の政多く人氏の膏血を絞りしかば國人皆怨苦す。斯て魚津城主（越中下新川郡）鈴木大和・東岩瀨城主（上新川郡）赤川出雲・滑川城主（中新川郡）府久呂藤右衛門等相謀り、越中の國府を襲はんとす。房能之を探知し長尾爲景を遣し之を逆擊し大に勝利を得、魚津・東岩瀨・滑川の三城を陷る。

長尾爲景府內城を圍む

當時爲景春日山（越後中頸城郡春日村）城に居り坂戸城（南魚沼郡六日町）三條城（南蒲原郡裏館村）を管す。爲景稟性强剛敢て人に下らず、禍心を抱藏し主家を簒はんと謀りしも、上杉氏の重臣宇佐美孝忠を憚りて敢て發せざりき。永正四年二月孝忠歿し定行嗣きしが年僅かに十九なり。次て同六年四月爲景俄然八千餘人を率ゐて府內城を圍む。事不意に出て上杉氏の將士狼狽爲す所を知らず。房能終に近臣と俱に出奔せしが、爲景の追擊急にして逃るべからざるを知り、遂に自刃して死す。定行之を聞て大に怒り國中に檄して義兵を召集し、上條城主上杉定實（房能の再從弟）を奉じて琵琶島城（刈羽郡枇杷島村）に據る。上杉顯定は武藏鉢形より越後に赴き、その他房能の遺臣來り應ずるもの多く義軍大に振ふ。七月定行等爲景と大に市振に戰ふ。爲景大に敗れ僅に免れて漁船に投じ、佐渡に航して羽茂高信に依り蟄伏す。

爲景佐渡に逃る

是より一時越中・越後は全く顯定の幕下に歸しぬ。顯定府內城に留まり爲景の徒黨を博搜して、或は捕へて斬に處し、或は食邑を沒して嚴酷に過ぎしかば、怨聲途に滿ち國人又た爲景を慕ふに至れり。爲景佐渡に在りて全島を威壓し越後回復を圖り、翌七年三月佐渡を發して越後刈羽郡椎谷に上陸し兵勢大に



大一揆
小一揆

振ひ、國人又た多く之に應じぬ。上杉顯定椎谷に敗れ將に上野に走らんとせしが、復た北魚沼郡長森原（今城内村）に破られ終に陣歿しぬ。是に於て上杉定實嗣ぎて爲景と和し士民一時安堵したり。然れども獨り宇佐美定行聽かず、頻りに柏崎・出雲崎・寺泊の地を徇ふ。上杉定憲も亦た私に房能の舊業を復せんと欲し、柿崎・風間・五十嵐の諸族を從へ、長尾房景を古志郡六日市に破り爲景の援軍を擊退せしが、終に爲景の爲めに大に三分一原（中頸城郡大潟村）に破られ、定憲以下戰死し、定行僅に松之山城（東頸城郡松之山村）に遁る。是より爲景の兵威益〻熾なり。後定行遂に爲景の敵にあらざるを知りて和を講じ、越後始めて平穩となりぬ。

後奈良帝享祿二年本願寺證如（親鸞より第十世）の家宰下間頼秀・弟民部少輔加賀に入り、證如の命と稱して門徒を召集し、隣國に侵寇し土地蠶食を企てしが、門徒等應ぜざりしを以て下間怒りて波佐谷（能美郡瀬谷村）を圍み松岡寺を燒夷し、石川郡に入りて若松の寺堂を燔燬せり。當時下間の兇行を稱して大一揆と云ひ、加賀の宿老即ち河合・洲崎・超勝寺・光濟寺等の一揆を小一揆と呼べり。此兩一揆互に相爭ひしが、小一揆は先づ敗散しぬ。かくて所謂大一揆は將に山田の光敎寺を

攻めんとするや、寺僧援を朝倉氏に乞ふ。こゝに於て享祿四年九月朝倉宗滴（敎景入道して宗滴と云ふ）兵を率ゐて加賀に入り本折（能美郡小松町）に陣し、能登の畠山家俊亦た加賀に進入す。かくて互に勝敗ありしが、天文元年八月近江の佐々木定頼法華宗徒に與して山科本願寺を燒くや、加賀の門徒之を聞き、周章落膽して暴威挫け兇焔漸く收まりぬ。

長尾爲景陣歿す

天文七年長尾爲景越中を略せんことを上杉定實に請ひ、宇佐美定行と共に兵を發し、四月松倉城（下新川郡松倉村大字鹿熊）を圍み之を陷る、四隣風を望んで來り降る者多し。此の月十一日爲景神保良衡椎名泰種等と栴檀野に戰ひ、奮鬪して終に陣歿し將士敗潰す。定行も亦た退歸る。三州志に栴檀野は即ち古の般若野是なりと。今栴檀山栴檀野の二村あり。これ遺名の存するものならん。栴檀は元と芹谷より轉訛したるものにして、今猶栴檀野村に芹谷なる大字殘れり。芹谷に千光寺あり。此に長尾爲景の位牌を置き、眞光院殿高岳正等大居士と題す。爲景の死せし年代に就きては、或は天文十四年と爲し、或は十一年に繫け、或は七年四月十一日と稱す。附記して、後日の考證を待つ。爲景武備あり又た文事を兼ね、和歌詠草一卷後奈良帝の乙夜の覽に入る。其の中殊に叙感ありしは、

上杉輝虎生る

青海のあるとは知らで苗代の水の底にも蛙なくなり

の一首なりと傳へらる。又た以てその人と爲りの一端を知るを得べし。

上杉輝虎（初め景虎と稱す）享祿三年越後三條城（或は魚沼郡竹俣村と云ひ或は巻日山と云ふ）に生る。實に長尾爲景の第四子なり。爲景栴檀野に戰歿するや、上杉定實輝虎の兄晴景を立てゝ嗣たらしむ。然れども懦弱の性將帥の器にあらざるを以て一門皆之を侮慢せり。時に長尾俊景三條の要地に在りて權を弄し、終に天文十一年叛旗を飜して四隣を侵奪す。同十三年正月晴景輝虎大に俊景を椽尾（古志郡栃尾町附近）に破りぬ。此の時後奈良帝綸旨を定實晴景に下し、越國の士民を塗炭の中より濟はしめ、又御宸筆心經一卷を下賜せらる。是に於て御宸翰を名山大社に納む。今彌彦神社加茂神社の願書塚と稱するもの此の遺跡なりと云ふ。これより晴景越後を鎮定し漸く驕傲の心を生じて苛政多く、又酒色に耽溺せしかば、人心漸く輝虎に歸しぬ。當時國中分れて府內黨椽尾黨及び三條黨の三ありて互に相鬩ぐ。

願書塚

輝虎晴景を破る

輝虎上杉氏を冒す

輝虎薙髮す

生害谷

輝虎椽尾城に在りて宇佐美定行等の勸告に從ひ、覇を北陸の地に唱へんと期し、私に備ふる所ありしが、天文十六年四月に至り晴景大兵を帥ゐて椽尾城を圍む。輝虎大に之を破り急追して晴景を春日山城に圍む。晴景終に力竭き自殺す。かくて上杉定實輝虎をして晴景の後を嗣がしむ。次て十九年二月定實卒して上杉氏亡ぶ。憲顯越後に封ぜられてより百八十餘年を經たり。輝虎益〻四隣を征服して越後を統一し威名大に振ふ。二十年八月上杉憲政・北條氏康の爲めに逐はれて越後に來り、輝虎に托するに復讎の事を以てし、その管領職を輝虎に讓り、併せて其の族稱及び錦幢系圖を與ふ。是より輝虎上杉氏を冒し越後守と稱す。是より先輝虎已に村上義清に許して、兵を甲斐の武田氏に結びぬ。二十一年輝虎書を諸將に與へ、曩日兄と兵を搆へ天倫に悖れるを辯じ、更にその罪を謝せんが爲め高野山に赴かんとし、剃髮して不識菴謙信と稱す。諸將驚き堅く之を阻止しぬ。時に謙信强狡專恣の士十六人に林泉寺（中頸城郡春日村大字中屋敷）に死を賜ふ、諸將震慄皆謙信の命に從ふに至れり。後世この地を稱して生害谷と云ふ。

北陸諸國の爭亂

若狹の武田氏亡ぶ

天文二十三年六月謙信越中に入り魚津城を圍みしが、陷るに至らずして歸國しぬ。是の頃に當りて越前の朝倉宗滴又た加賀の本願寺門徒を討伐せしが、宗滴終に陣中に歿したり。かくて加賀能登越中の地爭鬪止まず。京畿への交通杜絶し京都の地米穀缺乏を告げしかば、將軍義輝之を憂ひ朝倉義景をして之を和解せしめて、一時稍〻平穩となりしも、亦弘治二年畠山義續七尾城に病死するや、內訌起りて溫井景隆・三宅長盛等能登大半を分奪し、更に長續連の回復する所となりぬ。次て永祿六年八月に及んでは、謙信兵を率ゐて越中に入り放生津（今の新湊町）に至り、神保椎名・江波諸氏を破りて父爲景の靈を弔慰す。次て謙信此等諸氏の從臣妻子及び農工商の男女凡千五百人を越後に移し、各〻年齡に應じて扶持米を給し土地を開墾せしめたり。

當時若狹の武田氏相傳へて義統に至り、永祿八年將軍義輝三好氏の弑する所となり、義昭近江に逃れしを招き奉じて入京せんと計りしも、勢力微弱にして果さず。終に義昭を越前に送り朝倉義景に托す。十一年義統死し元明嗣ぐ。義景兵を小濱に出し元明を執へ質と爲し、士民を招きて若狹を併せんと

せしが成らず。次て信長丹羽長秀をして本國を管せしむ。武田氏若狹を領する實に百四十餘年間なりき。越前には朝倉義景一乘谷に居り南越の覇權を握りたり。加賀は本願寺門徒の割據する所にして、富樫泰俊猶存せしと雖ども言ふに足らず。能登は畠山義則・義隆相次て七尾城に治せしも、全く勢力なく衰頽日に甚だしく、天正五年謙信の爲めに滅さる。越中は長尾爲景戰死の後神保光氏富山城に據り、新川・婦負二郡を領し更に礪波郡をも併せたり。後天正十年神保氏張家臣の爲めに逐はれて佐々成政富山城に移りぬ。佐渡は世〻本間氏の領所たり、本間氏は蓋し鎌倉幕府の頃より此に土着せしならん。後分れて十數家となり、宗家は國府に在て代〻山城兵衛尉と稱し、佐渡半分を領せしかば土人呼んで半國殿と云へり。天文弘治の頃は本間統直・永祿の比は眞直・天正の初は高統之を領せしが、高貞の時に至り天正十六年六月上杉景勝の爲に併呑せられぬ。後ち景勝越後に在りて水害を被れる流民男女四百人を限り、此の地に移して永住開拓せしめたり。

佐々成政富山城に移る

半國殿

八　織豐二氏時代

正親町帝永祿三年五月織田信長桶狹間の一戰に今川氏を滅して威名大に揚り、七年美濃稻葉山に齋藤氏を滅し、十一年には義昭を奉じて入京しぬ。當時群雄競うて旗を京師に樹て天子將軍を挾んて覇を唱へんと欲す。就中西には毛利氏・東には織田・上杉・武田の三氏其の最たり。而して織田氏の位地最も便なりしかば逐鹿場裏第一着を贏ち得たりき。越後の上杉謙信の如きは永祿四年入京して將軍義輝に謁しその偏諱を賜はり、更に參內して天盃及び御劒を拜受しぬ。この時將軍に約するに他日入京して、輦下驕傲の輩幕府の蠹害の徒を除かんことを以てせりと云ふ。然れども謙信南に甲斐の武田氏・相模の北條氏に牽制せられ、畠山・神保・椎名諸氏及び一向宗徒加・越・能の地に蟠踞して其上京の路を杜げり。かの甲越の軍殆んど三十年間或は和し或は戰ひしが如き、皆是れ利害の衝突互に相控制するの致す所なり。

初め信長・義昭を奉じて入京するや、越前の朝倉義景を招きしが來らず。是

謙信上京す

信長北陸に入る

に於て信長・義景が將軍の命を奉ぜざりしを名とし、元龜元年四月親ら兵を率ゐて近江・若狹を經て越前に入り、手筒城・金崎城を攻めて之を陷る。時に近江の淺井長政・義景に應じたりしが故に、信長一旦引還りぬ。かくて信長が近畿經營に一大障害たりしは淺井朝倉の兩氏也。されば信長六月に再び出でゝ近江姉川に兩氏の連合軍を破り、更に天正元年八月義景を刀根山に破りて、越前に入り連捷して進む。義景支ふる能はざるを知り、居城一乘谷を逃れて山田庄に入り援を平泉寺の僧徒に求めしが、僧徒却て信長の兵を導きぬ。義景進退窮し終に自殺して茲に朝倉氏滅亡す。敏景の簒奪後五代に傳へて百餘年なりき。翌二年九月信長・前田利家を近江長濱（一萬石）より越前府中（南條郡武生町）に徙封して三萬三千石を食ましむ。是れ前田氏が北陸に入るの始めなり。

朝倉氏亡ぶ

前田利家越前に封ぜらる

今や信長近畿・南越の地方を掃蕩し畢るや、先きに陽に禮を厚うして款心を求めたりし上杉氏を滅さんと謀りぬ。當時武田信玄は已に歿して在らず。天正三年信長大舉して北陸道に入り、部將柴田勝家・羽柴秀吉・丹羽長秀等をして加賀の江沼・能美二郡を略定せしむ。是の時勝家の功諸將に冠たり。信長謂ら

信長大舉して北陸に入る

く、越前は上杉氏の衝に當り且つ人心反覆常なし、文武兼備の者にあらずんぼ任じがたしと。乃ち勝家を越前に封じ北庄（今の福井市）に居らしめ、若狹を丹羽長秀に與へぬ。翌年三月謙信出でゝ越中の蓮沼・富山諸城を陷れ、加賀に進入して津幡に陣し、使を七尾城に遣し來降を勸めしが聽かず。依て能登を進剿せんとせしが、土寇大に起り謙信の不意を襲ふ。陣中爲めに崩潰す。此の時俚謠あり。

柴田勝家越前に封ぜらる

謙信七尾城を陷る

越後をとりやる獅虎さんは、關東表は御照しあるが、加賀の槍には御曇りやる。

謙信離散の兵を聚め、十一月津幡を發し七尾に向ひ、翌五年閏七月七尾城を圍む。九月に至り城中內應するものありて漸く陷りぬ。かの人口に膾炙する霜滿軍營秋氣淸の一首は、蓋し此の時九月十三宵陣中賞月の作なり。謙信能登を併得して加賀に歸り松任城に向ふ。信長之を聞き柴田勝家・佐久間盛政・前田利家等をして赴き援はしむ。謙信急に松任を攻め陷れて歸國しぬ。

天正六年三月謙信歿す。享年四十九。法名を不識院殿大僧都法印心光宗直

謙信歿す

越後亂る

信長越中に佐々成政に與ふ

佐久間盛政加賀に封ぜらる

大阿閑梨と號す。是より先謙信越後及び越中の半を以て、養子景勝（實は長尾政景の子）に授け、能登・佐渡を養子景虎（實は北條氏康の子）に與へて分れ居らしむ。謙信歿するや二人襲封を爭ひ北越の地方大に亂る。信長之に乘じ志を北陸の地に逞うせんと欲し大に計畫する所あり。即ち七年（或は六年と云ひ八年と云ひ或は九年とも云ふ）佐々成政に越中一國を與へたり。是れ富山の神保氏を斃して越後を窺はしめんが爲ならん。信長の諸將を封ずる、未だ其の地を略取せざるに先だち、之を與ふること往々これあり。是れ蓋し攻擊の諸將をして奮勵せしめんとするの意に出でしものならん。翌年柴田勝家・佐久間盛政・德山則秀・拜郷家喜等加賀に入りて諸處に一向宗徒を掃蕩し、その根據たりし御山城を陷れ全く之を殄滅しぬ。是に於て信長・石川・加賀二郡十三萬石を盛政に與ふ。盛政御山城を修築して之に治す。實に御山の稱を尾山と改めたるは此の時に在り。その他則秀は松任城に、家喜は大聖寺城に各〻配置せらる。又た蠣に畠山氏の七尾城を奪ひ能登を押領したりし溫井景隆・三宅長盛の二人信長に降りしかば、前田利家・菅谷長頼をして假りに能登の國事を理せしむ。利家・菅原（羽咋郡）に居りて之を治せり。

上杉氏越後を領す

利家能登に移封せらる

是時越後國人黨を樹て景勝・景虎に分屬して相爭ひ、景勝は武田勝頼の援を得、景虎は北條氏政の救を得たりしも、景虎終に敗れて上杉憲政の北河館に自殺し景勝獨り盛なり。天正九年二月勝家・利家・成政等相率ゐて入京するの虛に乘じ、景勝河田豐前をして松倉城を發して小井手城を圍ましめ、別宮府峠の二城を陷る。盛政之を聞き奇計を以て之を復しぬ。次て勝家・成政歸國するに及んで松倉の圍解けたり。是の年十月信長・利家を能登に移封し、二十三萬三千石を食ましめ七尾に治せしむ。利家の舊封越前府中三萬三千石は之をその子利長に與へぬ。十年三月富山城主神保氏張の家臣亂を作し城を奪ふ。勝家・成政・利家等兵を出し擊て之を平げ、更に進んで景勝を討たんとし、先づ魚津城を陷れしが、六月信長本能寺に弑せらるゝの訃至るや、利家七尾に歸り歷〻勝家を促して明智光秀を討ちて主讎を報ぜんことを勸めたりしが、未だ出づるに至らずして羽柴秀吉先じて光秀を誅し、こゝに豐臣氏・織田氏に代るの基を開きぬ。

秀吉・信長の仇を復して諸將の間に重きを爲すや、織田氏の宿將中心不平を

抱くものあり、勝家の如きも秀吉の下風に立つを快とせず、盛政の如きは陰然能登を兼併せんと計れり。此の間に處して利家は一方には秀吉・勝家間の和解に盡力し、一方には自家盤據の計を講じぬ。十一年勝家兵を出して秀吉を攻むるや、利家盛政之に應じ、連合して三月近江賤ヶ嶽・柳瀬・別相山の地に出陣し秀吉を邀擊し却て大に敗られ、利家は府中に勝家は北庄に退く。秀吉進んで越前府中城を圍む。利家等能く拒ぐ。秀吉堀秀政をして和を講ぜしむ。

豐臣秀吉北陸を道に進入す

豐臣・前田の相親しむの厚きこゝに始まると謂ふべし。秀吉更に進んで北庄城を圍む。勝家支ふる能はざるを知り終に自刃して死す。實に是の年四月なり。

柴田勝家死す

是より秀吉直に加賀尾山城に入り佐久間氏の殘黨を掃蕩し、利家に石川・加賀二郡を加封し越中を鎮せしめ、利長を松任四萬石に徙封し府中を除く。前田氏の尾山城即ち今の金澤を治所とする此に權輿す。又た越中の佐々成政秀吉に和を乞ひて全きを得たり。五月秀吉越前（勝家の舊封五十萬石）若狹及び加賀の江沼・能美二郡を以て丹羽長秀に與へ、七十萬石を食ましめ北庄に移り治せしむ。其他大聖寺城を溝口秀勝に與へ、小松は舊に仍りて村上義明をして守らしめたり。

前田氏金澤を治所とするの始

秀吉北陸諸國主を定む

天正十二年秀吉尾張に入り織田信雄と戰ふ。時に佐々成政信雄に應じ、又陽に利家に結びて利家の子利政を養ひて子と爲す。八月利家・成政の密謀を察して加賀朝日山城（河北郡田近村）を築き、七尾・德丸・津幡・鳥越の諸寨を堅む。成政俄然朝日山を襲ふや利家直に赴援す。實に前田・佐々兩氏の和親是に破裂しぬ。次て成政末森城（能登羽咋郡末森村）を攻むるや、利家赴き援ひて大に之を破り退けぬ。翌年二月には利家越中を討ちて蓮沼（礪波郡埴生村）に勝利を得、四月成政應巢城を攻めしが利家の爲めに破らる。爾來兩氏の爭鬪絕えず。終に八月關白秀吉大兵を率ゐて北陸に入る。利家之を尾山城に歡迎し自ら先鋒となり進み戰ふ。秀吉木村秀俊を遣し盟書を上杉景勝に致して成政を援くる勿らしむ。景勝之を諾す。是に於て成政大に窮し終に來り降りぬ。乃ち之を釋して越中新川郡に封じ富山に居らしむ。秀吉歸路再び尾山を過ぎ越前に至り、丹羽長重（長秀の嗣）の所領越前及び加賀の二郡を沒收し堀秀政を以て之に封ず。九月秀吉京に歸りて利長に越中三郡（礪波射水婦負）を與へ守山城に居らしむ。翌年五月上杉景勝春日山を發し尾山城に前田氏と歃を結び、更に入京して秀吉と款を通じぬ。

前田佐々兩氏の不和

秀吉大舉して北陸に入る

上杉景勝入京す

成政肥後に移る

天正十五年六月秀吉佐々成政を肥後に移し、その所管たりし越中新川郡の地は一時之を利家に預け治せしめたりしが、幾もなく加封となしぬ。是の年秀吉島津氏を征するの時、丹羽長重の部下法を犯せしを以て、長重の若狹八萬石を沒して加賀の松任四萬石を與へ、淺野長政をして一時若狹を領せしめたり。次て十八年秀吉小田原の北條氏直を討つに際し利家・利長軍に從ふ。三月利家北陸七國總督と

前田利家像

北陸七國總督

爲り、越後の上杉景勝松任の丹羽長重佐柿若狹の木村重高及び信濃上田の眞田昌幸之に副たり。七月小田原城陷り關東の地平定するや、秀吉・利家を以て陸

尾山を改めて金澤と稱す

金澤の名稱由來

奥撿田總督と爲し經界を正し田制を定めしむ。十一月に至り利家其の任を遂げ尾山城に歸る。次て文祿の外征起り秀吉自ら肥前名護屋に出て、出征の諸將を總督するや、利家從ひて名護屋に在り、利長は命を受けて北陸に留守し、加賀能登の舵師をして敦賀倉庫の糧米を九州に轉輸せしめたり。是の時に當り文祿元年二月利長大に尾山城壘を修築し、小立野の山腰を開鑿し地中に樋を設けて水道を引く。是より尾山を更めて金澤と稱す。實に今日の金澤市なり。茲に少しく金澤の名稱に就きて述べんに、三州志金城名號來因の條に詳說あり。其略に云はく、金澤・尾山・御山の三異名は同一城にして、尾山は石川郡山崎山の尾に在るが故なり。或は白山の尾に在るを以て稱するなり。故に尾山は峽山と書する最とも穩當なるべし。而して金澤城地は曆應康永の比を歷て、享德二年に至て漸く城地となり。後三十餘年を經て長享元年の比城地漸く固く、本願寺の釋徒推崇して加賀の御山と稱すと云ふ。次て佐久間盛政僧徒の所名を忌みて古號の尾山に復せしならん。金澤城の稱は元祿元年利長始めて命名せし如く傳ふれども、文治三年加賀の井上左衞門の從士に金澤源

次あり。此者疑らくは金澤に住せる士なるべし。然れば金澤の號六百年前既に唱へしものか。その後は天正四年加賀の賊將より京本願寺へ贈りし書に、「於金澤御堂云々」と見え、同五年上杉謙信加賀へ出軍の時、萬里和尚と同じく城東茶臼山に登りて城を臨みし時の詩に、「君祈萬歳白山社、臣守四方金澤城」の一聯あり。是等を以て觀れば金澤の號其の來ること久し。されば文祿元年利長が修築の際尾山の名を除き、金澤の舊號に復したるなるべしと。

上杉氏勝會津に移封せらる

上杉景勝天正十五年七月を以て井地峯を攻めて之を拔き、更に新發田城に薄まり十月之を陷る。越後悉く平ぎぬ。翌年兵を佐渡に出して全く之を領し、境土益〻拓け百二十萬石を食みて、加賀の前田利家及び德川家康・宇喜多秀家・毛利輝元・上杉景勝と俱に豐臣家五大老たり。慶長三年三月會津に徙封せられ、舊封莊内を併せて百五十二萬石を食む。上杉氏越後を管すること殆んど二百五十年、恩顧の深きと察すべし。されば其移封に際して越後古族・舊家及び名刹の會津に移轉する者多し。但し佐渡は猶舊に仍りて上杉領として存したりしが、慶長五年關原役後は全く德川氏直轄の地とはなりぬ。上杉氏に次て越後に封せられたるものは、越前北庄に在りし堀秀治（秀政の嗣）にして、三十五萬石を領して春日山に入部せり。當時上杉氏より堀氏に引渡したる戸數人口の概算は、堀家越政錄に載せて越後國七郡名主以下家數凡十八萬五千軒此人數凡百十一萬人、外に寺社門前本主並に牢人分除之云々とあり。今左に豐臣氏時代の北陸諸侯封邑表を掲げて便覽に供す。

堀秀治越後に封せらる

若狹小濱	六萬二千石	木下勝俊
高濱	二萬石	木下利房
越前北莊	八萬石	青木一矩
敦賀	五萬石	大谷吉繼
府中	五萬石	堀尾吉晴
藤枝	五萬石	丹羽長昌
大野	五萬石	織田秀雄
丸岡	四萬六千石	青山宗勝
安居	壹萬石	戸田重政

加賀　金澤　八十三萬五千石　前田利家
小松　十二萬五千石　丹羽長重
大聖寺　七萬石　山口宗永
能登　七尾　二十壹萬五千石　前田利政
越中　前田領
越後　春日山　三十五萬石　堀秀治
本庄後村上　九萬石　村上義明
新發田　六萬千石　溝口秀勝
藏王後長岡　三萬石　堀親良
佐渡　上杉領

前田利家歿す

慶長三年八月秀吉薨し、翌年閏三月利家亦た大阪に歿す、年六十二從一位を贈らる。四月加賀石川郡野田山に歸葬し、高德院殿桃雲淨見大居士と釋謚す。是れより豐臣氏の勢威頓に地に墮ち、德川家康の權勢獨り熾にして終に關原の役となりぬ。是より先上杉氏移封に際して、上杉氏の重臣直江兼續・不田三成と相謀り、德川・上杉兩氏を鬪はしめ其の間に乘じて大に爲す所あらんとす。兼續謂らく上杉氏の新領會津は恩顧日猶淺きを以て說くに足らずと、即ち私に腹心の臣數輩を越後に遣し、神官・僧侶等を敎唆して一揆を起し遙に會津に呼應せしむ。かくて慶長四年八月より翌年六月まで、越後國民所在に蜂起擾動す。所謂上杉氏遺民一揆是れなり。然れども堀秀治能く之を鎭制しぬ。その功を以て加封せられて六十餘萬石を領し、同十二年に至りて新城を頸城郡福島（中頸城郡巻日新田の北）に築き春日山城より移り治せしが、間もなく十四年忠俊の代に一族鬩爭の爲めに斷絶しぬ。蓋て關原役に於ける北陸諸侯の去就を按するに、若狹の兩木下氏、越前の大谷・織田・丹羽・青山・青木・加賀の丹羽・山口・諸氏は西軍に屬し、越前の堀尾・加賀・越中・能登の前田・越後の兩堀氏・溝口・村上・諸氏皆東軍德川方に隸しぬ。最とも七尾の前田利政（利長の弟）は去就分明ならず、當初は利長と俱に兵を出し、山口宗永を大聖寺に圍みて之を陷れしが、關原出陣の期に臨んで豐臣氏輔翼の念熾に終に利長と和せず。又た出兵せざりしかば事平くに及んで封を除かる。後慶長十九年大阪の役作るや、家康・利政（剃髮して宗悅と云ふ）を辟

上杉氏遺民の一揆

關原役に於ける北陸諸侯の向背

すに十萬石を以てすれども應せず、秀頼亦た加賀・越前二國の封を以て招きしも可かさりき。關原役後家康大に諸將の功を論し賞を行ふ。即ち京極高次を若狹に封し。小濱に居らしめ、前田利長に加賀・越中の外に能登を增封して百十九萬餘石を食ましむ。

九　德川幕府時代

後陽成帝慶長五年九月、東西兩軍大に關原戰ひ東軍大に捷ち德川氏の威武頓に揚り、四方の豪族皆震慴し旬月の間に海內擧て德川氏に服するに至りぬ。同八年二月家康征夷大將軍に拜し淳和・弊學兩院別當源氏長者に補し、隨身兵仗を賜はり德川幕府の基は開かれぬ。抑德川氏の諸侯を各地に封ずるや、親疎の配置・大小の分布・其の宜きを熟考し互に相箝制せしめたり。今北陸諸侯に就て見るに、京畿に近邇せる越前は北陸の要衝にして且つ加能・越には豐臣氏股肱の前田氏大封を領して雄視するあるを以て、家康は慶長六年二月長子秀康を越前に封し北莊に居らしめ、近江・美濃の封を合せて六十七萬石を食ましむ。實に二代將軍秀忠の實兄にして豐臣秀吉の養子なり。されば俗に制外の御家と云ひ、越前黃門の名四隣に振ひ、近畿北陸の重鎭たりき。次て十二年秀康病歿するや子忠直之に代りしが、後罪を獲て豐後に流され、弟直昌越後より移封せられて五十二萬五千石を領しぬ。寬永元年北莊を改めて福井と云ふ。北莊或は北條に作る。即ち足羽御厨の北莊なり。福井の名稱につきては諸說あり、或は秀康築城の時その城中天守閣に一井あり、此の井に因みて命名したりと云ひ、或は足羽神と同功の神に福井神あり、是れ福井稱號起る所以なりと。今俄に判斷しかたきも前說稍信ずべき歟。

越前黃門

福井の名稱來因

慶長十四年越後の堀忠俊幼少にして家老堀直清政を專らにし、終に內訌を生じて福島城六十餘萬石を除かる。その後に家康第六子忠輝を移封せしむ。忠輝高田城に入部し溝口・村上以下諸氏を旗下に屬し、北國外樣諸侯を控制したり。然れども忠輝放縱にして重鎭たるの器なく、又た大阪の役に際して先鋒を命ぜられしも、機を失して先鋒の命を果さゞりしかば、終に元和二年七月封地を沒收せられて放たる。是より高田城は德川譜第の名臣酒井家次之を

堀氏國除せらる

前田氏

前田氏の支族

若狭の酒井氏

領し十萬石を食む。その他北陸幾多の小藩は之を後出の封邑表に讓りぬ。

徳川幕府を通して加能越の三州に大封を領して、永く北陸の地に割據したる前田氏は、實に機宜に投じて敢て徳川氏の歡心を失はざりしもの、是れ蟠據世襲の長き一要因たりしものならん。夫の關原役起るや、利長は家康に與みしてその大勝に與りて功あり。役後實權徳川氏に歸するを見るや、彼は慶長七年正月を以て江戸に登りて徳川氏に伺候す。實に豐臣恩顧の大名中卒先の擧たり。樽俎折衝の巧なる老狡なる家康猶且つ辟易して之を京都に避け、世子秀忠をして之に當らしめしにあらずや。前田氏の徳川十五代の間、改易減封の厄を免れしもの偶然にあらざるを知るべし。又たその支藩たる富山前田氏は、寛永十六年六月本藩第三代の主利常の二子利次封を受けて十萬石を食み、大聖寺前田氏は寛永十五年一國一城の命ありしとき、大聖寺城將に廢せんとせしに際し利次の弟利治是れに居館を定め、寛文四年に至り七萬石の分封となり、後增して十萬石となりぬ。若狭は慶長十四年京極忠高父高次の封を襲きて之れを領したりしが、後寛永十一年出雲の松江に徙され、酒井忠勝その後を受け若狭の外越前敦賀郡等十二萬三千石を食み、小濱城に治し邸宅を諸將士に與へ、或は市場を開設し、或は松樹を熊川敦賀及び丹後街道に栽え、又た多く槻樹を國中に植え治績大に擧り人民大に悅べり。その子孫相續きて幕末に及びぬ。

高田藩主の改易

佐渡

徳川幕府の政策として諸侯の改易國除を行ふこと頻繁なりしかば、北陸の諸藩中前田氏の外二三を除きては、諸藩主の變易甚だ多く一々枚擧に遑あらず。其の一例を示さんに、越後高田藩の如き、慶長十五年松平忠輝封を受けて入部せしが、元和二年に除封せられ、酒井家次松平忠昌相次で封ぜられしが、同九年には松平光長封を受け二十六萬石を領して、天和元年に及び除封せらる。貞享二年稻葉改通、元祿十四年戸田忠眞封せられしが皆久しからず。寶永七年松平定重桑名より轉封せられて、十一萬石を食み五代に傳へしが、寛保年間に至りて榊原政永姫路より徙封せられ、十五萬石を領してより子孫相承け皇政維新に及びぬ。その他諸藩の改易又た推して知るべし。

佐渡は慶長六年徳川幕府直轄の地と爲し、河村彦左衞門田中清六二人をし